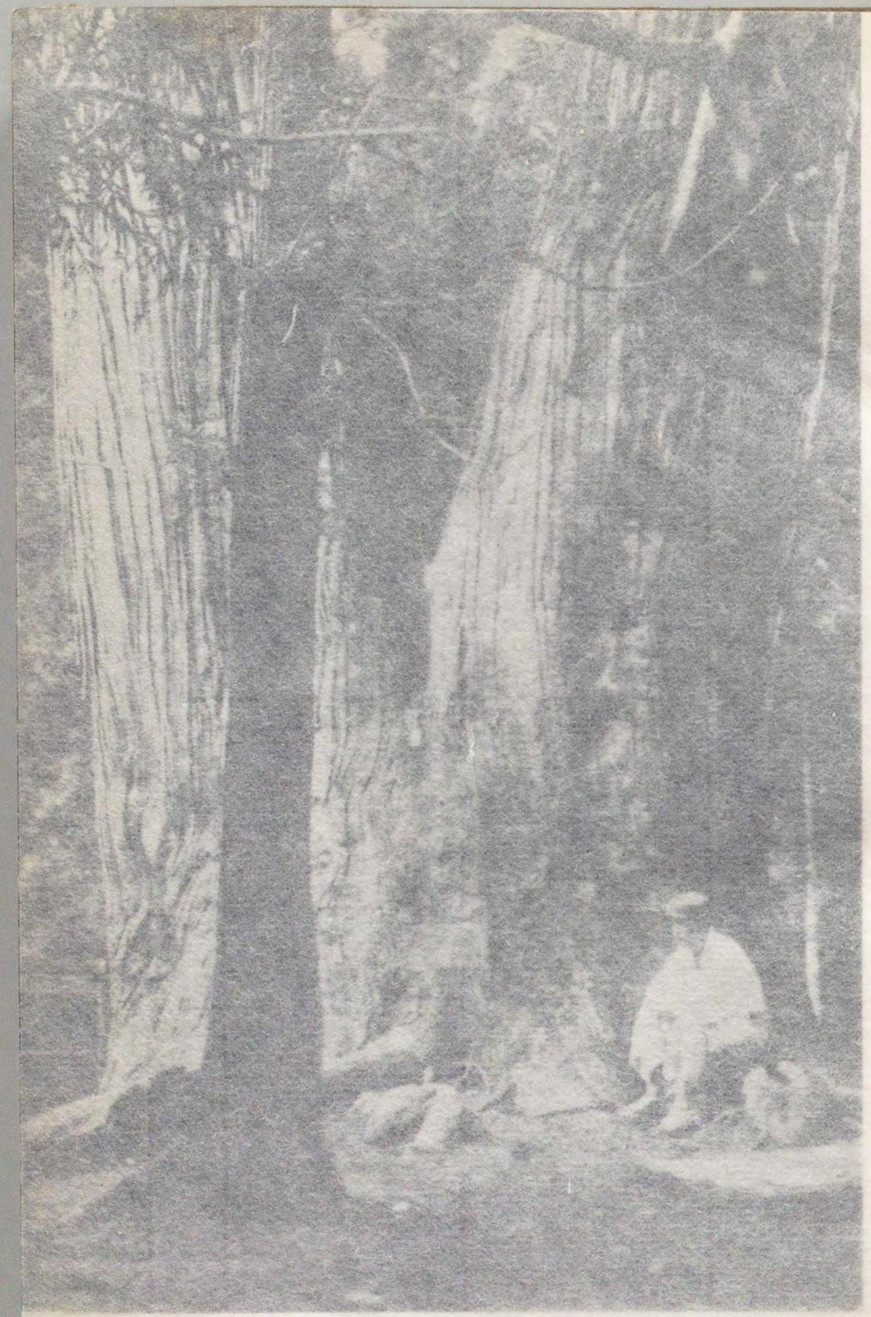
918.6
N266n
K
00539963

中勘助全集

第二巻

小宮豊隆
和辻哲郎　編集

角川書店



明治44年8月、信州野尻湖 柳天島にて
「高守」執筆當時

918.6
N266n
K

国立国会
36.2.-6
図書館

539963

明治44年８月，信州野尻湖 辨天島にて
「島守」執筆當時

918.6
N266n
K

国立国会
362-6
図書館

539963

目次

提婆達多　三
犬　一五九
菩提樹の蔭　二二五
短篇（二）　二七五
島守　二七七
貝桶　三一一
闘球盤　三三三
母の死　三四〇
黒幕　三五七

チャリネ　三五一
柳先生　三六八
林　園　三七七
本朝二十四孝　三七五
網ひき　三七三
きもの　三七七
あとがき　三六三

提婆達多

前篇

一

釋迦族の一支流拘利族の王にして拘利の城主なるスプラブッドハ王が首圖馱那王を訪問するといふ噂は迦毗羅婆蘇都の全市を揺り動した。從來釋迦族の諸王のあひだには色々な理由から時々かうした交歡が行はれるのでたゞそれだけならばなんの不思議もないのであるが、今度はスプラブッドハ王がいつになく最愛の王女を同伴してくるといふことがなにか一大事でゞもあるかのやうに迦毗羅婆蘇都の城内から市の外壁の外にある賤民の小屋の隅々までに非常な期待と騒擾を惹起したのである。それは、人々は今度の訪問をひとつには王女の婿選みのためのものであると考へたからであつた。さて當の王の意中は知らず、此際慣例として同族の諸王のところから各王子たちが歡迎の宴に列るために名代として迦毗羅婆蘇都へ派遣され、招待されるので、當推量とはいひながらかやうな想像もまつたく據り處のないものではなかつた。主客雙方の重な人々は主人側では首圖馱那王、王子悉達多、同難陀、來賓側ではスプラブッドハ王、王女耶輸陀羅、阿彌

都檀那王の名代王子提婆達多、道盧檀那王の名代摩訶那摩及第二王子阿兔樓馱、シュクローダナ王の名代跋提唎加、そのほか扈従の貴族高官たちであつた。スプラブッドハ王は別としてこれらの諸王は皆兄弟なので、従つていふ迄もなくこれらの王子たちは従兄弟同士であり、首圖馱那王とは伯父甥の間柄であつた。

迦毗羅婆蘇都は國賓歡迎の準備に湧きかへつた。天惠を享けて豐饒な國土に比較的安穩にして單調なる生活を營んでゐた古のこれらの人々——國王も臣民も——にとつてはかやうなお祭騒ぎはその政略上の理由はさておいてもやはりなくてならぬ最樂しい行樂のひとつであつた。そのうへ極めて善良であると同時にかなりな虚飾家であつた首圖馱那王は小國ながら全釋迦族の盟主たる己の地位に對して出來るだけ大な自信と矜持とをもつてたので、その富と力を有利に且愉快に誇示することの出來るこの絶好の機會を到底空しく看過することは出來なかつた。彼は大袈裟な國賓歡迎の最熱心な計畫者であつた。すべては手順よく運んだ。拘利と迦毗羅婆蘇都をつなぐ道路は貴賓の行列の通行にさしつかへないやうに注意深く修繕され、掃除された。隊商の車の轍はうづめられ、邪魔になる藪や倒れ木は截拂はれた。そして市外十町あまりのところを流れる川の渡渉場のこちらの岸から市城に接近して程よく擴つてる美しい草原まで一定の距離をおいて涼しげな綠門が建てられた。そこには豐滿限りなき印度の自然が供給するあらゆる色、あらゆる形、あらゆる匂の花と葉をもつて様々な縞や模様がつくられ、道路には一面毛氈のやうに柔い草木が

敷きつめられて惜しげもなく種々の香水がふりそゝがれた。そして迦毗羅婆蘇都の城は極樂鳥のやうに紅白紫黄の大旗小旗をもつて飾られた。まことにそれは熱帶の國のみがひとり誇り得るところの豪奢であつた。

二

當日太子の悉達多は美々しく裝うた一隊の儀仗兵を率ゐて道の半程にある檬果樹の森まで出迎へた。第二王子の難陀はこれも慣例に從つて前日から到著してる名代の王子たちの接伴役として後に殘つた。恐しくたどたどしい、そして妙に落ちつかない幾時が過ぎた。城壁の內外を問はず路傍、廣場、木の下、物蔭、到る處蟻のやうに群つて早朝から待ちくたびれてる市民の耳に遙に奏樂の音が聞えて彼等の胸を轟せた。それは國賓の行列が渡渉場を越えたことを知らせるための合圖に始められた先頭の迦毗羅婆蘇都宮廷音樂隊の奏樂である。それと同時に首圖馱那王をはじめ各王子大臣以下は城門から出て綠門の一方の口が例の草原に一大圓堂を造つてる處まで行つて行列の來るのを待ちうけた。樂の音は次第に高くなり、それに步調をあはす人馬の足並がだんだんはつきりと見えてくる。武器や、甲冑や、その他の金具の眩く光るのが見える。行列は綠門の切目へくるとぱつと日光に照されてまた次の綠門の蔭に沈んでしまふ。さうかうするうちに見るも可愛らしい先驅の一隊が現れた。それは迦毗羅婆蘇都の貴族の子供たちで、彼等は行列のは

るか先に雪白の駒を驅りながらその振立る頸の兩脇につけた花籠から間なく暇なく色々な花を散らして歩く。彼等は待設けた群集の最初の歡呼に無邪氣な笑顏をもつて答へながら王や貴賓たちのはうに一禮しつゝ草地を横ぎつて城門のはうへまでも花を撒きながら進んで行つた。波濤のやうな奏樂が歩一歩と近づいてきた。それは滿身花をもつて飾つた樂人たちが今日を晴れと力をこめて奏する太鼓、小鼓、笛、篳篥……等の合奏であつた。その次に牛革製の大盾を背負つた歩兵がつゞいた。彼等の或者は等身の弓を持ち、或者は短い投槍を持つて、そしていづれも重たい段平を帶びてゐた。それから思ひおもひの武裝をしたそれぞれの一隊が續いた後に最後に一樣に紺黑の馬に跨つて小盾と二筋の長槍を携へた騎兵の一隊が來た。人間の息と、獸の息と、汗の匂と、革具の匂と、蹂躙られる葉や花の匂と、香水の匂とが甘酸ばく濛々といきれたつたなかを少し間をおいて大なる好奇心と期待をもつて目をみはつてる市民と若い王子たち——彼等は重要な利害關係をもつてるだけそれだけ一層緊張してゐた——のまへに、東道の悉達多王子の後から山のやうな額を並べてすばらしい二頭の白象が現れた。それは貴い香油で皮膚を磨かれて、鞦も、轡も、悉く金色に輝いてゐた。そしてそのかた方の象轎には寶冠をいただき半白の長髯を垂れたスプラブッドハ王、他の方にはまだやうやく綻びそめた蕾の花の耶輸陀羅姫が乘つてゐた。萬人の眼は期せずして皆王よりはこのはうに集つた。

三

提婆達多の大な眼は鷹のやうに貪婪に輝いた。姫は純白の絹布を纏つて眞珠の頸飾とおなじ珠の手纏をつけてゐる。彼女は人々の眼にけおされるやうに伏目になつてるのでやさしげな瞳がかば長い睫毛にかくれてゐる。彼女はどこもかしこも尋常に出來てるがどこといつてとりたてゝ人目をひくやうなところはない。たゞ體が程よくすらりとしていかにも釣合がよい。そして流石に王女にふさはしくどことなく靜に、奥ゆかしく、情深さうにみえる。

提婆達多は見た。そして

「なんだ」

と思つた。彼は勝手に孔雀のやうな乙女を想像してたのであつた。

「己はまあまつぴらだ」

いたくも期待を裏切られた彼は首圖駄那王や他の王子たちと一緒に行列にくははつて城門をくぐりながらなんだかうまうまと騙されたやうな不滿を感じた。まことに耶輸陀羅はひとたび翼をふるつて衆鳥を驚かすところの孔雀ではなかつた。やさしい鷗であつた。

提婆達多は幼少の時から宮女たちの寵兒であつた。彼がまだ十歳をこすかこさぬほんの子供であつた時から既に彼を戀する女さへあつた。彼は彼等の嘆聲を耳にし、またその抱愛をうけてい

つしか己の容姿について抜きがたい自信、自負心をもつやうになつた。そしてそれが強くなればなるほど美しくない者に對する侮蔑の念が深くなつた。容姿、それは彼がすべての人間を評價するにあたつて常に最初の條件であつた。やうやく長ずるにしたがつて女たちの讃嘆は戀となり、抱愛は狂しい情慾となつた。彼が眉目秀麗なる一個の青年となつて烈しい慾望に戰きつゝ若い獸のやうに色を漁つた時彼の的となつた女は悉く手の下に狂喜して身心を獻げて奴隷となつた。提婆達多(だつた)王子、それは三千の佳麗の耳朶に、嬉しく、甘く、懷しく、快い響をつたへる名であつた。彼は獅子のごとく雄々しい容貌と肉體をもつてゐた。加之彼の性格、所行とは似てもつかぬ、最初の一瞥をもつて全き信賴と愛慕とを獲得するに足るところの天成の氣品をそなへてゐた。そしてひとたび彼が相手の歡心を得ようとして笑顔をつくる時にかの獅子は忽然として愛すべき鳩となり、その巧妙な態度と話ぶりとはあらゆる彼の容貌の缺點——彼とてももとより缺點はあつた——を蔽ひかくすに十分であつた。かやうにして秋波と密語のうちに人となりつゝ、幸多き日のもとに生れて自ら位と富と力に事を缺かなかつた彼はひたすら女の渴愛の的となり、女に貪り飽くことをもつて第一の望としたのである。

四

翌日には城外の廣場で種々の競技が行はれた。廣場の一方をかぎつた涼しい尼拘樓陀(ぬやぐろーどは)の森の蔭

に天幕が張られてその柱は悉く花をもつて包まれた。その傍にある意味で今日の競技會の司であるところの耶輸陀羅(やしょーどはらー)姫が座を占め、左右には各王子、貴族、そのほか宮女たちが綺羅星のごとくに列つた。廣場の周圍は兵卒、庶民等の群集によつて寸隙もないほどにとり圍まれた。

競技は萬人の胸を轟かす蔘々(とうとう)たる太鼓の連打によつて始まつた。競馬、徒歩競走、相撲、槍術、競射等凡そ戰場に役立つべきあらゆるものはおほかた殘らず行はれた。雄壯な戰車競走がすんで最後の劍術の仕合になつた。首圖馱那(しゅつどほーだな)王はこの仕合を特に王子たちのために選んだので、それは競技者にとつても見物にとつても容易ならぬものであつた。人々はその選手が各の支族を代表する王子であるといふことのほかになんとなくそこに優勝者への褒美として耶輸陀羅(やしょーどはらー)姫が賭けられてゐるやうに思つた。高貴な選手たちも同じ思であつたが、よしそれが事實とならうとなるまいと、假にも各我一族を代表して二人の王と、若い王女と、並居る廷臣と、宮女と、幾萬の人民のまへに、ひと度敗れては再び雪辱の日を期しがたい大事の仕合であると思へば彼等の胸は流石に烈しく鼓動せざるを得なかつた。彼等は支度のために席を立つて彼方の天幕のなかに姿を消した。

やゝあつて合圖の太鼓がひときは力強く鳴り渡つた。場内の空氣は妙にひきしまつた。その時王子たちは各甲冑に身を固め、面頬だけはつけずに小姓に持たせてかた手に小形の圓盾をさげながらしづしづと現れた。彼等の武者振はあつぱれ六人の神將のやうに見えた。中にも他に擢んで

て丈高く牡牛のやうに屈強な難陀と提婆達多の姿があたりをはらつてゐた。彼等が王たちの玉座にむかつて敬禮した時に首圖馱那王はこれらの賴もしい未來の釋迦族の支配者に對して抑へきれぬ矜りと喜びの微笑をもつて點頭いた。その時スプラブッドハ王からこの晴の仕合の一の勝利者への曳出物として前日王女の乘用となつたあのすばらしい白象が曳出された。それは鞦も、轡も、鞦も、悉く黃金をもつて飾つたうへに金銀の瓔珞を纏はれ、珠玉を綴つた流蘇をかけられて、その背には純白の絹布を、そのうへに燃えたつやうな緋を敷き、さらに濃い紫をかさねてあつた。彼が山のやうな頭をゆさゆさとゆりながら象師に曳かれてのつさのつさと步み出た時に人々は皆覺えず讃嘆の聲をもらした。もはや誰一人この象とともにかの王女が賭けられてることを疑ふ者はなかつた。利口な象は現在己の位置の如何なるものであるかをさとつたかのやうに大きな耳朶をあふつて心地よげに瓔珞の音をきゝながら鼻を卷きあげてひと聲高く吼えた。古の印度の日は驚嘆の眼をみはつてこの場の光景を見降した。首圖馱那王は我劣らじと、釋迦族の重寶といはれてるかの驍勇かくれなかつた父シンハハヌ王の手馴れの弓を賭けた。それは故王が數しれぬ戰に於て刃向ふ敵の膽を寒からしめた名だたる强弓である。王子たちは身うちの戰くのを覺えつゝ首圖馱那王の手から籤をひいた。

彼等は籤によつて二人づつ三組に分れた。跋提唎加と難陀、阿兔樓馱と悉達多、摩訶那摩と提婆達多。これらの各組の勝利者三人のあひだに仕合が繰返されて最後の優勝者が稀代の賭物を

授かる名譽と福德とを得るのであつた。

五

難陀と提婆達多はやすやすと勝つた。悉達多は苦戰の末わづかに勝利者の數に入つた。首圖馱那王は二人の王子が揃ひも揃つて勝利者となつたことを內心ひどく喜んだ。三人のあひだにふたゝび籤がひかれた。そして先づ難陀と提婆達多とが勝負をすることになつた。提婆達多はやをら立ちあがつて小姓の捧げる面頬をうけとりながらじつと相手の樣子を見た。王子たちはいづれも釋迦族の名を辱めぬほどの武藝のたしなみはもつてたけれど就中難陀と提婆達多はるかに一頭地をぬいてゐた。それ故最初から提婆達多の眼中には難陀のほか敵はなかつた。その堂々たる容姿といひ、力量といひ、手練といひ、彼のみが恐るべき敵であつた。難陀のはうでもおなじだつた。人々の思もおなじだつた。それ故二人が立ちあがつた時に場內はどよめき渡つた。人々は異樣に緊張して二人の一擧一動をも見逃すまいとした。首圖馱那王は氣が氣でなかつた。彼は啻に我子の一人を勝利者たらしめたかつたのみならず一族の重寶をなるべくならば我家にとゞめておきたかつた。

難陀は提婆達多を見て微笑みながら面頬をつけた。彼は頭をふり二三遍兩肱をあげて肩をゆするやうにしてみた。重たい甲冑の革具がきゆつきゆつと鳴つた。彼等

は長劍をすらりと拔いて互に右手をまつすぐに敵のはうへのばしちやうど劍尖と劍尖とが觸れあふ點に姿勢を正して心に因陀羅を念じつゝ一禮をかはした。勿論劍は危險のないやうに刃をひいて切先を鈍らしてあつた。禮が終ると同時に彼等は「ヤツ」と聲をかけて左手の盾を前に右足をひいて斜に身を構へた。磨きあげた青銅の盾がぎらぎらと日光を反射した。人々は鳴りをしづめて固唾を呑んだ。二人は盾で身をかばひながら敵に毛ほどの虛もあらばつけ入らうとして窺ひあふ。彼等のあひだにはなにか目に見えぬ軛（くびき）のやうなものがあつて支へるものの如く、一定の距離をとつたなり二匹の牛の戰ふやうに凄じく、しかも靜にじりじりと一進一退する。熱しやすい提婆達多（でーばだった）はこみあげてくる敵意が抑へきれなくなつた。彼の眼は血走つた。五體のふるへるのを感じた。そこで彼はわざとすこし退くやうに見せかけた。そして難陀（なんだ）がつけ込んで踏み出さうとするはずみを捕へ後へひいた右足で碎けるばかり地を蹴つて豹のごとく身を躍らせながら「ホー」と聲をかけつつ鐵壁もとほれと敵の胸を目がけて突込んだ。難陀は身を退く暇もなく電光石火と盾をもつて撥ねのけながら反對に鋭く一突を加へるのを提婆達多（でーばだった）は巧にがちりと盾でうけとめてさつと飛びしさつた。人々の口から我知らず感嘆の聲が漏れた。二人は最初の一合で互に敵の恐るべきことを知つた。それからやゝ暫の間彼等は互に虛を見出さうとして右へ右へと廻りあつてたが忽ち雙方同時に突進して猛烈に突きあつた。盾と劍と、劍と劍と、盾と盾と、打ちあひ觸れあふ音がひとしきりつゞいた。さうして息をつぐまもなく喚き叫んで戰つてるうち終に提婆達多

が最初の一點をとつた。その次には難陀（なんだ）が一點を得た。

六

戰は頂點に達した。闘士は逸りに逸つた。彼等は野獸のやうに叫び、野獸のやうに喘いだ。難陀（なんだ）は決勝の一點をとるべく盾を高くあげ、頭を低く、上體を屈めて敵の腹をねらつた。提婆達多（でーばだった）は盾をさげて專ら防禦の位置に立つやうにみえた。その時いかなる虛を見出したか難陀が猛然と飛込んで微塵と突出す劍をこなたは得たりと盾で叩き落すや否や敵が思はず低くした盾をこえて割れるばかりの一擊をその腦天に加へた。人々は覺えずわつと聲をあげた。難陀は終に敗れた。提婆達多（でーばだった）は得意の微笑をとゞめ得なかつた。

さてそのつぎの相手は悉達多（しつだはーるだ）であつた。當の提婆達多（でーばだった）は固より人々も、首圖駄那王（しゅつどはーだな）さへもこの勝負については悉達多（しつだはーるだ）のはうに殆ど期待をかけなかつた。とかく瞑想好きで隱者めいた彼は平生からあまり武藝に身を入れるやうにはみえなかつた。先刻の彼の勝利も寧ろ僥倖といつたはうがよいかもしれない。一方提婆達多（でーばだった）は日頃武術の鍛錬に頗る熱心であり、從つてそれだけの腕前も、自信も、名聲ももつてゐた。それはひとつにはそれが直接間接に婦人の愛慕を得るのに必要缺くべからざることゝ考へたからであつた。それで今日の仕合も彼は初から己一人のために催されるものゝやうな氣がしてゐた。悉達多（しつだはーるだ）の

腕前はわかつてゐる。提婆達多は己の勝利を豫感した。併しながら彼はどうせ勝つものなら悉達多に對し、また首圖馱那王に對してあまり愛想のない勝ちやうはすまいと決心した。そしてそれが結局自分の奥ゆかしさを人に示す所以だと思つた。

それはさうと悉達多にも流石に今日は若い血が湧くやうにみえた。彼は兄弟の讐をかへし、かつは名譽ある一の勝利者とならうと思つたかいつになく意氣込んでゐた。彼らは一禮して立合つた。提婆達多は一所懸命戰ふやうに見せながら乘ずべき機會を殊更に見逃した。悉達多は盛んに突込み打込みした。それを程よくあしらひながら提婆達多は頃を見計つて敵に一點を與へた。人々はわつと喝采した。それほどそれは悉達多にとつての手柄であつた。提婆達多は苦笑した。彼はやつぱり自分が故意に讓つたのだといふことを皆に知らせたかつた。その次に彼は苦もなく一突を敵の胸に加へて一點を得た。悉達多は急込んだ。彼はどうかして決勝の一點をとらうとして猫のやうにねらつた。提婆達多はそれをしをらしと見ながら右に左にあしらつてゐた。彼は綺麗に立派に勝たうと思つた。彼はまた今あの女たちの眼は悉く自分一人に注がれてるのだ。あの王女の眼も自分を見つめてるのだ。そして彼等は皆自分の勝利を願つてるのだと思つた。さう思ふと彼は急にかつと昂奮した。そしてふらふらと足が浮くやうな氣がした。はつと思ふまに敵は彼の盾をこえ心臟部を目がけて猛烈な刺突を加へた。しまつた！　提婆達多は盾をもつて危く敵の劍を撥ねあげた。が、已に遲かつた。劍尖はわづかにそれたばかりで彼の肺部をづゝんと突

いた。彼は思はずたじたじとして後ろにどうと倒れた。人々はどつと聲をあげた。首圖馱那王は飛立つほどの喜びを抑へるためにしかと玉座の端をつかまへた。スプラブッドハ王は無遠慮な大聲をあげて悉達多を譽めた。

七

提婆達多は器量悪く起きあがつて面頬をぬいだ。彼は茫然自失した。大地が足下に沈んでゆくやうな氣がした。彼は凡ての他の人々とおなじく悉達多が將來佛陀となることを知らなかつたやうにこの太子が今日の優勝者であらうとは夢想だもしなかつたのである。提婆達多は我知らず王女のはうを見た。彼女は顔を赤め伏目になつて身じろぎもしずにゐる。彼は譬へやうのない失望落膽のうちに辛うじて慰藉を得た、それは彼女が彼の不幸な敗北を悲しんでくれるのだと思つたから。その時悉達多はかの白象に乘つて退場しながら思ひに沈んで立去りかねてる提婆達多にむかつて挑戰するやうに呼びかけた。

「提婆達多」

提婆達多は愕然として顧みた。そしてこれ見よがしにかの弓を振りかざしてる悉達多を見た。提婆達多はさつと顔色をかへた。そして脣をふるはせながら無言のまゝにはたと相手を睨めつけた。悉達多は嗜みのない我ふるまひを悔ゆるやうに顔を背けてさりげなくそのまゝ退場した。

提婆達多は他の王子たちの後に一人はなれて退場しながら今もなほ彼女の溫みの殘るかと思はれる紫の敷物のうへに坐つてしづしづとひきあげてゆく敵の後姿をいつまでもいつまでも見送つてゐた。

悉達多は何故かゝる思慮をかいた無作法をしたか。それはあまりに自分にも意外であつた勝利に有頂天となつた若者のその場かぎりの出來心であつたか。またはその父とおなじく稀代の重寶を危く我手にとゞめ得た狂喜からであつたか。或は……いづれにせよ彼は提婆達多に對して些の敵意をももつてはゐなかつた。彼は自ら今日の勝利の僥倖であることを知つてゐた。それ故彼の行爲は寧ろ一場の戲と見るべきであつたかもしれない。さりながら彼に於てそれが事實戲であつたにせよ、提婆達多にとつてはそれは決して一場の戲として見逃すことは出來なかつた。彼はすでに萬人の目の前に、殊に幾百の宮女とかの耶輸陀羅のまへに敗北者となつてその半生の矜持に相當した屈辱、訴ふるところもない不平に面もあげ得ずにゐた。彼は幾萬の人にとり圍まれた競技場のまん中で獄門にかけられてる氣持であつた。彼は全身に無數の耳目が出來て凡ての觀衆が彼のために同情の言葉を囁き、同情の眼を注ぐのを見るやうな氣がした。彼はそれがたまらなかつた。彼は常に勝利に耀く者であらねばならぬ。彼は常に讃嘆され渴仰されねばならぬ。彼は常に光背を負うて歩かねばならぬ。然るに今や彼は最もよく考へても他から同情され、憐まれる者であつた。敗北、それは已に彼にとつて十分であつた。かゝる地位に蹴落されたうへに他人から同情され憐まれる、それは口を開いた傷口をせゝられるに過ぎない。

「これは何事だ」

提婆達多は思つた。彼はせめて相手が難陀であつたらと思つた。おなじく敗れるなら敵らしい敵に敗られたい。いはゞ名もない雜兵に首をかゝれたこの屈辱！

八

彼は常々己と全く性格を異にした、陰氣臭い、瞑想好きな、徒に痩せて長大な、武藝や風采を念とせぬ、彼の考に從へば男らしい男ともみえぬ悉達多を好まなかつた。竊に輕蔑してゐた。然るにその醜い腑甲斐ない雜兵は彼の不意を襲つて首をかいたばかりかその面に唾を吐きかけた。彼の血は燃えあがつた。彼はこのまぐれあたりの弱敵に對して消しがたい鬱憤と憎惡を抱いた。彼には今度の出來事の全體が彼を陷れんがために殊更にたくらまれた詭計のやうに考へられた。そしてその卑劣な張本人が悉達多であつたかのごとくあらゆる敵意がそこに集中した。たゞこの際提婆達多の唯一の、無二の慰藉は耶輸陀羅の心が己に注がれてゐると思はれることであつた。彼の負けた時に彼女は顏を赤めてさしうつむいてゐた。

「姬は私の勝利を願つてゐたのだ」

「姬は私の不運な敗北を悲んでくれたのだ」

それは彼が彼女を愛するからではなく、また彼女が今日の仕合の本當の賭物だと思はれ、そしてそれが相手の手に渡つたものであるゆゑに一層彼が喜んで得意にうけることのできる唯一の同情であつた。

「悉達多、誇るなら誇れ、弓や象は貴様にやつた。だが女だけはこつちのものだぞ」

これが彼の苦しい胸のうちであつた。

第三日めの夜には愈翌朝王女をつれて歸城するスプラブッドハ王と王女たちのために盛大な別宴が張られた。人々は、殊に若い王子たちはさうした場合屢人の感ずるやうな強くはないがやるせない、淡いけれども深い一種の寂しさを感じてゐた。就中提婆達多は折角懷にはひつた鳥が逃げていつてしまふやうな氣持であつた。

會場の周圍には適當の間をおいて背の高い大香爐がおかれ、白檀の煙が絶えず立ちのぼつてゐる。到る處に華鬘が懸けられ、花瓶には色の濃い香の高い花が照るやうに盛られた。汁の多い熱帶の果物は山のやうに積まれ、甘蔗酒と葡萄酒は甕に溢れた。人々は皆赤い顏をして元氣のよい笑聲が時々どつと起る。酒豪のスプラブッドハ王は迦樓羅鳥のついた盃からたてつゞけに葡萄酒をあふつた。首圖馱那王も無類の上機嫌でいつになくよく飲んだ。その時王の自慢の迦毗羅婆蘇都宮廷の踊子たちが現れて滿場の大喝采のうちに踊をはじめた。囃子方は一方に座を占めて琴、

笛、篌篌等を合奏する。踊子たちはたゞ腰のまわりに短い絹布を纏い、そのうへにいろいろの花を綴つた流蘇を腰簑のやうに垂れたばかりの裸體で猫みたやうに輕く爪立ちながら囃子にあはせて面白く踊る。彼等はかた手に孔雀の羽をつけた手鼓をもち、かた手の指先で巧に拍子をとりながら、環になり、列になり、往きちがひ、廻りあひながら、紺黒の大きな眼に蜜のやうな媚を湛へ、柘榴の花のやうな脣のあひだから貝のやうな齒をみせながら、褐色の兩腕をしなやかに搖かしながら、乳房や、腹や、背なかや、臀や、腓や、そんなところの筋肉を奇妙にふるはせながら、足くびにつけた鈴の音をかしく踊りまはつた。彼等は寧ろ美しい、若い、馴らされた獸のやうにみえた。若い王子や貴族たちの血は湧きたつた。けれども提婆達多の眼は絶えず耶輸陀羅の眼ばかり執念く追つてゐた。その眼は逃げるやうに始終彼方此方にそらされた。

九

その歡樂の最中にスプラブッドハ王はつと立ちあがつて白髯をゆるがせながらこの度の款待に對して懇に謝意を述べたのち更に言葉をあらためて、この交誼の礎を永久に固めんがために耶輸陀羅を悉達多太子の妃に納れたいと申出した。このことは實はこの三日間の滯在中旣に內談が調つてたので今はいはゞ假の披露に過ぎなかつたのである。それ故それは一も二もなく卽座に承諾された。耶輸陀羅はさつと頰を染めてさしうつむいた。そこに隱しきれぬ嬉しさが漂ふやうに

もみえた。悉達多の顔にも流石に喜びの困惑が見えた。提婆達多は二人の顔を見くらべて憤怒と嫉妬に燃えた。彼は思はず佩劍の柄を握りしめた。一同は立ちあがつて盃をあげつゝ一齊に迦毗羅婆蘇都と拘利の萬歳、首圖馱那王とスプラブッドハ王の萬歳、そして多幸なる花嫁花婿の萬歳を唱へた。提婆達多は過失を裝ひ殊更祝盃をとり落して微塵に打碎いた。その時歌女たちは音樂の音にあはせてことほぎの歌をうたひだした。

拘利と　迦毗羅婆蘇都と
阿夷羅跋提と　祈連禪跋提と
ならび立ち　ならび流るゝ
そのごとく　ならびいませる
さく花の　榮ゆる君
千代にもが　萬代にもが
千代にもが　萬代にもが。

翌朝貴賓たちは各その城に歸つた。

提婆達多は地獄の苦惱をうけた。彼は殆ど狂暴な狩獵に氣をまぎらさうとしたが何のかひもなかつた。さしもに強い彼の肉體も身心の過度の試煉に疲れはてた。彼は眠ることも食ふことも出來なかつた。彼の頭には絶えず一つの事が水車のやうに廻つてゐた。迦毗羅婆蘇都、耶輸陀羅、仕合、悉達多、別宴、迦毗羅婆蘇都……そしてそれはさながら同じ事實が眼前に繰返されるのごとく彼にまざまざと同じ苦痛、憤怒、憎惡、嫉妬を喚起した。彼は一方にその苦悶から逃れよう逃れようとあせりながら一方には反對に飽くまでも我からその苦い記憶を呼びさましてその苦悶に身を委ねた。惡念は悉達多のはうへのみ向けられた。提婆達多はいかなる場合にも決して眞に女を憎むことが出來なかつた、なぜならば一切の女は本來彼に好意をもち、また彼の藥籠中のものと考へてたので。彼は自ら陷つた笑止な惱然な地位に對する羞恥をそのまゝ悉達多に對する憎惡にかへた。

「悉達多がなんだ」

彼は思つた。

「あの陰氣臭いひよろ長い男が。腕前なら男前なら己の足を舐めるにも足らないぢやないか」

とはいへそれはなんの足しにもならなかつた。その腑甲斐ない男にまんまと女を浚はれたのは彼であつた。彼はまた思つた。

「あんな女がなんだ」

そして自分がこれまでに弄んだ、これから弄び得る美しい女の大勢について考へた。また悉達多との艶福の差について。併し今更そんなことは氣安めにさへならなかつたから。

十

卜筮と占星によつて定められた婚姻の日が日一日と近づいてきた。釋迦族の諸王の城市はその噂で湧きかへつた。悉達多と耶輸陀羅は恰も古譚中の勇士と美人のやうにつくりあげられてしまつた。提婆達多の惱は譬へやうもなかつた。彼の頭には「殺害」の考が絶えず往來した。彼は實際短劍の刃に毒を塗りさへした。そして彼に些の休息も安眠も與へぬ臥榻に身を横たへながら臍にしても飽足らぬ悉達多を刺殺する光景を想像した。彼は思つた。

「ひと思ひに殺してはいけない。苦痛が長引くやうにすこし急所をはづさなくてはいけない。肺を刺してはならぬ。心臟もよけなくてはならぬ。脇腹を程よく、あまり深くないやうに……」

彼はとつぷりと毒を塗つた短劍の先がぶつりと相手の肉へくひこむところを思つた。それから傷口が糜爛して、柘榴みたやうに口をあいて、紫色の腐れがだんだん內臟のはうへひろがつてゆくところを、五體を痙攣させて七顚八倒して呻くところを、……そんな殘忍な想像に耽つてる時彼の歪めた口もとにはさも氣味のよささうな微笑がもれた。併しながらこんな復讐は到底彼を滿

足させることは出來なかつた。彼はまた思つた。

「彼奴を刺して暫の間のたうちまはらせて自分も死ぬ。自分が死なないまでも相手を無理やりに獲物からひきはなすと同時に自分もそれを放棄する。それが何になる。それはとりもなほさず我と我が敗北を自證するものではないか。悉達多は死んでも永久に勝利者の名を得るであらう。そして耶輸陀羅は彼のために泣いて自分を呪ふであらう。それは結局恥の上塗ではないか。この屈辱に對する唯一の最もふさはしい報復手段は勝ちほこつて有頂天になつてる相手から女を奪ひ取ることだ、現在の敵の勝利をしてよりみじめな敗北の前提たらしめることだ」

彼はかう考へた。そして毒刃よりも一層有毒且有效らしい自信ある彼の天賦の魅力、手練手管の惡辣な武器をもつて如何にしても耶輸陀羅を我物にしようと決心した。もとよりこの冒險の頗る大膽であり困難であることはよく承知してゐた。併し結局の成功を疑はない故にそれはそれだけ張合のあるものとなつた。實のところ彼は耶輸陀羅そのものに對してはたゞ一般に男が女に對してもつほどの單に性の相違からくるところの牽引のほか殆ど何も感じてはゐなかつた。けれども今彼女は指もさゝれぬ他人の持物であつた、殊に憎んでもあまりある敵によつて克ち取られたところの。そして相手はそれによつて無上の幸福を得たやうにみえる。それ故彼は無理にも非道にも女を手に入れねばならなかつた。彼は他のものに食はせまいとしては己の吐いた物をも食ひもどす犬であつた。

耶輸陀羅は悉達多の新妻となつた。招かれたその日提婆達多は驚くべき平靜をもつて迦毗羅婆蘇都の祝宴に臨んだ。そののち彼は影の形にそふがごとく悉達多に附纏つて乘ずべき機會を窺つた。彼は己の惡辣なる企について何等良心の呵責を感ずることはなかつた。それが意識的なると無意識的なるとを問はず苟も彼の自尊心を傷けた者は卽ちあらゆる復讐……といふよりは寧ろ懲罰に彼を權利づける者であつた。そしてその者は己が犬猫以上懲罰に値するものとされたことについて彼に感謝すべきであつた。

十一

提婆達多は急に性格が一變したやうにみえた。彼は狩獵や、武術や……彼の生活の最後の目的であつた女を漁ることさへもふつゝりとやめてひたすら當時の形而上學の研鑽に沒頭した。生來明敏な頭腦をもつてた彼は間もなくその方にかなりな造詣をもつやうになつた。その間に彼はまたいつしか悉達多の無二の友となつてゐた。人は屢白馬を驅つて程近い阿彌都檀那王の居城と迦毗羅婆蘇都のあひだを往來する彼の姿を見かけた。

悉達多と耶輸陀羅のよそめにもしるき睦しさ、その些々たる一擧一動、たとへば彼等が不用意に嬉しげなひと目を見あつたこと、甘いひと言を交したこと、それらは悉く提婆達多の胸に烙鐵をあてた。悉達多が彼に對する遠慮から彼のまへで自分の耶輸陀羅に對する感情を出來るだけおしかくすことさへが一層彼の嫉妬をあふつた。彼にはそれが「この女は私のものだぞ、お前のゐない處では何でも思ふやうにされるのだぞ」といふことを見せつけられるやうな氣がした。彼の苦悶は恐しかつた。とはいへ彼は輕率に淺慮にそれを色に見せるやうなことはしなかつた。そして驚くべき隱忍自制をもつて平然と眺めてたのみならず屢新婚の夫婦の相互の愛情をそそのかすやうなことをさへいつた。耶輸陀羅の無邪氣な無思慮からして樂しい、嬉しい、忘れがたい思ひ出としてかの競技の日のことが語り出されることがあつても彼は微塵も不快の色を見せずに上手に相槌を打つた。彼は現在與へられるこの苦痛をいつかは十倍にして返すべき預り物としてじつとそれを耐へ忍んだ。復讐の決心は石のごとくに堅くなつた。彼の嫉妬は交尾してる仲間を嗅出した獸の醜惡殘忍な嫉妬であつた。

悉達多が新妻の愛に醉つて浮々と夢うつゝの日を送つたのも暫の間であつた。日を經るに從つて彼はまた從來の憂鬱と思索の生活にかへりはじめた。彼は若い貴族たちの無上の快樂として耽溺するところの女や、酒や、賭博や、狩獵や、……から遠ざかつた。それは彼の仲間をして內心やうやく彼を憚らせ、嫌はせ、疎んぜしめた。今や提婆達多のみが彼の唯一の友であつた。提婆達多は悉達多の一風變つた隱者めいた生活の無二の同情者、理解者、助長者、そして伴侶であつた。二人は度々手を携へて小暗い森の奥に逍ひいりつゝ日を暮し、また人氣のない城樓に夜

をふかして語りあつた。

悉達多のさうした傾向の著しくなるにつれてあはれな耶輸陀羅の胸にはやうやく抜きがたい寂しさが根をおろした。それを彼女は草の芽のやうに幾度かつんだけれど終にそれは丈夫な草のやうに成長してもはやどうすることもできなくなつてしまつた。彼女は夫がいかに深く自分を愛してくれるかを知つてはゐたがしかも彼女が夫を愛するやうなしかたでは愛してくれなかつた。彼女は花のごとき貴族生活の、盡くることなき歡樂の離るべからざる伴侶でありたいと希つた。それにもかゝはらず彼女はもはや夫の浚頭せる新生活——寧ろ舊生活——の佗しい傍觀者に過ぎなかつた。二人の愛の泉は甘くまた溫かでなくはなかつたけれどその底にひとつの冷い石がかくれてゐた。提婆達多は己の遠大な姦計の次第に成就するのを見てひそかに舌を吐いた。かくのごとくにして提婆達多にとつては苦しい試煉の、冒險の、悉達多にとつては光明の探求の十年が過ぎた。

十二

この時思ひ設けぬ耶輸陀羅の姙娠は提婆達多にとつては新な痛撃であつた。彼は今さらのやうに目のまへに悉達多と耶輸陀羅の肉交を見せつけられるやうな氣がした。また彼女の肉體をとほしてそのふくれた胎内に蠢いてる小さな悉達多をまざまざと見るやうな氣がした。彼は烈し

い嫉妬に痩せた。そのうへ彼はこのことのために折角成就しかけた謀計が根柢から覆されてしまひはせぬかといふ懸念を抱かざるを得なかつた。性慾は愛なき夫婦をもなほ力強く結びつける。我々は單なる性慾によつて結びつけられたる多くの人間の一對を見る。彼等は交尾期に於ける畜生が相互の好悪も適否も顧る暇なくたゞ鼻をつく異性の臭氣に盲目的にひきつけられるやうに互にひきつけられてゐる。そしてその性慾さへが牽引力を失つた時にもその性慾生活の記念物なる「子供」はなほ恐しい肉鎖となつて無慙に、醜悪に、その生産者を一緒に縛して離れしめない、交尾せる犬が生殖器につながれて癡態をさらすやうに。提婆達多の危惧には十分根據があつた。耶輸陀羅もまたこのことによつて悉達多との融和がとりかへせるであらうといふ望を抱いてゐた。併しながら事情の困難、形勢の不利は愈益提婆達多の悪念を狂暴ならしめるに過ぎなかつた。

ある時、ある日、城外の廣野で例年の耕耘祭が行はれた。悉達多、難陀、たまたま來合せた提婆達多、そのほか大勢の貴族たちがならび、その外側を人民の群が圓くとりまいてゐる。嚴な祈禱僧の監督のもとに物々しい祭

式がはじまつた。因陀羅を勸請する勸請僧の聲。音樂にあはせて歌ふ詠歌僧の讃歌。低聲に唱へる行祭僧の祭詞。堆く積みあげた香木の薪から炎々と立ちのぼる祭火のなかへ牛乳、酪、その他種々の供物、就中因陀羅の最も好むところの蘇摩酒がさかんにふりそゝがれる。蒸氣は迸り、煙は渦巻きのぼる。神は祭壇にあつてその匂をとるのである。首を後へひき縛られた犧牲の山羊が祭壇のまへに横たへられ、その伸びきつた喉へ小刀がぐさつとつきさゝれる。血が滾々と流れだして地に滲みこんでゆく。その時悉達多は敬虔にみちて聲を呑んでる人々のなかゝらそつとぬけだしそこからすこしはなれたところに立つ大きな閻浮樹の涼しい蔭にはひつて佇んだ。提婆達多もまた式場をはづし悉達多の跡を追つて同じ木蔭へきた。

十三

「提婆達多、私はあのいたづらに倦怠を催させるながながしい祭式に些の意義も價値も見出すことができない。それればかりかあの愚な血醒い習慣に對してたまらない厭惡を感ずる」

「悉達多、私もまつたく同感である。私も實は殆ど座に堪へなかつた。併し人々、殊に王に對する遠慮から辛うじてこらへてゐた。その時おんみが座をはづしたので私もこれ幸と跡を追つてきたのである」

悉達多はわづかに微笑を浮めながら默つてうなづいた。そしてじつと足もとへ目をおとして

なにかほかのことを考へてゐた。が、やゝあつて彼のそばに同じやうな姿勢をとつてる友のはうをかへりみながら呼びかけた。

「提婆達多」

提婆達多は顔をあげた。

「この頃度々おんみに語つたあの事を私は愈決行しようと思ふ」

「……」

「これまですでにあまりながく考へ過ぎた。今は實行に入るべき時である」

提婆達多は困惑の色を見せた。

「私はなんと答へてよいかわからない。私は卿のためには雙手をあげてそれを祝ひたいと思ふ。とはいへ卿を愛し卿を力とする人々を思へば私は……」

「いやいやもはや今となつては卿の意見をきくまでもない。提婆達多、私は卿にこれまでの厚誼を感謝しておく。我々は暫く相見ることがないであらう。或はこれが最後とならぬとも限らない。提婆達多、私はくれぐれも卿に賴んでおく。私のこの企てについてはゆめゆめ人に口外してくれぬやう。唯一人の道の友と思へばこそ卿にのみうちあけるのである」

「悉達多よ、安んぜよ。私がどうして卿の邪魔をしようぞ。私こそ卿にくらべればはるかに自由の身でありながらこのやうに意氣地なく卿に後れをとつてしまつた。私は卿のまへに心から

己の怯懦をはぢる。併しながら私とても終には卿の跡をふんでゆく日がくるであらう。卿もしはやく先に道を見出したならば希くはその幸福をわかつに吝ならざれ」

その時二人の會話は祭壇に神を祭り終つてさらに耕耘の式をはじむべく彼等のはうに近づいてくる人々によつて妨げられた。

數十頭の白牛は王のをまんなかに、貴族のもの、人民のもの、といふ順序に一列にならべられた。日はかうかうと金銀の飾金具を照してゐる。首圖馱那王は手づから牛を馭して荒地を鋤きはじめた。人々は皆一齊にそれにならふ。牛はぎしぎしと軋る軛の下に逞しい肩を張つて鋤をひく。肥沃な赤土が長い隴となつて鋤先のうしろに走る。小鳥の歌は叢林に響き、栗鼠は梢を渡り、甲蟲は飛び、蜥蜴はすべる春の野に、かやうにして耕耘の式がをはつた。

その夕、提婆達多はひとりほくそゑみつゝ心地よげに馬を驅つて己が城に歸つた。

十四

併しながら事は提婆達多の期待し希望したやうに迅速に運ばなかつた。悉達多の胸中にいかなる戰があり、何故の逡巡があつたか。彼は彼の友の待ち焦れる或事を決行する様子もなく唯これまでよりは一層沈鬱な幾日を過した。提婆達多はもどかしさに堪へなくなつた。併し彼は躁急に輕擧して折角こゝまで仕上げた仕事を自ら打壞すやうな淺慮なことはしなかつた。彼はじつと

辛抱して熟柿の落ちるのを待つてゐた。

ある日悉達多は從者の闡鐸迦とともに出遊した。そして日暮まへに河岸の花園に疲れた身體をやすめてゐた。やゝあつて城に歸らうとして馬車に乘つた時に父王から使がきて耶輸陀羅が男子をあげたことを告げた。悉達多はそれをきいて冷かに

「羅睺羅が生れた」

と獨語した。首圖馱那王は使者からそのことをきいてなんの思慮もなく王孫を羅睺羅と名づけた。悉達多が城門を入らうとするとき宮殿の上階から眺めてた從妹の枳婆瞿多彌は歌つた。

かゝる子をもつ父母は幸なるかな
かゝる夫にかしづく妻は幸なるかな

悉達多の覺めた心はこの歌をきいてひたすら眞實の幸福を思つた。そしてたまたま自分にこの高い思念を思ひ起させた彼女に感謝のしるしとして寶玉の頸飾をはづして與へた。彼女は悉達多の心を知らず、悉達多は自分を戀してるとの儚い思ひを抱いた。

それから七日の後、夜半、悉達多は竊に城をでた。父母を棄て、妻子を棄て、富と名と力を棄て、歡樂盡くることなき太子の生活を棄てゝ、いづこをあてともなく、甘露のごとく甘く眞珠の

ごとく美しい眞理の果を見出すべく。

傳說によれば悉達多は闡鐸迦と出遊の際路に老人と病者と死屍とを見、最後に威儀ある沙門の姿を見て終に出離の心を決した。彼は城を出ようとするにあたつて耶輸陀羅の寢室に行つた。彼女はかた腕を子供の頭にあてて靜に眠つてゐた。悉達多は子供を抱いてみたいと思つたが耶輸陀羅の目をさますことをおそれ

「私は佛陀となつてからこの子を見よう」

と思つてそのまゝそこをたち去つた。

追手は空しく歸つてきた。彼等は太子のあとを尋ねて跋伽仙人の苦行林へ行つた。彼等は仙人から太子が一宿の後そこを去つて阿羅邏迦蘭のところへ行つたといふことをきゝ急いで跡を追つた。そして路で沙門の姿となつた太子が一樹の下に端坐思惟してゐるのを見出した。彼等は人々の悲嘆の有樣を語つて太子の歸城を勸說し哀願した。太子の答はかうであつた。

「私とて恩愛の情を知らぬことがあらうか。たゞ私はわれ人のため永く生老病死の苦を除かんとて家を棄てたのである。今私が人々に背き去るのは將來一層深く眞實に彼等と和合せんがためである。私はこの願をもつて家を出た。私はどうあつても歸ることはせぬ。お前たちは歸つてこの旨を人々に傳へよ」

太子はいひすてゝ彼等と別れひとり阿羅邏迦蘭のところへ向つた。

十五

首圖馱那王はもとより耶輸陀羅の嘆きはよそのみる目もいたはしかつた。おそらく彼女自らもこれほどまでに自分が夫を思つてるとは知らなかつたであらう。何人も何物ももはや彼女を慰めることは出來なかつた。夕暮彼女はつきぬ涙を人なきところに一人泣きたいと思ひ侍女たちをしりぞけて宮殿の望樓へのぼつて行つた。まだひよわい體のよろめくのをかた手を壁にあてゝ支へながらうす暗い廻り梯子を力なく踏んでゆく、なにかそのうへに救でもあるかのやうに。そしてあへぎあへぎからうじて望樓の頂にのぼりついた。それは天井の低い、四方に窓を開いた狹い方形の室である。彼女がそこに姿を現した時にちやうど太陽が地平線の彼方に沈んで今まで横に照されてた室のなかが急に暗くなつた。眼下に黑く見える迦毗羅婆蘇都の町にはすでに此處彼處に火影がきらめきはじめた。その外側には坦々として際涯なき耕地と牧場がひろがつてゐる。人々は皆家に歸つて、野は靜である。家畜は草地に群をなして眠に入らうとしてゐる。彼方此方にほの白く光る貯水池と溝渠の水。到る處巨怪のごとくに橫はる森林。その森林のひとつを貫いて遙に東南のかたにうねつてゆく路。それは悉達多が彼女を棄てゝ逃れ去つた路である。耶輸陀羅はなほそこに悉達多の影が見えもするかのやうにその路にそうてどこまでもどこまでも目を走

らせた。それは心なく夕闇の底にかすんで思ふ人のゆくへをとざしてしまふ。

「悉達多」

彼女はその消えてゆく路の末を眺め、眺め、眺めつくして呼んだ。そして誰憚らず聲をあげて泣いた。大なる夜は潮のごとくによせて平野を呑みつくした。滿天の星のもとに迦毗羅婆蘇都の城は今自らがかゝる悲をつゝめることを知らぬ顏に巍々として靜に聳えてゐる。

望樓の軒をかすめて夜鳥の群がひそかに過ぎ、風は冷かに涙の頰を吹く。

「悉達多」

彼女は今や自分の周圍、城、町、國、あらゆるものがみなもぬけの殼になつてしまつたやうな氣がする。そして自分と世界との間にうす黑い隔の幕があつて凡ての事はみなその向うに起るやうな氣がする。その病み惱める頭に鮮にうつるたゞひとつのことは我身の棄てられたことである。否それさへも屢夢かと疑はれる。彼女は過ぎし昔を思ふ。そして今一度そこにかへりたいと思ふ。さう思へば彼女は兩手を高くのばしながら底なしの淵へ沈んでゆくやうな心細さ、やるせなさを覺える。彼女の愛はなまじひに拒まれなかつた。とともに充分に報いられもしなかつた。彼女はなまじひに愛された。が、それは風に似て捕へやうもない愛であつた。彼女は悉達多を恨んだ。棄てられた者の心、それは棄てられた者のみ知ることができる。彼女は泣きつゝ、思ひつゝ、泣きつゝ、夜の更けるまでそこに立ちつくした。

十六

悉達多出城の報を得て誰より先に驅けつけたのは提婆達多であつた。彼が耶輸陀羅の部屋へ行つた時に彼女は彼を見るや否や兩手に顏をかくしてわつと泣きふした。提婆達多は石像のやうに立ちすくんで面をふせてひと言も得いはなかつた。が、やゝあつて涙ぐんだ眼をあげてまだそのまゝに泣き沈んでゐる姬の姿をじつと見つめた。形のよい手のひらからなかばはみだした頰が涙にぬれてゐる。なんといふよい恰好だらう。彼は彼女の悲嘆のさまをみてむらむらと嫉妬を起した。とはいへ彼は恐るおそる聲をふるはせながら呼びかけた。

「耶輸陀羅」

姬は顏をあげようとしたがとめどのない涙に妨げられてたゆたつてゐる。

「耶輸陀羅、ゆるしてください。私はあなたにあはせる顏もない……」

耶輸陀羅はやうやく顏をあげた。眼のふちがほんのりとして可憐にすこし腫れてゐる。艷麗といふよりはまじめな落ちついた彼女の顏にはそれがこのほかよく似ついて心をそゝるやうにみえる。提婆達多は貪るやうに涙に濡れた長い睫毛を見つめた。

「提婆達多、私はなにもあなたにおゆるしすることはありません。あなたはいつも私たちの親しい友でした。私はただ……悉達多は何故私を棄てたのでせうか。そし

てこの……」

「耶輸陀羅、私はあなたの言葉をきくに堪へない。私は悉達多の出家を豫知してゐた。私たちはながらくそれについて語りあつた。耕耘祭の日彼は愈近々にそれを決行するといふことを私に語つた。私は彼のためにその勇猛な決斷を祝つた。とはいへ私の感情、王やあなたに對する同情は私の理性に反して理不盡に彼を思ひとまらせようとした。併し彼は男らしくきつぱりと拒絶した。私は自分の女々しさを恥ぢて口をとぢた。そして彼に祕密を守ることを誓つた。耶輸陀羅、私は敢ていふ。私をあとにとゞまらせたものは私の怯懦である。未練である。私はそれについては今も悉達多に對し、あなたに對し、また凡ての人に對して慚愧に堪へない。と同時に悉達多の出家についてはあなたのまへに恐しい心の呵責を感ずる。これは卑怯か、愚癡か、なにか知らない。私はたゞあなたのまへに凡ての事實をうち明けてあなたの思ひのまゝにならうために來たのである」

彼は重罪を負うた罪人のやうにうなだれた。

彼の告白はその最後の部分を除いては殆ど全く事實であつた。彼は大膽にもこの明に己に不利なるごとき事實の告白を敢てした。不思議にも彼は生來最も正直を愛した。それ故彼はその不正直な復讐計畫を出來るだけ正直に遂行しようとした。彼はなるべく堂々の陣を張つてその惡の戰ひを戰ひたかつた。今や彼はその最後の勝利について確乎たる自信をもつている。何を苦しんで

それしきの事實を彼女のまへにかくさうか。もし望み得るならば彼はかく揚言しつゝまつしぐらに彼女に襲ひかゝつたであらう。

「降服せよ、私は復讐のために悉達多の手からおんみを奪はうとするのである。逃げられると思ふなら逃げてみよ」と。

十七

さうした性格にもとづく理由のほかに最初己をみづから多少不利の地位に陷れることが假面を一層眞實らしくみせるといふ考があつたかどうか。また萬一悉達多が歸りでもした時にこの場合に於けるなまじな虛構がとり返しのつかぬ破綻のもととなりはせぬかといふことをおそれたためであるかどうか。ともあれ彼は出來るだけ大膽且つ正直であつた。

耶輸陀羅はよゝと泣いた。

「あなたはそれを知りながら……あなたは私の悉達多に對する愛情を知らないかなぞのやうに……私はあなたを恨む。あなたを恨む。……それにしても悉達多はこの羅睺羅をあはれとは思はないのであらうか」

「耶輸陀羅、悉達多はあなたをも羅睺羅をも心から愛してゐた」

さういひながら彼は吐きだしてしまひたいやうな忌しさを感じた。

「これが己の口からいへることか」

と彼は思つた。が、今が肝腎の時である。美しい魚は餌につきかゝつてゐる。辛抱して巧く鉤を呑ませなければならぬ。

「私は悉達多に對する義務として、またあなたに對する罪の贖ひのために私はこの後あなたの友となるであらう。杖とも柱ともなるであらう。さうしたならば私もせめてすこしはこの心の呵責からのがれることができるかもしれない」

耶輸陀羅は嬉しく承引するやうにうなづいた。その口もとにかすかに寂しい微笑の影が過ぎた。絶望の涙にぬれた微笑、それは提婆達多の心をそゝるに足るものであつた。はた彼にとつてこよない吉兆でもあつた。

「しめた！　魚はたうとうかゝつた」

彼は程よく別を告げ、再會を約して歸つた。

十八

命と賴む夫に棄てられた耶輸陀羅は奈落におちてゆくやうな心細い思をした。彼女は目にふるるものならば熱鐵の棒にでもすがりついたであらう。そんなにして彼女はさし出された提婆達多の力強い美しい手にすがつた。彼女は提婆達多を恨んだけれどもどうしても彼を憎むことはできなかつた。またその理由もなかつた。彼女は彼が悉達多の出家の同情者、贊成者、幇助者であるだけそれだけこの場合かへつて彼が賴もしかつた。提婆達多はまことに巧に安全にその兩刃の劍を使つた。

はじめのほどは流石にもしやとのそら賴みを抱いてた耶輸陀羅も日がたつにつれてせんかたなく夫の歸城をあきらめるやうになつた。併し彼女の女らしい感情はなほ強い未練をもつて冷酷な事實に反抗して彼女に悉達多復歸の有望なことを證據だてようとするかのやうに相愛の日のことどもを細々と殘りなく思ひおこさせた。こゝに棄てゝ殘された寂しい人々を慰めるといふ口實のもとに屢彼女を訪れる提婆達多に耶輸陀羅はそれらのことを包むことなく語りきかせた。

「提婆達多、私たちはあの新婚の春をどんなに樂しく暮したでせう」

彼女は夢みるやうな眼ざしをして語りだす。

「私たちはほんに瓔珞の玉のもつれをとくまさへもとりあつた手をはなすまいとした。そしてさばかりのことをも仰山らしく互に解いたかた手で助けあふことがどれほど嬉しかつたであらう」

提婆達多は息のつまるやうな妬に苦みながらさりげない笑顏をつくつてきいてゐる。しかもその妬が意地悪く彼をして熱心に根ほり葉ほり若い夫婦の交情の委曲をきゝたゞさせる。そしてそれが益その妬をあふる。いかなる場合にいかに強く悉達多が彼女を抱きしめたか、いかに熱い

接吻を二人はかはしたか……そんなことを彼は巧に調子をあはせながらきゝほじつた。耶輸陀羅は女らしい羞恥に頬を染めつゝ、しかもまつたき清淨と無邪氣の賜物なる子供らしい天眞の大膽をもつて包みかくさず何から何までうちあけた。提婆達多は煮えかへる胸のうちに、それがあだかも悉達多が謀つて殊更彼をかやうな地位において彼女をとほして自分の幸福をひけらかすかのやうに悉達多に對して烈しい憎惡を感じた。

「よしよし今のうちはどうなりとするがよい。併し總勘定の時には何もかも綺麗に返してやるぞ」

さう思へばこの地獄の苦みも結局かへつて一種の張合となつた。

耶輸陀羅は夫の愛の復活を思ひきつた。と同時にそこに彼女の胸のうちに大きな缺陷が生じた。親の愛、子の愛、それはいかに深くとも異性に對する愛とは本質的にちがつたものである。そして此は彼を代償し得るとも彼は此を代償することができない。そこに消しがたい悲があつた。寂寥があつた。空虚があつた。そしてそれがまた一層彼女の心を愛人の形見にして二人の愛の結晶なる羅睺羅に對する溺愛に轉ぜしめた。

彼女は屢羅睺羅を抱きあげて若い母の初子に對するこぼれるやうな愛情を示しながらいふ。

「提婆達多、このまあ口もとをごらんなさい。悉達多に生きうつしではありませんか。そしてこの小さな耳朶の形は私に似てはゐませんか」

羅睺羅は母そのまゝで父の俤なぞは微塵もなかつた。それにもかゝはらず彼女は無理にもそこに悉達多を見出さうとした。といふよりは寧ろ拵へてゐた。彼女はまた度々自分とおなじ溺愛を要求するやうに心に當惑してる提婆達多に子供をさしつけて抱かせずにはおかなかつた。そして自分がするとほりに頬ずりをさせたりした。さうしておきながら彼女はちつとのまも人に渡しておくのが惜しさうにじきにとりかへさうとする。提婆達多はいはれるまゝに羅睺羅を抱愛しながら熱鐵を呑まされる思をじつとこらへて彼女の乳くびから乳のたれるのを見た。

彼は己の腕のうちにあるまだ形も整はぬどす赤い肉塊、いかにも性慾行爲の産物らしい肉塊、それはびくびくと動いてまだ見えぬ目をきよときよとさせたり、額に猿みたやうな皺をよせたりする醜い肉塊を彼女の眼のまへでぎゆうと縊り殺してやりたいと思ふ。その肉塊が彼の膝のうへで無心に口を歪めたりするのさへが意志あつて彼を嘲弄するかのやうに忌々しい。

「これが彼奴の子なのだ」

彼は思つた。

「これが彼奴の胤なのだ」

「彼奴はこの女に獅噛みついてこいつをこしらへたのだ。此奴がだんだん大きくなつて彼奴に、またこの女に似てくるのだ」

それはもはや單に競技に負けて賭物の女をとられた人間の妬ではなかつた。牝獸を爭つて命が

けの嚙合をする野獣の妬であつた、たゞ人間の巧慧がそれをおほひかくしただけのことで。

十九

提婆達多はその人の氣をみることの敏捷と、芝居上手と、圓轉滑脫の才とをもつて耶輸陀羅のよき友となるかたはら首圖馱那王をはじめ宮廷の人々の好感と感謝とを得ることを忘れなかつた。彼は今や迦毗羅婆蘇都王宮の寵兒となつた。

さうかうするうちにやがて一年が過ぎた。そのあひだに耶輸陀羅の提婆達多に對する感情は埋れた種子の芽となり、苗となり、立派な若木となるやうに目には見えずに次第に成長し且つ形をかへた。それをおそらく彼女自らも氣がつかなかつたであらう。とはいへ提婆達多は決して見逃さなかつた。困難ではあるが望のある許されぬ祕密の戀は——これをしも戀といふべくば——彼の心を有頂天にした。

耶輸陀羅は最初提婆達多の友情に對して感謝した。そして彼の親切な訪問を歡び迎へた。それがいつしか彼を待設けるやうになつた。そして終に彼は彼女にとつてなくてならぬものとなつてしまつた。提婆達多は厚い友情、美しいやさしい心のために、愉快な能辯のために、男らしい輕快な氣質のために、その颯爽とした容姿のために彼女の無二の親友となつた。彼女はもとよりそのあひだ悉達多に對しては最も貞淑な妻であり、羅睺羅に對しては最も愛情深き母であつたけれどもしかも彼女にもまた美しいものは醜いものより美しく且つ快かつた。

一方に彼女の夫に對する貞節と子供に對する慈愛はおそろしい嫉妬をとほして間接に提婆達多の慾望をそゝつたのみならず、それらの美德そのものの美しさが直接におなじ慾望をそゝつた。凡ての肉體的の美のみならず精神的の美もまた彼の熾烈な肉慾の焰をやしなふ油となつた。その心がやうやく彼のはうに靡いてくることが彼の慾望を一層性急にした。彼はじりじりとひき寄せたいやうな慾望を抑へるのに苦しんだ。彼の醜惡な夢のうちに耶輸陀羅はすでに久しく彼のものであつた。

二十

提婆達多の迦毗羅婆蘇都訪問は急に足が遠くなつた。彼は何事にかひどく胸を痛めてるらしく憂鬱になつて時々我にもあらず太息をもらした。そして耶輸陀羅のまへにさへその貴重な快活を失つてしまつた。彼は折々なにかの考に捕はれてぼんやりひとつところを見つめてゐる。そんな時にはその大きな眼に涙がさしてるやうに見えた。耶輸陀羅はそれを見のがさなかつた。そしてそれとなく譯を尋ねたけれど提婆達多はとかく寂しい笑にまぎらしてしまつた。彼女の善良なやさしい心はそれをそのまゝ見過すことができなかつた。

「きつとなにかあるにちがひない。今度こそ是非ともきいてやりませう」

彼女は卓のうへに頬杖をついてそんなことを思つてゐた。そこには大きな花瓶に彼女の好きな白い香の高い花が一杯さしてあつた。ちやうどそこへ侍女が提婆達多の來訪をとりついだ。侍女の姿が部屋のそとに消えると間もなく背の高い提婆達多の姿が現れた。彼は耶輸陀羅を見て懶げに會釋した。そして氣むつかしくきつと口を結んで頤にはものをいはうともしない。耶輸陀羅は立ちあがつてにこやかに迎へながらことさらに聲を和げていつた。

「提婆達多、まああなたはどうなすつたのですか。私をお忘れになつたのですか。隨分お久しいではありませんか」

提婆達多は浮かぬ顔をして口のうちに答へた。

「すこし氣分がよくなつたので……」

「あなたはいつもおなじ言譯ばかりなさる。ほんたうに……」

さういひながら二人は花瓶のそばに、卓のおなじ側に間近く向ひあつて座をしめた。

「……私はもうとうから氣にかゝつてゐたのです。あなたは私の不幸な時に……それは今でもおなじことですけれど……私の力になつて親切に慰めてくだすつた。私はどんなにかそれを感謝してゐるでせう。それでなにかの時には及ばずながらその十に一も御恩がへしがしたいと思つてゐますのに。あなたはなぜさうよそよそしくかくしだてをなさるのですか。私ふぜいとお思ひになつてか。私今日といふ今日は……もしお差支ないことなら……今も今それを考へてゐたところです」

提婆達多はすこし身をかゞめて感謝の意をしめした。

「ありがたう。いつもいふとほりたゞすこし……」

「さあそのおすぐれにならないことはよくわかつてゐます。それでその譯をお尋ねするのです」

提婆達多はさしうつむいて默つてゐる。耶輸陀羅はじつとその様子を見てたがその無垢な正直一途な同情深い心はもう我慢がしきれなくなつた。彼女は身を屈めて相手の顔をのぞくやうにしながらじれつたさうにいつた。

「さあ、提婆達多」

二十一

提婆達多はしづかに顔をあげた。その眼には涙がたまつてゐた。

「私はどうすればよいのであらう」

彼は力なくさも當惑したやうにいつてまた思に沈んでしまつた。が、やゝ暫くしてきつと身を起していつた。

「私は思ひきつていつてしまはう。耶輸陀羅、ゆるしてくださ
てゐる……」
「え」
耶輸陀羅は石像のやうに居すくまつた。そして慄へながら唖のやうに提婆達多を見つめた。提
婆達多はけおされるやうに悄然とさしうつむいた。併し不思議なことに彼女はこの告白をきいて
全然夢想もしなかつたことが降つて湧いたやうには感じなかつた。提婆達多は訴へるやうにいふ。
「私ははじめてあなたを見た時からあなたを思つてゐた。競技の日私が思はぬ不覚をとつたの
もあなたゆゑであつた。私はあなたのまへに氣おくれがした。私の腕は鈍つた。私の心は相手の
胸甲よりもあなたのはうへそれてしまつた。耶輸陀羅、私はあの時からあなたを思つてゐる。私
はかた時もあなたを忘れたことはない」
「あなたは悉達多のものとなつた。私は氣も狂ふばかりであつた。もしそれが悉達多でな
かつたら！　……友情は私の思慮を助けた。私は一生この戀を自分ひとりの胸に祕めておかうと
決心した。耶輸陀羅、その時の思を察してください……」
「併し戀が友情を滅さなかつたやうに友情も戀に勝つことができなかつた。思ひなほしても思
ひなほしてもあなたはやつぱり戀人であつた。それをあなたたちはちつともしらない。知つてく
れない。あなたは悉達多の花嫁として私のまへにでる。あなたは新婚の幸福に醉つて夢みるや

うな顔をしてゐる。私はつらかつた。つらかつた。憎むとも蔑むともなさるがよい。私は正直に
白状する。私は悉達多を妬んだ。あなたを恨んだ。そのいはれのないことは知りながら私はど
うしてもさうせずにはゐられなかつた。それほど私は苦しかつた」
彼の告白はその主要な點に於て嘘であつたけれどもしかも全然虚構といふ譯でもなかつた。そ
こに多くの眞實があつた。從つてそれだけの魅力があつた。提婆達多はその眞實を弄んで虚僞を
おほひかくすに足るだけの腕をもつた役者であつた。彼はまた芝居をやりながら己の扮した人物
そのものの涙を流した。そこに人のめつたにもたない、もちえないほどの熱があつた。耶輸陀羅
は雛鳥のやうにたわいなく網にかゝつた。彼女は途方にくれて泣いた。提婆達多は聲をふるはせ
ていふ。
「耶輸陀羅、せめて戀人と呼ぶことだけを……」
耶輸陀羅は泣伏したまゝうなづいて彼の乞をゆるした。彼女のうぶな心はかゝる關係に於て己
を戀人と呼ばせることは結局自ら相手を戀人と呼ぶにひとしいといふことに氣がつかなかつた。
提婆達多はそれをよく承知してゐた。そしてそれが彼のつけめであつた。

二十二

光り輝くこの日の國に夜は慈悲深くくだつた、我らが夜よりもひとしほ靜に甘やかに。それは

檬果の赤らみ、阿輸迦の蕾のふくらむ制咀羅月のひと夜である。耶輸陀羅は提婆達多と肩をならべながら高い石階をのぼつて園池を見降す廣い廊の一隅に座をしめた。彼等はたゞ二人この人げない高殿に月光をあびつゝ清き夜の眺を樂まうとするのである。月は柔い光をなげて喬木の影と格子形の欄干の影とを廊に落してゐる。池の面に水鳥の羽音がさわさわときこえてまたしづまつた。いろいろの花の薫は吹くともなく流れてくる夜の氣にはこばれて酒の香のやうに人を醉はす。

「戀しい人」

提婆達多は滴るばかりほゝゑみながら耶輸陀羅の耳に口をよせ聲をひそめて呼びかけた。それははじめのうちなんといふ譯もなく彼女に輕い苦痛を與へた。が、間もなくそれを平氣できゝ流すやうになつた。そして今は彼女にとつて嬉しい呼び名となつてしまつた。彼女はにつと笑つて提婆達多を顧みた。彼はたゞちよつと呼んでみたのだといふ風に默つてじつと彼女の眼をみつめてゐる。姫は彼を美しいと思つた。彼女はいふ。

「私の眼はれぼつたくはありませんか。うたゝ寢をしたもので」

「えゝ、すこし」

さういひながら提婆達多はそれが可愛くてたまらないらしく恍惚として彼女のすこしふくらんだ上眼瞼をみつめた。姫は我にもあらずさつと頰を染めて眼をふせた。提婆達多はその眼を追ふやうにしたが、ふと欄干にかけてる彼女の左手の釧の玉の露のやうにきらめくのをみつけ己の右

手を彼女の手頸のうへにそつとかさねるやうにしてなにげなくそれを弄びはじめた。彼はいつまでもいつまでもさうして玉に見惚れてゐた。そのうちに彼の手は次第に強く姫の手頸を欄干におしつけて二本の指がしつかりと玉をつまんでしまつた。と、彼は徐に身をかゞめてふつくらした彼女の手の甲へ脣をつけた。姫は戰きながらその全身に燃えるやうな彼の脣を感じた。

「提婆達多、どうぞもうそのやうなことを……」

姫は哀願するやうにいひながら手をひかうとしたがその手はおさへられるまでもなくおのづと欄干に膠着してはなれなかつた。提婆達多は思ふ存分接吻をしてしづかに顔をあげた。耶輸陀羅はせつなげに息をはずませてうちそむいた。とはいへそこに不快の色は微塵もなかつた。提婆達多はすでに心の動搖した女に對する肉體の接觸が如何なる效果をもたらすものであるかをよく知つてゐた。それは癩病の最初の斑紋のやうにやがては全身を腐爛させずにはおかない。彼はまたひと度男を知つた女の脆さを知りすぎてゐた。それは異性の肉に對する處女の本能的恐怖と羞恥をもたないのみか寧ろ反つてなくもがなの寬容と慢性的欲求とをもつてゐる。

二十三

提婆達多は女がもうあらまし自分のものになりかけてるのをみた。そしてそれがおそろしく彼の慾望をそゝつた。彼は涎をたらすほどの慾情をもつてじつと女の體をみつめた。初產のあとの

程よく柔な乳房を、うすい絹布にまきしめられた腰のへんを、あらゆる筋肉の運動を。しばらく息苦しい沈黙がつゞいた。やゝあつて提婆達多（でーばだった）はまたさりげなく話しかけた。

「耶輸陀羅（やしょーどはらー）、あなたはあの燈籠流しの晩のことをおぼえてゐますか」

「えゝ、よくおぼえてゐます。ちやうどこんな靜な晩でした」

それは彼女が迦毗羅婆蘇都（かびらばすつ）の花嫁となつてのち間もなく催された夜遊であつた。

「あのときほどあなたが氣高くみえたことはなかつた……」

「またそのやうなことを……」

「あなたは水晶を頭に巻いて兩方の耳のうへに青い蓮華をさしてゐた。そして白孔雀の羽を綴つた扇をつかつてゐた……」

「まあよくおぼえてゐらつしやる。私だとて忘れはしません。私あの晩くらゐ樂しかつたことはありませんでした。私たちの乘つてゐた舟のへさきに鴛鴦鳥の形をした燈籠が立てゝありました。そしてほかの舟にもみんな思ひ思ひの趣好をこらした燈籠をたてゝ、そしてこの廣い池のあちらこちらに紅いのや黃色いのやいろいろに彩色した燈籠がいくつとなく浮いてゐました。ほんたうに靜な晩でした。水が鏡のやうにすんで火影が玉の柱のやうに長くうつゝてゐました……」

「そしてその燈籠をめあてに漕いでゆくと蓮の匂がうつとりとときて、そして花がゆらゆらと櫂の波にゆれて……おぼえてゐますか、あのとき私が笛を吹いたのを」

「おぼえてをりますとも。でもあなたが始終私のはうばかり見てゐらつしやるのでなんだか羞しうございました」

「それだのにあなたは一度も私のはうを見てはくださらなかつた」

「……」

「あの晩とはかぎらない。いつでも私はあなたのはうばかり見てゐたのにいつもあなたは知らぬふりをしてゐた」

「でもあたくし……」

「私はどんなにあなたを恨んだか。いゝえ、今でも恨んでゐる。あなたは不人情だ。無慈悲だ。冷酷だ。私の戀をゆるすなどといつて、みな嘘だ。みな嘘だ……」

提婆達多（でーばだった）は急に苛立つて身をふるはせながら脣を噛んで耶輸陀羅（やしょーどはらー）を見つめた。彼女はおどおどして訴へるやうにいつた。

「提婆達多（でーばだった）、まああなたは……」

その眼にはもう涙がいつぱいたまつてゐた。そしてその一滴がほろりとこぼれるやいなやもうたまらなくなつて欄干のうへにわつと泣きふした。

二十四

提婆達多（でーばだつた）は女たらしらしい輕薄な氣持で仔細に彼女の體を見まはしはじめた。その彈力をもつて撓んでるうなじを、若々しく脂づいた脊筋の凹みを、蜂のやうに曲つてる腰のあたりを、頭のさきから足のさきまで。彼はその爛らすやうな刺激のために出來るだけ肉感的な容貌と肉體とを好むと同時に、またそれとは正反對に最も冷かな嚴肅な感じを與へるところのものをも同樣に嗜んだ。その觸れがたく犯しがたく見えるところのものがいかに自在に弄ばれ、たわいなく肉の奴隷となるかを見ることの愉快のために。耶輸陀羅（やしよーどはらー）はそのどちらの型にもはまらなかつた。彼女はただまじめなやさしい感じを與へる尋常な顏をもつてゐた。彼女の體はやゝ痩せぎすにすらりとしてゐた。併しその五體の立派な釣合が烈しく彼の肉慾をそゝつた。彼はこの恰好のよい犧牲が彼の飽くことのない慾情の餌となる場合のあらゆる狀態、あらゆる姿勢、あらゆる味をまざまざと想像した。彼は彼女の泣きやむのを待つて後れ毛の亂れかゝつた耳もとに——その形のよい耳朶が好きだつた——口をよせてさも悔いたらしい調子でいつた。

「ゆるしてください」

さういひながら長い腕を肩を越えて投げかけて横顏をのぞきこむやうにした。涙の匂がする。泣きじやくる熱い息がくる。耶輸陀羅（やしよーどはらー）は力なく首をふつて

「いゝえあたくしなにも……たゞどうぞあなたもすこしは……」

またもや泣き沈まうとするのを兩手で抱き起しながら

「ゆるしてください。……私はたゞあなたが戀しい。……あなたが可愛い……」

提婆達多（でーばだつた）は彼女をしつかりと抱きしめた。彼女の乳房は強く彼の胸におしつけられた。彼の五體の毛孔は悉く口となつて濃な女の肌を吸つた。頸をきつくまきよせられて彼女の顏は斜に彼のはうに仰向きながら丸つこい顎をその胸板にくつつけてゐる。彼は矢庭に己が顏のしたに喘いでる彼女の口に蓋をするやうに脣をおしつけた。彼はいつまでもいつまでも脣をはなさなかつた。それはちやうど蜘蛛が餌食を卷き締めておいてその喉をくひ破る形であつた。彼の舌さきからどす黑い毒血が迸り出て彼女の五臟六腑にしみわたるやうにみえた。彼女は手足も痺れて喪神したやうに彼のするまゝになつてゐる。いつしか月が傾いて喬木の影がまつ黑に二人のうへにかゝつてゐた。星が流れた。凡ては終つた。その夜から耶輸陀羅（やしよーどはらー）は身心ともに提婆達多（でーばだつた）のものであつた。

二十五

耶輸陀羅（やしよーどはらー）を手に入れた提婆達多（でーばだつた）はその復讐計畫の成功に對する滿足よりは寧ろそのあまりにあつけなかつたことに對する不滿のはうをより多く感じた。彼の考にしたがへば彼女は最初から必ず彼の獲得せねばならぬほどの女ではなかつた。たゞ彼女が特殊の場合に彼の野心をそゝるやう

な地位におかれたためにとにかく問題となつたまでのことで、そしてそれに關して己の自尊心が傷けられたばかりに彼女はどうあつても我ものとせねばならぬものとなつたのである。それゆゑ彼はこの情事に於ては目的よりも道程のほうに興味をもつてゐた。道程が困難であればあるほど、山が多ければ多いほど面白かつた、張合があつた、最後の勝利はゆめ疑はなかつたので。しかし今女を手に入れてみれば流石に彼とても己の肉的所有物に對する我々動物一般の本能的な愛著を起さずにはゐられなかつた、それは常に強ければ強いほどそれだけ醜いところの。彼はまたこの新規の肉團に對して好奇的愛玩心、新鮮熾烈な慾情を催した。それは彼にあつては若干日の後には約束したやうに倦怠、厭惡と地位をかへるところのものであつた。そこで先見ある彼はこの牝馬を使へるうち出來るだけ使つておかうといふ經濟的な考からしても飽くまで彼女の身心を貪り弄んだ。

耶輸陀羅は提婆達多を戀した。彼女は彼の欺瞞を看破すべくあまりに正直であつた。××××××

の足をとゞめてかた方の爪さきをそつと踏みこんだときに日光がさつと全身を照して水が胸をときめかすかのやうに波紋を畫いた。彼女はするりとつかつた。水はほどよくぬるんで人肌の溫みと滑さとをおぼえさせる。浴槽のまはりには毛氈のやうな草生のなかに手頃な間隔をおいていろいろの喬木が鬱蒼と繁りあつてゐる。彼女はかた隅にのびだした大きな枝の蔭にはひつて腰からしたを浸したまゝ浴槽のふちに腰かけて冷い石に背をよせた。しつとりと濡れた髪が海藻のやうにうしろに垂れてゐる。蝶は飛びかひ、甲蟲は翅を鳴らし、栗鼠は小忙しく梢を渡る。燃えるばかり花をつけた灌木の木がくれに日輪を讃美する孔雀の聲がきこえる。彼女は汗と脂を洗ひ落してせいせいとした肌をほしながらきくともなくうつとりとして戀人を思つてゐる。

「提婆達多」

さう思ふばかりでも胸がときめいて我しらず微笑がこぼれる。それほど彼女は彼を思つてゐる。今日は提婆達多が彼女を訪問する約束の日なのである。やゝあつて姫は甘い瞑想からたちあがり今一度水浴をしたのち今度は向側の石階をのぼつて化粧の天幕のかげにはひつた。侍女たちは濡れて蠟石のやうにつやつやしてる體をふいて念入に栴檀香を塗つた。そしてまだ濕つてる髪は垂らしたまゝにして瓔珞をつけ、新しい絹布を纏ひ、最後に眼瞼に粧藥を施した。やさしいしとやかな眼がそれによつて幾段の愛くるしさを添へた。彼女は侍女のさしかざす寶蓋に日をよけながら我が部屋にかへつて戀人を待つた。

提婆達多はしばしば迦毗羅婆蘇都を訪れたけれども二人が望むやうな嬉しい逢瀬はもとより數へるほどしかなかつた。姫はたまたま逢うてののちも逢はぬさきのやうに焦れてゐた。髪がかわいたので彼女は侍女を呼んで髪を結ばせた。侍女は貴い香油をふりかけふりかけさらさらと櫛を濡れた髪のかわくまも、かわいた髪の結ばれるまも、姫はいかにもどかしく提婆達多を待つたであらうか。

そのあひだに晴れた空が俄に曇つて暗灰色の荒い雲が一面にひろがつてしまつた。そして今にも雨を打ちつけようとするその雲のなかで雷鳴がしはじめた。彼女は氣が氣でなく城門にむかつた畫廊のはしへ出て見渡した。ちやうどそのときあわたゞしい蹄の音がきこえてきた。彼女ははつとして見おろした。二頭の白馬が塵を蹴立てゝ疾走してくる。彼のである。馬車は眼のしたでぴたりととまつた。提婆達多は莞爾として彼女のはうに手を振つて合圖をした。姫は笑顔をもつてこたへた。刹那に恨は消えてかくしきれぬ嬉しさのみが胸にあふれた。

二十七

凄じい驟雨がすぎた。雲はまだ中空に車輪のやうにまはりながら次第に淡くなつて消えてゆく。恰もその雲を吸うやうにひろがつてゆく蒼空から赫々と日光が迸り出てそのふちを金色に耀かす。

地上の塵埃は猛烈な雨に洗ひさられて濛々とたちのぼる水蒸氣とともにすがすがしい涼氣が湧出すかとおもはれる。夕べがちかづいた。二人ははたはたと雫の落ちる木下路を園亭のはうへと歩いてゆく。雨のためにできた水溜りのところへきたとき彼等は思はずちがつたはうへよけたのでとりあつてた手がいつぱいにひつぱられた。それでも姫は提婆達多の手をはなさうとはせず、指のさきをつかまへてやつと越すことができた。そしてほつと顔を見あはせてにつこりとした。彼等は木立にはさまれたS字形の長い路を小聲に語りあひながらとある小池にちかい木蔭の園亭へきた。こゝはかつて悉達多が耶輸陀羅との密語になれた處であつただけそれだけ提婆達多にとつて嬉れしいかくれがであつた。二人がすれすれに並んで腰をおろすやいなや耶輸陀羅はおさへにおさへた思ひがこみあげて提婆達多の胸に額をよせながら

「うれしい」

とうかされたやうにいつて目をつぶつたなりじつと身じろぎもしずにゐる。たどたどしい人間の言葉をもつてつたふべくもない思が觸れあふ肉をとほして人の胸にしみこんでゆくやうな氣がする。彼女は戀人の手をとつて大事さうに兩手のうちにおきながら今はもうそれを握りしめる力さへない。まことにこれは耶輸陀羅にとつて初戀であつた。それははじめて飲む強い酒のやうに彼女を醉はせた。提婆達多の手練手管は毒酒のやうに胸苦しく彼女を醉はせた。

「提婆達多」

姫は息をはずませながらきゝとれぬほどにいふ。

「いつまでもみすてずに……私はもうなにもかもすてゝしまつたのですもの……」

なにもかも棄てはしなかつた。棄てたいとも思はなかつた。たゞかやうな戀がしれたならば凡てのものは理不盡に彼女を棄てるであらう、恐らくは羅睺羅さへも。彼女はそれを思ふだけでもたまらなかつた。彼女はあらゆる周圍の不興と敵意に身をさらすのかと思へばなんともいへぬ寂しい情ない氣持がした。そしてさう思へば思ふほど生憎に提婆達多が戀しかつた。今や彼は彼女の賴みうる唯一の凡てのものであつた。彼女の戀は命がけであつた。姫は目をとぢたまゝ聽く人の耳よりは心に語るかのやうに甘やかにさゝやく。

「私毎朝目をさますとすぐあなたのことを思ひますの。夜だとて……」

げに夢にも現にも提婆達多を忘れたことはなかつた。

二十八

提婆達多はこの身心をさゝげた女を流石に可憐と思はずにはゐられなかつた。彼は無言のまゝしづかに首をかゞめてほんのりと熟した果物みたいな頰に頰ずりをした。そして梅檀の香にまじる女の肌の匂をかいだ。彼はまたなかば髮にかくれた恰好のいゝ耳朶をみてかろくそこに脣をふれた。姫にはさうした彼の愛撫が身にしみてうれしかつた。彼女の長い睫毛はいつしか涙にぬれ

てゐた。提婆達多はそのとぢた眼の粧藥を施した瞼のふくらみをみた。そしてそこにもかろく脣をふれた。耶輸陀羅はぱつちりと眼をあいた。そして五體をとろかすやうな戀人の目ざしにであつた。

「私昨夜もあなたの夢をみましたの」

提婆達多はにつこりしてみせた。

「どんな」

彼女はさつと顏をあからめた。そして初々しくたゆたひながら何か口ごもるのを彼は首をかしげてその口もとに耳をよせた。

提婆達多は近頃不思議にも自分の心が次第に彼女のはうにひかれてゆくのをおぼえた。彼は彼女の戀を嬉しいと思ひはじめた。折々は彼女をはなしたくないやうな氣持さへ起つた。彼は最初彼女のうぶなばか正直、生眞面目を嘲笑しながらその容色の缺點のはうばかり氣にしてた自分がいつしか無意識に彼女の美しいところをさがしださうとしてるのに氣がついた、あだかも彼女を宿命につながれた棄てることのできぬ自分のものとしてせめて出來るだけそれを高く評價して自ら慰めようとするかのやうに。彼は自分に對して苦々しい羞恥を感じた。彼は渾身これ矜りであつた。その多くの矜りのなかで最も大きな、最も愚な矜りであつた容色の矜りから彼は自分を耶輸陀羅のものと假にもきめてしまふことに堪へがたい屈辱、不滿を感じた。恐らく彼はいかなる

女を獲てもさうであつたらう。彼は女に對する不斷の攻撃者、不斷の勝利者であらねばならぬ。

「何事だ」

彼は思つた。

「己はこんな女につかまつてたまるものか。己はこの女を慰むのだ。己はたゞ意地と復讐のためにこんな女にかゝりあつてゐるのだ」

姫はやうやく彼の胸から頭をはなし彼を見あげてにつこりしながらその手をそつと脣へもつていつた。眼のふちになまめかしく涙のあとがのこつてゐる。彼女はうつむいて頰を染めながら

「あたくしあなたに棄てられゝば死んでしまひますわ」

といふ。提婆達多は胸のうちに

「どうなりとも御勝手に。なんといふ厚ましい女だらう」

と思ひながら

「私こそ。もともと私からお願してやつとかなへていたゞいた戀ですもの」

「またそのやうな……」

といひながら姫は日の暮れかゝつたのに氣がついて殘り惜しげに

「今度はいつきてくださいますの。あたくしいつでもお別れしたときからすぐもう待つてをりますのよ」

二人は立ちあがつた。

二十九

提婆達多（でーばだつた）はやうやく耶輸陀羅（やしとーどはらー）の誠心に動かされることが強くなつてきた。彼はちやうど彼女が彼の肉にひきずられてゆくやうに次第に彼女の美しい心に捕へられてゆく。彼は戰ひ且つ戰つた。とはいへ戰のはじまつたときすでに敗れてるのだといふことをしらなかつた。かやうにして彼はじめてそこに「誠實」のあることを知つた。夢想もしないところのものであつた。彼は何人の誠實をも信じない故に己もまた不誠實であつた。從つてまた誰にもそれを要求しなかつた。彼は寧ろ不誠實を知らなかつた。然るに今こゝに彼をして否應なしに誠實の味をしらしめたものが現れた。彼のあはれな虜から貢がれたその果の味、それは奇怪にも彼の意志に反して彼をしてその奉獻者を忘れかねさせた。彼は自分の歩いてきた路が索寞たる沙漠であつたことをしつた。彼は知らず識らずその寂寥を感じてたのであつた。それは彼を後にひきかへらしめることなしにかへつてま一文字に奥深く、あだかもそこに命の泉があるかのごとく幻惑的な曝氣樓のはうへ突進させたところの。彼の心は纖に目ざめた。彼はやうやくひとつの接吻、ひとつの綾の言葉に誠をこめて彼女に報ゆるやうになつた。かやうにして終に二人は互に解放されることになつた。のない捕虜となつてしまつた。それと同時に提婆達多（でーばだつた）は自分の姫に對する行動の動機と態度と結

果とについて痛烈な悔恨に惱んだ。彼は自分の戀が二重の意味に於て誠實であらねばならぬことを思つた。彼は己を蘇らしめたこの戀を凡てをこえて高く肯定した。彼は新に獲得した肉を貪ると同時に新に經驗した戀に狂つた。そして悔恨の苦悶に呻くとともに勝利の歡呼をあげた。遮莫、悉達（しつどはーるとは）多の名はいつしか二人のあひだの禁句となつてしまつた。

三十

闡鐸迦（ちゆはんだか）と別れてから悉達（しつどはーるとは）多は沙門の姿となつて跋伽（ばはかば）、阿羅邏迦蘭（あーらーらかーらーま）、鬱陀羅迦羅摩弗（うどーらかーらーまぶとら）の諸師を訪ね道を問うたが滿足することができなかつた。そこで彼はひとり尼連禪那河（なーいらんちやな）邊なる優婁頻螺（うるわー）の樹林に入り當時の求道者によつて屢なされたやうな嚴酷な苦行を修した。そこは殑伽（がんかー）の南岸に威をふるつてた摩伽陀（まがどは）の領域であつた。偶彼を見た五人の比丘は長敬の念を生じて彼が佛陀となつたら弟子にならうと思ひかたはらにとゞまつて同じく苦行を修した。彼らの名は憍陳如（かーうんでいぬや）、跋陀羅闍（ばはどらつと）、十力迦葉（だしやばらかーしゆやば）、波瀰波（わーしゆば）、阿濕婆氏多（あしゆわじつと）といつた。悉達（しつどはーるとは）多は極度に少量の食をとつて靜坐思惟することと六年、終に見る影もなく痩せ衰へてしまつた。が、しかもなほ解脫の道は見出されなかつた。ある日彼は靜に立つて歩いてたとき衰弱の極地上に昏倒した。比丘たちは「彼はたうとう死んだ」と思つた。併し悉達（しつどはーるとは）多は間もなく我にかへつて起きあがつた。彼は苦行の無益なることをさとつた。そこで彼は尼連禪那河に入つて沐浴し、木の枝にすがつてからうじて岸へあがつ

た。折から牛飼ひの女の難陀婆羅といふものが樹神に供養するために乳糜をこしらへてたが悉達多が樹下に憩ふのを見てそれを彼に供養した。彼はそれをうけて久しいあひだの苦行に衰へた氣力をやうやくとりかへすことができた。さきの比丘たちはこれを見て悉達多が退轉して苦行を棄てたと思ひ墮落者を見はなして西のかた婆羅奈斯へと去つてしまつた。

悉達多はひとり靜坐思惟に適する地を求めて此處彼處と彷ひ歩くうち一本の畢波羅樹——このとき彼にやさしい蔭をかしたばかりに今も菩提樹といふ貴い名に呼ばれる——をみつけ、途に草刈の男の捧げた軟い草を敷き、正覺を成じなければこの座をたゝぬと心に誓ひ結跏趺坐して默想に入つた。彼はそこで幾日の間烈しい心の戰をつゞけたのち一夜豁然として大覺を得た。彼は降魔と呼ばれるこの戰に於て常に我々が戰つて敗れるところのものに戰ひ勝つたのであつた。彼は佛陀となつた。それは曉の明星のいづる頃、悉達多が三十五歳の時であつた。夜は佛陀のごとく靜に明けそめた、繭をいづる白蛾のやうにすがやかに。それは一切の衆生にとつて眞の朝となつた。

佛陀は清き解脫を樂みつゝ幾日をすごした。傳說によれば偶ま暴風雨が起り天地晦冥にして冷風と疾雨と七日のあひだしばらくもやまなかつた。そのとき目眞隣陀龍王は宮殿よりいでて大なる蛇身をもつて佛陀の身を七重に纏ひ七頭をもつてその頭上を蔽うて佛陀を守護した。七日ののち天が麗に晴れて日が金色に耀いた。佛陀は三昧よりいでた。龍王は少年の姿と化して合掌胡跪

して佛陀を拜した。佛陀は偈を說いていふ。

寂靜にして知足なるは樂し
諸法を觀察するは樂し
世間を惱まさず能く衆生を慈むは樂し
一切の欲を離れ恩愛を棄つるは樂し
能く我慢を伏するは是れ最上の樂なり

佛陀は人々が了解し得ぬであらうことをおそれて新に見出した眞理の宣傳を躊躇したが、しかも慈悲愛憐をもつてのゆゑに終に布教傳道の意を決した。彼はまづ阿羅邏迦蘭を濟度しようと思つたが仙人は已に死んでしまつた。鬱陀羅迦羅摩弗を濟度しようとしたがこの仙人も死んでしまつた。そこでかの五人の比丘を思ひ起して波羅奈斯にむかつた。途中ある林中で結跏趺坐してゐるときにそこを過ぎた二人の商主が彼を見て歩密を施した。佛陀はそれをうけて彼らをして佛と法とに歸依せしめた。僧はまだなかつたのである。

佛陀は波羅奈斯にゆき、夕刻鹿野苑についた。かの比丘たちは遙に彼のくるのをみて互に誡めあつていつた。

「あそこへ喬答摩沙門がきた。彼は苦行をすてゝ世樂をうけた。我々は彼に敬意をはらふことをせぬであらう」

とはいへ佛陀が靜に近づいたときに彼らは思はず立つて恭しく彼を迎へた。しかも彼らはなほ佛陀にむかつて「喬答摩よ」「友よ」と呼びかけた。佛陀は彼らにいつた。

「お前たちは私にむかつてさういふ言葉を使つてはならぬ。私は如來である。私はお前たちに法を說いてきかさう。私の教に從ふならばお前たちはやがて必ず道果を證得するであらう」

三十一

比丘たちは口々にいふ。

「喬答摩よ、卿はさきに苦行を修しながらまだ道も見出さぬうちに退轉して飮食の樂をうけたではないか」

佛陀は答へていつた。

「お前たちは小智をもつて輕々しく我道の成ると成らぬとを量つてはならぬ。まづ私のいふことをきくがよい。徒に身を苦しめれば心が愈惱亂する。さればとて樂欲に耽れば情が染著して離れることができぬ。それ故に苦樂は兩ながら涅槃の因でない。譬へば火を鑽つて之に水を澆げば暗を照す光のなきがごとく、智慧の火を鑽るもまたそれとおなじことである。苦樂の水あれば慧

光生ぜず、慧光生ぜざるがゆゑに生死の黑障を滅することができぬ。今もし苦樂を棄てゝ中道を行ずれば心が寂定して能くかの八正聖道を修して生老病死の患を離れることができる。私は已に中道の行に隨つて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たのである」

彼らはいつしか佛陀の顏を見つめて耳を傾けてゐた。佛陀は言葉をついでいふ。

「憍陳如、お前たち心をとめて聽け。五蘊の苦、生老病死の苦、愛別離苦、怨憎會苦、求むるところを得ざる苦、榮樂を失ふの苦、憍陳如よ、有形、無形、無足、一足、二足、四足、多足、一切の衆生は悉く此の如き苦のないものはない。これらの諸の苦は我を本として生ずる。貪欲、瞋恚、愚癡は皆我を本として生ずる。この三毒は是諸苦の因である、種子の萌芽を生ずるが如く衆生は之がために三界に輪廻するのである。もし我想及貪瞋癡を滅すれば諸の苦も亦それに從つて斷ずる。もしさうならうと思ふならばかの八正道に由るのほかはない。一切の衆生諸苦の根本を知らぬものは皆悉く生死に輪廻するのである。憍陳如よ、苦應に知るべく、集當に斷ずべく、滅應に證すべく、道當に修すべし。憍陳如よ、私は已に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修したるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たのである。それ故にお前も今當に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修せねばならぬ。もし人苦集滅道の四聖諦を知らぬときはその人は解脫を得ることはできぬ。四聖諦は是眞是實、苦は是實に苦、集は實に是集、滅は實に是滅、道は實に是道である。憍陳如よ、お前たちは了解したかどうか」

憍陳如は言下に答へた。

「了解しました。世尊」

佛陀は彼を讃して

「阿若多憍陳如」

といつた。かくて阿若多憍陳如まづ法眼淨を得、ついで他の四人も法眼淨を得て佛弟子となつた。その時佛陀は彼らに問うていつた。

「お前たち比丘、色、受、想、行、識は常であるか無常であるか。苦であるか非苦であるか。空か非空か。はた有我か無我か」

彼らはこれをきいて阿羅漢果を成し卽ち答へていふ。

「世尊よ、色、受、想、行、識は實に是無常、苦、空、無我であります」

是に於て三寶始めて具足し、世に六人の阿羅漢があつた。そののち佛陀は波羅奈斯の長者の子耶舍を度して出家させ、その父母と妻とを優婆塞、優婆夷とした。佛陀は鹿野苑にきてから三月のあひだに五十六人——或は六十人——の徒弟を得た。

三十二

佛陀は成道第一年の安居を鹿野苑に過してのち比丘たちに告げていつた。

「お前たちは既に諸の繫縛を離れて世間の福田となることができる。これから各路をちがへて遊行し、慈悲心をもつて衆生を濟度するが宜しい。私も今からひとり摩伽陀の曷羅闍姞利咽へ行かうと思ふ」

比丘たちは佛陀を拜し、各衣鉢を持して別れ去つた。佛陀が波羅奈斯から曷羅闍姞利咽へ行く路に、伽耶に近い優婁頻螺の林中に優婁頻螺迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉といふ三人の事火外道があつた。佛陀は彼らとその徒弟を敎化し、これらの比丘衆一千人とともに優婁頻螺の聚落を出て迦耶尸利沙にむかつた。彼は嵯々たる迦耶尸利沙に登つて山頂の一大岩のうへに坐した。五つの丘に圍まれた曷羅闍姞利咽の美しい溪谷は眼もはるかにひろがつてゐる。折からむかひの丘の繁みに火がともされた。佛陀は比丘たちに告げていふ。

「比丘たちよ、一切のものは皆燃える。さらば一切のものが燃えるとはなにか。比丘たちよ。眼は燃える。色は燃える。眼識は燃える。眼觸は燃える。眼觸に因つて生ずるところの受も亦燃える。苦も燃える。樂も燃える。非苦も非樂も燃える。一切のものは皆悉く燃える。それはなんの火によつて燃えるか。貪、瞋、癡、三毒の火によつて燃えるのである。生、老、病、死、愁憂、苦惱の火によつて燃えるのである。眼、耳、鼻、舌、身、意、色、聲、香、味、觸、法は皆悉く燃える。聖弟子如是の法を聞けばこれらのものを厭離して染著なく、便ち解脫を得、解脫の智生じ、所作已に辨じ、梵行已に立てば復世間に轉生することはないのである」

佛陀はそれから彼らとともに摩迦陀の王頻毗娑羅の都城にむかつた。佛陀は曷羅閣姞利呬につき城外の浪惡知林に入つて一聖祠の側に止住した。頻毗娑羅王は佛陀の到著をきゝ多くの臣民とともに行つて佛陀を拜した。その時人々は名高い優婁頻螺迦葉とこの大沙門といづれが師でいづれが弟子であるかを疑つた。佛陀はそれを察して優婁頻螺迦葉にむかつて問うた。

「迦葉、お前たちはなにゆゑ火に事へることをやめたのか。なにゆゑ火具を捨てたのであるか」

迦葉はそのこゝろを察して答へた。

「私は五欲の樂を求めて火を祭つてをりましたが私はそれを垢あるものと見たゆゑに事火の具を捨てたのであります」

佛陀はまた問ふ。

「迦葉、お前はもはや五欲の樂をもつて樂とせぬといふ。然らばお前が今樂むところのものはなにであるか」

迦葉は答へていふ。

「私は寂靜を見てをります。そこには生滅もなく、煩惱もなく、愛憎もありませぬ。私はそれを知るがゆゑに事火の祭祀を樂まぬのであります」

かくて迦葉は座より起ち、佛陀を敬禮していつた。

「世尊は我師、私は世尊の弟子であります」

人々は迦葉兄弟が已に佛弟子となつたことを知つて佛陀に對し喜敬の念を生じた。そこで佛陀は彼らのために漸次に法を說き、人々の心の動くのを見て最後に苦集滅道の教を說いた。

三十三

頻毗娑羅王は歡喜に堪へず佛陀を拜していつた。

「世尊われ佛陀に歸依し奉る。われ法に歸依し奉る。われ僧に歸依し奉る。世尊願くは今より後終生優婆塞とならんことを」

そして王は翌日佛陀及比丘衆に飮食を供養せんことを請うた。佛陀は默然として請を受けた。王は座より起ち、佛足を頂禮し、右遶三匝して辭し去つた。翌日午前、佛陀は法衣を著け、鉢をとり、千人の比丘衆に圍繞されて城に入り、王の宮殿に入つて隨從の比丘とともに座についた。その時頻毗娑羅王は自ら給仕して飮食を供養した。王はまた自分の竹園が都城を距ること遠からず、近からず、常に閑靜で比丘衆の止住に適することを思ひ、その竹園を奉獻せんことを請うて座より起ち、手づから金瓶を執つて佛陀の手に水を灌いでいつた。

「世尊われこの竹林園をもつて佛陀を戴ける比丘僧伽に獻ず」

佛陀は默然としてそれを受けた。佛陀はそののち暫くそこに止住して法を說いた。

この時曷羅閦姑利咽に近い聚落に舍利弗、目犍羅夜那といふ二人の婆羅門があつた。彼等は共に異端の師刪闍耶毗羅胝の高弟で親しい友であつたが刪闍耶の死後各多くの弟子をもつて人々の崇仰を受けてゐた。併し彼等はその師の說に滿足することができず、新に師とすべき人を求めてゐた。ある日舍利弗は途で阿濕婆氏多が僧伽梨をつけ、鉢を持ち、靜に頭を垂れて食を乞うて歩くのに逢つた。舍利弗はこの比丘の威儀にうたれその誰を師とし、誰の教を奉ずるかをききたいと思ひ默つて後についていつた。阿濕婆氏多は行乞を終つて歸つていつた。その時舍利弗は彼に近づき一禮して會釋の言葉をかはしたのち

「友よ、卿の師は誰であるか。卿は誰の教を受けてゐる者である」

と問うた。比丘は答へていふ。

「我師は喬答摩大沙門である。私は彼の教を受けてゐる者である」

「その教とはなんであるか」

「私は出家してまだ幾日にもならない。到底廣大な師の教を語ることはできない。それゆゑただいさゝか偈をもつてお答へしよう」

我師の說くところ
法は緣によりて生ず
また緣によりて滅す
一切の諸法は
空にして主あることなし

舍利弗はこれをきいて法眼淨を得、歸つて目犍羅夜那のところへ行つた。目犍羅夜那は彼の顏のいつになく晴々しいのを見てどうしたのかとたづねた。舍利弗は目犍羅夜那のために阿濕婆氏多からきいたところの偈を說いた。目犍羅夜那もそれをきいて法眼淨を得、舍利弗とともにすべての弟子を率ゐて竹園に行つて佛弟子となつた。併し彼等が佛陀によつてあまり高い地位におかれたために僧伽の古參のなかには平かならぬ者もあつた。そこで佛陀は直に大衆を集めて偈を說いた。

諸の惡はなす莫れ
諸の善は奉行せよ
自らその意を淨くする
これ諸佛の教なり

同時に佛陀は僧伽の分裂を防がんがために多少の戒律を立てた。

三十四

かやうにして七年が過ぎた。それは悉達多にとつては苦行の、求道の、提婆達多と耶輸陀羅にとつては初戀の、溺愛の幾年であつた。とはいへ二人の夢も終にさめる時がきた。悉達多は家や父母や妻子や……すべてを棄てたごとく六年の苦行を棄てゝ默想の座よりたちあがつた。そして——佛陀となつた。彼はその光輝ある四十幾年の傳道生活の第一歩、光明赫奕たる佛陀としての第一歩を踏みだした。忽ちにして多くの弟子を集め、强大な摩伽陀國王の歸依をうけた佛陀の名聲はやがて迦毗羅婆蘇都へも響き渡つた。年老いた首圖馱那王は生前今一度その子を見たいといふ切な願をもつて使を曷羅闍姞利呬へ遣はした。佛陀は父王の請を容れ、成道第二年頗勒窶拏月（？）某日、曷羅闍姞利呬より伽毗羅婆蘇都へ、六十由旬の道を二ケ月の豫定をもつて出發した。

悉達多！　この名は姫と提婆達多とのあひだにいつとはなしに禁句となつてゐた。けれどもその名はもはや耳を掩うてもきこえるほど迦毗羅婆蘇都に喧傳された。そしてその人は餌をねらふ獅子のやうにしづかに一歩一歩と近づいてくる。悉達多！　耶輸陀羅の心は大石のごとくに落ちかゝつてくる何物かに壓されて堪へがたい苦痛に悶えた。併しなほ悉達多の名はおくびにも出されなかつた。日々はさながら彼女の膝にひとつひとつ積み重ねられる責石であつた。彼女は深い思いに沈んで日々に痩せ衰へてゆく。今は提婆達多との會合もかへつてその胸を苦しめるやうにみえた。彼女の手は彼のとるにまかせ、その頰は脣のふるゝを拒まなかつたけれどもそれはたゞ冷淡な無頓著であつた。さうかと思へばまたその眼は時には無體に情人の方へひきつけられるやうにみえながら彼女はそれを嫌ふかのやうに强ひて顔を背けようとする。耶輸羅陀が提婆達多を避けようとする傾向は逢ふたびごとに强くなつた。提婆達多は彼女の胸中を推量しかねけれどもその原因だけはよくわかつてゐた。そして新なる嫉妬と不安を起した。彼は彼女が今更悉達多に對して無關心であり得ないことが忌々しかつた。彼女が夫を厭惡することは更に一層望ましかつた。提婆達多と姫とのあひだには渡りにくい溝渠ができた。しかもすべてを畫餅に歸させてしまひはせぬかといふ懸念が彼をして敢て渡ることを躊躇させた。彼はじりじりした。今や彼にとつても日々は責石であつた。彼女の胸中について彼の想像は縱に橫に様々な方に駈けまはつた。彼はそれらの混亂し、旋轉する、互に矛盾し、混淆する種々な想像をなんとかしてひとつに片づけようとあせつた。しかし彼の考は始終同じところを駈けまはるばかりで些の進歩も展開もしない。しかも一方に悉達多が時々刻々に近づいてくるといふことが彼の頭を恐しくいらだたせた。事情は愈最後まで切迫した。永く待たれた悉達多が明後日迦毗羅婆蘇都へ到著するといふ知らせの使が首圖馱那王からきた。そして彼は他の一族近親たちとともにこの舊友を迎へるた

めに明日から首圖駄那王の宮殿へ賓客として招待された。

三十五

提婆達多は日頃の煩悶と暴飲とに痩せた體をもちあつかふやうに亂暴に部屋のなかを歩きまはつた。そして頭をふつたり、舌うちしたり、地だんだを踏んだり、手を振りあげたりした。彼はこの苦痛をみづから求めて陷つたものとは思ひもそめない。相手の悉達多が與へるものと考へる。しかも相手は自分に指もさし得ずにひとりで七顚八倒してる彼をよそ目に見ながら空嘯いてるやうな氣がする。さう思へば彼は相手をくひちぎつてやりたいほどの憎惡を感ずる。彼はまた耶輸陀羅が彼を悉達多に見かへるのではないかと思ふ。彼は悉達多と姫の昔日のこまやかな情愛を證據だてるやうな最も些末な一擧一動までをありありと思ひ出す、それをその日彼の嫉妬が深く腦裡に刻みつけておいたところの。彼はまた最初の肉慾の伴侶に對する人間の愛著のいかに根强いものであるかを考へる。さうしてるうちにそれがもう疑ふべからざる事實のやうに思はれてきた。彼は絶望した。彼はどさりと椅子に倒れかゝつた。彼は手足の指の先まで痺れるやうなけだるさをおぼえた。彼は息をするのさへ懶かつた。

提婆達多は氣をかへてあんまり自分の野暮臭いのを笑はうとした。

「なんだこのざまは」

彼は耶輸陀羅を單に意地と復讐の餌としてねらつた時の氣持をつとめて呼び起さうとした。が、それは駄目であつた。彼女は已にながく彼の血となり肉となつた。彼はそれを搾られ、ひき剝される苦痛を感じてるのであつた。彼はまた一層あはれな氣安めを試みた。

「たとへ一時でも女を手に入れたのは悉達多に對する勝利ではないか」

併しそれが勝利であるとすればするほど相手の勝利は大きくなつた。敵はいはゞ同じ戰に二度勝つたことになる。彼は自分のみじめに笑止なさを思つて顏を背けた、人あつてそれを見るかのやうに。

と、またそのそばから未練にも自分に有利なやうな考が浮んでくる。そしてさきに彼女の變心の證據とされたそのひとつ材料さへがまつたく別の色彩を帶びて彼に愉快なやうな解釋を可能にする。かと思へばすぐまたあらゆる弱點が暴露して、考は初にもどつて同じ苦しい道筋をたどりはじめる。そのやうにして彼の考は渦に卷きこまれたものゝやうに同じところをまはるやうにみえながら次第に暗い底のはうへ落ちてゆくのであつた。

彼はひどく上氣して頭が破れさうになつた。彼は乾いた脣をなめながらまんじりともせずに考へつゞけた。彼は烈しい疲勞を感じたので臥榻のうへに投げだされるやうに橫になつた。病的に昂奮した頭が夜のふけるにつれ刻々にさえて氣ちがひのやうに活路を求めてゐる。だが活路は終に見出されなかつた。

三十六

提婆達多（でーばだった）はたうとう最初から知つてゐながらことさら觸れなかつた、觸れることをおそれてた點に否應なしに出くはさねばならなくなつた。

「耶輸陀羅（やしよーどはらー）は自分の戀の手品を感づいたのではないか」

それは今更霹天のやうに彼を驚かした。その卑劣な奸悪な動機。その醜悪な獣的な戀。かつて悉達多（しつどはーるだは）の不意の出家のためにものゝあやめも分らなくなつておぞくも彼のさしだした毒酒に醉はされてしまつた彼女が夫の歸來によつて悪醉から呼びさまされて彼の戀の眞相を看破したのだと思つた。

「耶輸陀羅（やしよーどはらー）は己を嫌つた。卑しんだ。蔑んだ」

彼はたまらなくなつた。彼自身まさにそれに値する人間であるにもかゝはらず彼はいかなる種類、いかなる程度の侮蔑にも堪へない矜りをもつてゐた。彼は絶望の聲をもらした。そして氣ぬけがしたやうに身じろぎもしずにゐた。この時きれいにかいだされた泥水のあとへじいつと清水が湧いてくるやうに懺悔の心が彼の胸底に湧いてきた。そして忽ちに胸一杯になつた。彼は彼女の美しさを、それにひきかへ自分の醜さを思つた。そしてその清淨な彼女を悪念と欲望の餌として骨までもしやぶつた己の罪を思つた。彼は慚ぢ且つ愧ぢた。彼は自分をたゝきつけて踏んで踏

んで踏みにじつてやりたかつた。彼は臥榻にうつ伏して兩手で顔をかくした。それはさながら神恕を乞ふ懺悔者の姿であつた。さりながら彼は祈るべき神をもたなかつた。そしてそれだけ彼の惱はやるせなかつた。その時ふと未だ嘗て思ひもかけなかつた考が彼の頭に浮んだ。

「耶輸陀羅（やしよーどはらー）のところへいつて懺悔しよう。さうだ、すつかりうちあけて懺悔してしまはう」

それは彼にとつては破天荒の思ひつきであつた。彼がみづから他人のまへに己を卑くして告白し懺悔する——それはこれまで想像するだけでも屈辱を感ずる忌々しい考であつた。彼は己の罪過の有無にかゝはらずみづからを何人のうへにも遙に高くしてゐた。實にこの時までも彼は彼自身なるが故に何人より尊かつた。

彼はじりじりして夜の明けるのを待つた。そして明け方疲勞の極ほんのすこしのあひだうとうととした。そしてなにか息のつまるほど苦しい厭な夢を見た。彼は朝の光がさすと同時に目をさましてあたふたと身じたくをはじめた。しかもこの場合にあつてすら折角容姿をとゝのへることを忘れなかつた。彼はいつも彼女との會合の前後に久しいこと鏡に向つてるのがならひであつた。自分の容姿に對する自信は非常に彼を幸福にした。それはこの最後の時までも彼の忠實な味方であつた。すくなくとも彼自身はさう思つた。彼は侍者にターバンのひとつの襞、髪の毛のひと筋もゆるがせにさせなかつた。彼は入念に盛裝して風姿堂々と馬車を驅つて迦毗羅婆蘇都（かびらばすつ）へと向つた、流石に懶く力ない眼をとぢてしばしば吐息をもらしながら。

三十七

その日首圖馱那王の宮殿へ招待された貴賓のうちの重なものはやはりかつてスプラブッドハ王の迦毗羅婆蘇都訪問の際に集つた名代の王子たちであつた。スプラブッドハ王は招待を受けたけれども悉達多に對する不快のために來ることを拒んだ。それにもかゝはらず首圖馱那王は死んだ子の蘇つたのをみるやうな喜びのために國王の威嚴も、品位も、禮儀作法も、惜氣もなくすてしまひ、自分ひとり上機嫌になつてたわいのない溺愛の言葉やきゝづらい息子自慢の百萬遍をとめどなく繰り返した。彼は釋迦族の王といふよりは寧ろ老耄した一個の好々爺であつた。彼は大きな盃から葡萄酒をぐつと飲んで卓をへだてゝ向きあつてる提婆達多のうへに充血したけだるさうな眼をするゑながら錘のゆるんだ高調子で話しかけた。

「提―婆―達―多」

提婆達多はそれどころではなかつた。彼の腰は宙に浮いてゐた。彼の頭には耶輸耶羅のことのほかなにもなかつた。酒宴はすでに夕刻からながくつゞいてるのだ。たゞこの善良な老王に對する愛と同情と禮讓とがからうじて賓客の人々を辛抱させた。とりわけ提婆達多はじれにじれてゐる。彼が來てから姫はまだ一度も顔を見せない。王はまた彼をつかまへて寸時も放さうとしない。

「提―婆―達―多」

「またか」

提婆達多は思つた。彼はこの老耄れのしやつつらがはりとばしてやりたかつた。彼はわざと王の話を冷淡にきゝ流しながら隣席の摩訶那摩に甘蔗酒をついでやつた。馱提唎加は手もちぶさたにもじもじして　はやく賭博場で骰子がころがしたいものだ　なぞと思つてゐた。

「……あれがさういふ聖者になつて歸つてきたとするとたゞの悉達多として迎へる譯にもゆくまい。佛陀は佛陀のやうに迎へねばならぬ。そこで私はこの前代未聞の佛陀に供養するにはまづ孔雀の舌料理などはどうかと思ひついた」

さういつて王はそれがさも奇想天外の好諧謔であるかのやうにひとりで高笑した。さきから欠伸を噛み殺してた阿兔樓馱はあんまり皆が默りかへつてるのも氣の毒と思つたかとつてつけたやうに相槌をうつた。

「獅子の卵なぞもいかゞでせう」

王は自分の諧謔に反響があつたのをみて益上機嫌になつた。

「なに獅子の卵。これはまた一段と面白い趣向ぢや。獅子の卵に孔雀の舌料理では流石の佛陀も眼をまはされるであらう」

王がひとりで悅に入つてるうちに提婆達多はそつと席をはづして姿を消した。

三十八

提婆達多は足音をぬすんで案内知つた宮殿の廊下を耶輸陀羅の居間のはうへ急いだ。まだ夜は淺いけれど後宮は海の底のやうに靜であつた。たゞどこかの侍女部屋から忍び音に彈ずる箜篌の調がもれてくる。彼は幸ひ誰にも姿を見られずに彼女の居間の前まで行つたがそこはまつ暗で人のけはひもしない。彼はふと折れ曲つた廊下からうすあかりのさすのに氣がついた。そこを曲れば直ぐに彼女の寢室であつた。彼は胸を躍らせながら光についていつた。寢室の戸がなかば開いてゐた。彼はそつとのぞいた。姫はこちらへ斜に背を向けて體の左脇を見せるやうな位置をとりつゝ、すやすやと眠つてる羅睺羅のうへに身をかゞめて罪のない寢顏を一所懸命にのぞきこんでゐる。提婆達多はあたりを憚つて聲をひそめて呼んだ。

「耶輸陀羅」

彼女は氣がつかない。じつと子供の顏を見ながら何かさゝやくやうに脣が動いた。そしてさも可愛ゆいらしく、また穩かな眠を妨げるのをおそれるやうにそうつとながいながい接吻をその果物みたいな頰に與へた。床のうへに長くひいてる彼女の影がふはりゆれた。提婆達多はそれを見て自分がされたやうに胸をうたせた。そしてやゝ聲高に今一度呼んだ。

「耶輸陀羅」

彼女ははつとして身を起しながらふりむいた。そして彼を見るやいなや聲を出さないばかりに驚いて、狼狽して、蒼ざめて、石像のやうに立ちすくんだ。それから宙に浮くやうによろめきながらすこしはなれた自分の臥榻に無意識に腰をおろした。そして彼を見まいとするやうに顏を背けた。提婆達多は前後も忘れてつかつかと歩みよつた。

「耶輸陀羅」

彼はせきこんだ。聲がふるへた。姫の手をとらうとした。彼女の戰く手がそれをふりほどいた。彼は矢庭に跪いて彼女の膝に泣き倒れた。彼女は逃れようとして身をもだえたけれど彼をおしのけるにはあまりに力弱かつた。またその兩脚は臥榻に釘づけにされたやうに動かなかつた。提婆達多はうつ伏したまゝしどろもどろにいふ。

「私はあなたを騙した。私はちつともあなたを思つてはゐなかつた。たゞ意地と嫉妬と復讐のためにあなたをとらうとした。私は仕合の日から悉達多を憎んでゐた。そしてあなたをつけねらつた。悉達多の出家をそゝのかしたのは私だ。私は卑怯者だ。私はあなたが若いばかりにあなたを抱きたいと思つた。私はあらゆる若い女を抱いてみたかつた。あなたが人のものだからなほさら抱いてみたかつた。一度抱いてからはたゞ氣ちがひじみた欲望からさんざんあなたを弄んだ。私はあなたがたわいなく騙されるのをみてあなたのばかを笑つた。そしてあなたがよせてくださる情をさへうるさく思つた。私はどこまでもあなたをなぐさむつもりだつた、欲望のために

は肉體を、復讐のためには貞操を。そして思ふさまなぐさんだあげくにはあなたをつきはなすつもりだつた。ところがいつか私はあなたのまごころに動かされてしまつた。私は戀を知つた。それと同時にあなたの美しさがはじめてわかつた。それにひきかへ自分の穢いことがしみじみとわかつた。私はあなたが戀しい。可愛い。有難い。私は今が今やつと眼がさめた。私は懺悔しにきた。私はこんな穢い者だ。惡人だ。畜生だ。私は甘んじて受ける、どんな非難でも、輕蔑でも。たゞ……たゞ……どうか私を棄てないで……私はどうしてもあなたと別れるのはいやだ……」

三十九

提婆達多（でーばだつた）は情にせまつて無我夢中に告白した。彼の懺悔は膽汁のごとく苦く腹の底から出た。そのとき彼は頸筋になにか落ちるのを覺えて顔をあげた。耶輸陀羅（やしよーどはら）の涙であつた。彼女は息もつげぬほどに泣いた。無言の幾分が過ぎた。彼は彼女の顔をのぞくやうにしておづおづと問うた。

「あなたは私を棄てるのですか」

姫は兩手で顔をかくしたまゝかすかに頭をふつた。彼は立ちあがつて彼女により添ひ腰をおろしながら横抱きに抱きしめてその上氣してる耳の根に熱い脣をおしつけた。その時廊下の向うで彼を尋ね捜す人聲が聞えた。彼はは つとして腕をほどいた。

「耶輸陀羅（やしよーどはら）、いつまでもかはらずに」

そして泣き崩れてる姫をうしろに殘惜く二足三足戸口のはうへ足を運んだ時に彼女は驚かされた鳥のやうに立ちあがつた。

「提婆達多（でーばだつた）」

呼びかけながらあとを追つてふりかへる彼の頸にすがりついた。

「もう一度して」

そして彼の胸に顔をかくしてよゝと泣いた。彼は身をかゞめつ涙にぬれた頰に接吻をしてなだめるやうに背をさすりながら

「またあひませう」

とやさしく言葉をのこして立ち去つた。あとに耶輸陀羅（やしよーどはら）は臥榻のうへによろめき倒れて正體もなく涙にむせんだ。提婆達多（でーばだつた）はさりげなく酒宴の席へ戻つた。彼は醉のまはつた人たちの冗談半分の非難や皮肉を氣輕に巧にうけ流した。彼の良心の影は已にうすくなつてゐた。そこには勝利の得意が頭を擡げかけてゐた。否、彼の懺悔は血の出るほどの眞實であつた。さはいへ彼は一方にあの堪へがたい不安の狀態から一刻も早く逃れんがために已が結局の勝利に對する無意識的自信をもつて彼女のまへに懺悔したのではなかつたらうか。今や彼は陷穽にむかつて歩みよる獅子を待つ獵師の心持をもつて悉達多（しつどはーるたは）の歸城を待ち設けた。彼は已自ら佛陀たり得ざるのみならず、他人が佛陀であり、佛陀であり得ることをさへ信じ得なかつたのである。

四十

佛陀は若き悉達多として光明を求めて出で走つたその路をその求めた光明そのものとして歸つてきた。轉輪聖王よりも偉大なる佛陀は多くの比丘衆を從へて獅子のごとくに迦毗羅婆蘇都へ歸つてきた。そして城外にある綠の蔭涼しき尼拘樓陀の林に入つた。首圖馱那王をはじめ一族近親の人々は親愛なる悉達多を歡び迎へ、歡び迎へられんがために、その他の臣民は、信心深いものは佛陀を恭敬せんがために手に手に香華をもつて、餘のものは單なる好奇心をもつて我も我もと尼拘樓陀の林へ行つた。さりながらこれらの人々は果していかなる光景を見たか。かの昔日の太子悉達多は、この自ら佛陀と名乘るところの人は、彼等が到る處に見出すごとき精進、禁慾生活に痩せた見すぼらしい一個の乞食僧であつた。そしてその左右を圍繞する貴い弟子たちもまたこれと同じく襤褸に包まれて形容枯槁した乞食僧の一群にすぎなかつた。曾にその外觀が衆人、殊に王族の期待を裏切つたのみならず、またその面接の態度が全く想像の外であつた。彼らは皆己等が衷心よりの歡迎を同じ感激をもつて迎へる佛陀——寧ろ悉達多——を胸に畫いてゐた。さりながら佛陀は悉達多ではなかつた。彼らは昔日の悉達多でなくして、苦多く涙の多かつた幾年月ののちに、かゝる變りはてた境涯において、彼らを迎へて些の喜びもなく、些の悲みもなく、これらの愚なる人々に對する慈悲愛憐のほか何等感情の動搖のない一個高潔な仙士

を見た。しかも彼らはどこまでも佛陀を己が水準までひきさげて考へることをやめなかつた。彼らは不滿だつた。彼らは家族的地位、年齡の多少をも考へることを忘れなかつた、そのうへ昔の悉達多を。かくして彼らの或者は佛陀を拜せず、何人も飮食を供養することなしに歸つてしまつた、胸中消しがたい不可思議の驚異を覺えつゝも。

首圖馱那王の心は重かつた。彼の矜りは無慙に傷つけられた。彼の幻想は微塵に打碎かれた。彼は一族廷臣はもとより庶民に對してさへ顏向けのならぬほどの不面目を感じた。彼は泣きだしたいほど情なかつた。また腹だゝしかつた。彼は自分が悉達多の歸國を促したことを心から悔いた。彼は今日までおめおめと生きながらへたことをかこつた。彼は悶々としてその日を暮した。

耶輸陀羅はこの日片時も羅睺羅をはなさず、終日部屋に閉ぢこもつて誰にも顏をあはさなかつた。夜になつて彼女は羅睺羅を自分の臥榻のうへに並んで寢させた。そして絕間なく溺愛の言葉をかけ、屢狂氣のごとく抱擁し接吻して小さなものゝ眠を妨げた。彼女はさめざめと泣いた。彼女はひと夜を羅睺羅の寢顏をうちまもりつゝ泣き明した。

四十一

靜な朝になつた。澄みわたつた空を鶴の群が飛んでゆく。森は百鳥の歌に響き、朝風は野の露を吹く。この時迦毗羅婆蘇都の市民たちは摩伽陀の大王をしも跪かしめた人が鉢を持し、目を伏

せ、默然として佇みつゝ家より家へと食を乞ひ歩くのを見た。耶輸陀羅もまた宮殿の窓を開き涙にくれる眼をもつてさがなき羅睺羅の怪訝を受けつゝその姿を見まもつてゐた。

佛陀行乞の報を得て首圖馱那王の激情は一時に頭を衝いた。彼は侍臣を叱して直に馬を牽かせた。彼は鐙を踏みはづし踏はづししたほどせきこんでゐた。彼は馬を飛ばせて行乞のところへかけつけた。彼は馬からとび降りて佛陀のまへにつゝ立つた。そして喘ぎながらも出來るだけ聲を抑へていつた。

「悉達多、お前はなぜそのやうに我々を辱めるのか。なぜ行乞なぞするのか。我々には供養ができぬと思ふのか」

王は涙ぐんで聲がふるへた。

「王よ、これは我種族の慣しである」

問はれた人はしづかに答へた。王は益苛立つた。

「なに種族の？　名譽ある我種族のなかで誰がそのやうなことをしたか」

「王よ、卿等は王族である。私の祖先は過去の諸佛である。諸佛は皆食を乞うて布施によつて命をつないだ。それはさておき王よ、人がもし隱れた寶を見出したならばまづその最も貴いものを父に捧げるのが子たるものの務ではないか」

そこで佛陀は偈を說いていつた。

起てよ　逡ふこと莫れ　淨く梵行を修せよ　快く善法を習へば　今世後世安樂に住す
淨く梵行を修せよ　愼んで惡法を行ふこと莫れ　快く善法を習へば　今世後世安樂に住す

王は心和ぎ手づから鉢を執つて佛陀及比丘衆を宮殿へ導いた。一族宮臣たちは悉く出て佛陀を迎へた。佛陀が食を訖つてのち王宮の女子たちは皆來て佛陀を拜したけれども耶輸陀羅のみは姿を見せなかつた。たゞ羅睺羅ばかりがひとり出てきて、佛陀の法衣にすがつて

「お弟子にしてください　お弟子にしてください」

とくりかへした。羅睺羅はそれを母に教へられてきたのである。王は耶輸陀羅のおそいのを怪んで侍女を迎ひにやつた。侍女は顏色をかへて戻つてきて彼女の自刃を告げた。一族の人々は我勝ちにかけつけた。佛陀は舍利弗と目犍羅夜那を從へてしづかに彼女の部屋へ行つた。耶輸陀羅は床のうへに血にまみれて倒れてゐた。佛陀は偉大なる二人の弟子と共に平然として屍骸のまへに立つた。人々は驚愕のあまり呆然として徒らに目をみはるのみであつた。ひとり提婆達多は狂氣のごとくかけより、人目もはゞず抱きつき、血みどろの屍骸に顏を埋めて聲をあげて泣いた。人人は皆泣いた。聖衆のほかは皆。その時提婆達多よりもより熱い涙を流すものはなかつた。まことに耶輸陀羅は彼が眞實の心を捧げ得る最初のものであつた。そして最後のものとなるであらう。

四十二

提婆達多は多くの女を愛し、多くの女に愛せられた。併しながらそれはいはゞ彼の跳躍せではやまぬ潑剌たる若い感情の遊戯に過ぎなかつた。彼はただ耶輸陀羅に於てかつて夢想もしなかつたまことの戀人を見出した。それは嘘から出たまことであつた。彼女はこの惡病に惱める者に姉妹となり、母となり、凡てのものとなつた。日は耀いた。提婆達多は生れた。彼女は餓ゑたる彼に醍醐となり、生の力となつた。然るに今その人は彼をおいて死んだ。彼は幾十年の美しい宿をさりつゝある彼女の魂を堰きとめようとするかのやうにひしとその屍骸を抱いて涙のかぎり泣いた。彼は彼女の死を悲むよりは彼女を恨むのであつた。

「耶輸陀羅、おんみはなぜ私をおいて死んだのか」

これが彼の胸のうちであつた。やうやくにして彼は涙を拭つて起きあがつた、戀人の血にまみれつゝ。そしてそこに一語をも發せず、一滴の涙をも落さず、冷かにこの光景を眺めて佇んだ佛陀を見た時に彼の頭に忽ち恐しい考が起つた。

「この男が耶輸陀羅を殺したのだ」

「耶輸陀羅はこの男のために自分を棄てたのだ」

「こ奴がやつぱり勝つたのだ」

「この襤褸をさげた男が佛陀といひ戀の勝利者といふ名をほこつてゐるのだ」

「己は此奴の足に踏みつけられたのだ」

彼は嫉妬に燃えた。

「復讐！」

彼の心が叫んだ。咄嗟に彼は顔色をかへて憐みを乞ふやうに佛陀の足もとにひれふした。

「世尊よ、悉達多よ、懐しき名に呼ぶことを許したまへ。卿と親しかつた日、私は卿の信頼を裏ぎつて耶輸陀羅と密通した。私たちの關係は昨夜までもつゞいた。耶輸陀羅は罪を悔いて死んだ。私は懺悔する。羅睺羅は私の子である」

彼は相手を勝利者たらしめんよりは己とともに粉碎してしまはうとした。羅睺羅が母にばかり似てたこと、結婚後十年もたつて思ひがけず出來たといふことはこの絶望的な詭計を眞實らしくするのに好都合であつた。彼は日頃かゝる場合を豫想し、かゝる奸計を準備してゐなかつたであらうか。さはれ提婆達多は悉達多が佛陀であることを知らなかつた。あらゆる苦惱の征服者、超越者であることを。佛陀はあたかもそこにひとひらの娑羅の葉も落ちなかつたかのごとく靜に羅睺羅を從へて尼拘樓陀の林に歸つた。

提婆達多は己が投じた毒鎗の見事にはづれ、かへつて敵の名の日に日に高まるのを見て無念の齒がみをした。彼は相手を噛まうとして自ら傷いた强狗のやうに愈狂暴になつた。佛陀が三ケ月

の滞在ののち——このあひだに難陀太子も佛弟子となつた。——曷羅閦姞利呬へ歸る道すがら阿奴摩河畔の阿菟比耶村のあたりの芒果林に止住してたときに、提婆達多は更に復讐を企つべく煮えかへる無念をおさへて大膽に、厚顏に、佛弟子となるために佛陀のあとを追つていつた。この時彼のほかに釋迦族、拘利族の多くの人々も佛弟子となつた。そのなかには王子阿菟樓陀、戍達羅で教團の上首となつた剃髮師の優波離もあつた。

後篇

一

提婆達多は佛弟子となつた。こののち兇賊鴦窶利摩羅にも鎖されなかつた敎團の門は提婆達多にもまた開放されてあつた。人生のあらゆる幸福を約束された王族の生活をすてゝわづかに行乞によつて露命をつなぐ比丘となることは彼にとつて寧ろ死よりも辛いことであつた。しかも彼は敢て自ら進んで比丘となつた、たゞ復讐の機會を見出さんがためにのみ。彼は己わが宮殿に榮華を縱にするとも悉達多をして安穩に得意の日を送らしむることは到底忍び得なかつた。それほど彼の憎惡、怨恨……は强く且つ執拗であつた。今や彼の所有とては三衣、鉢、剃刀、針、水濾袋……それしきのものであつた。彼が日々の行乞から歸るにあたつて彼をまつところのものはよしそれが祇園精舍や竹林精舍のごとき宏壯な精舍でないにせよ些の溫みも潤ひもないたゞの空室であつた。況やその他の場合にあつてはそれは見すぼらしい草ぶきの木造小屋、岩窟、そして屋なんの屏障もない一樹の蔭であつた。彼は權勢や、富や、女や、遊樂や、己の後に見すてたとこ

ろのものにいたくもあこがれた。彼は樂欲の器のごとき青春の時が、しかも今まさに盡きんとするその時が死灰のごとき比丘の生活のうちに日に日に過ぎてゆくのを思つて寂しさに堪へなかつた。彼は池や川にはひつて澡浴をする時いつも自分の立派な肉體にじつと見とれた。彼は自分の體を見てさへ慾情の起るのを覺えた。この肉體は若い血に燃えて圓らかに脂づいてゐる、なほ多くの女に抱かるべく。彼は己の張つた胸板におしつけられ、長い腕にまきしめられて、喘ぎ、泣き、悶ゆる幾多の女のあることを思つて炒りつくやうな焦躁を感ずる。五體の神經は抱擁のあらゆる感覺を如實に再生する。彼はこれまで弄んだ無數の女のひとりひとりを——そのなかには耶輸陀羅(やしよーどはらー)もあつた——その各の場合の形と味をまざまざと思ひ浮べる。彼の脈管は淫慾にうづき、その顏は劣情にひきつる。彼は馬のごとく「醜惡」に醉つて恍惚としてしばし我を忘れてゐる。

比丘となつたものにすべての世樂は禁ぜられた。今この境涯に於て彼が達成を期し得るところの唯一の野望は教團の最高の權威となり萬人の渴仰の的となることであつた。この野心と、何事にまれ徹底を好むところの彼の性格からして彼は最も嚴酷な禁慾的生活法をとつた。彼は宛ら頭陀(づだ)行者であつた、そして竊にみづからそれを矜りとしてゐた、一方その似非抖擻(えせとそうぎやう)行に反抗して愈益狂ひたつ肉體的衰頽期にのぞんだ人間の苛立たしい慾情を不問に附しながら。

提婆達多(でーばだつた)の耶輸陀羅(やしよーどはらー)に對する怨恨は深かつた。彼はいはゞ罪によつて淨められた。姦淫によつて蘇つた。然るに彼女は彼の抱擁をすりぬけて古來多くの惱める者があたかもそこに贖があり忘却があるかのやうにあらそつて赴いたところの死の深淵に身を投じてしまつた。彼女は貞操に關する因襲的思想と戀との二つの手にひき裂かれてしまつた。彼は善かれ惡かれ彼女がまつたく自分のなかにあることを欲したのであつた、彼とともに悉達(しつどはーるとは)多を憎み、はたその戀をして高く貞操のうへにあらしめんことを。彼は屢姬を夢みた。ある夜は迦毗羅婆蘇都(かびらばすつ)の後宮に昔ながらの彼女と手をとつて密語をかはした。ある夜は精舍の房に彼女はそつと忍んできて尼師壇(にしだん)のうへに彼の抱擁に身をまかせた。家なく故鄕なき漂浪生活の冷かな假寢の床に彼はそのやうな夢をみるこ ともあつた。そしてその夢からさめて涙を浮めつゝ心に耶輸陀羅(やしよーどはらー)を呼んだ。

「耶輸陀羅(やしよーどはらー)よ、おんみはなにゆゑに私を棄てたのか」

提婆達多(でーばだつた)は迭り狼のやうに佛陀のあとにつゐてこの國よりかの國へ、この町よりかの町へとめぐり歩いた。そして到る處恭虔な人民は佛陀のもとに雲集し、王侯貴人もそのまへに膝を屈するのを見た。彼は敵の强大なることを知るとともに己の敗北の甚しいことを承認せざるを得なかつた。とはいへ彼はどうしても降服を肯じなかつた。復讐！　彼の決心は鐵のごとくであつた。彼はまた自分が巧なる欺瞞かと疑ひ、さもなくばひとりぎめの誇稱であらうと思つた悉達(しつどはーるとは)多の所

謂大覺が、眞僞のほどはまだ知らず、意外にも金剛不壞らしくみえるのをみて驚き、また當惑した。彼は悶々として比丘生活の幾年を過した。ひとしく三衣をつけ一鉢に身を委ねた佛陀の生活はこれとはいかばかり隔りがあつたか。

結制中佛陀の一日の起居はかうであつた。

佛陀は早朝に起きてそこばくの時を靜觀にすごしたのち鉢を携へて行乞に出る。行乞より歸つて足を洗ひ、比丘衆を集めて法を說く。比丘衆は兩三相携へて法義を究め、或は一人靜處をたづねて修觀する。佛陀は食事ののち禪室に入り禪定または休息に時をすごす。正午すこしすぎにふたたび出て四方より集つた會座の人々に——そのなかには敵意ある外道もあつたであらう——法を說く。人々散じてのち澡浴をとり、園林を逍遙する。それより比丘衆の觀法研討の次第ならびに疑惑をきゝ彼らを敎導して日沒にいたる。彼らの退くや佛陀は諸天善神のために說法して中夜にいたり、そののち少時經行してやがて寢につく。

三

かの雲のごとく水のごとく轉々去來してとゞまらざるその遊行生活に於て佛陀及びこれに從ふ幾百の比丘衆の止住の處としてはしばしばその行く先々の信徒が彼らのために準備した適當な家屋があつた。もしこれなくば彼らは到る處その蔭に雨露をしのぎ一夜を明すにたる鬱蒼たる森林、

または畢波羅樹、尼拘樓陀樹を見出さないことはなかつた。それらの止住地のうちには摩伽陀の竹林、憍薩羅の逝多林に於けるごとき宏壯な精舍もあつた。實にこの二つは佛陀が生涯幾十の雨期の最も多くを過したところであつたであらう。これらの苑林は大都城の郊外にあつて市中の塵煙に遠ざかり、閑雅寂靜にして修道に好適の地であつた。そこにはいろいろの蓮華花さき、檬果樹はかをり、棕櫚はそよぎ、竹葉は翠をしたゝらす。そしてひとたび佛陀の足をとゞめるところ貴賤僧俗のわかちなく皆この大聖をしたつて來り集り、また招待供養をした。

提婆達多は夢寐にも復讐を忘れなかつたけれども終に乘ずべき機會を得ずに隱忍して年月をへるうちいつとはなしに折々生きながらの地獄ともいふべき自分の生活にひきくらべて佛陀の澄明平穩な精神生活を我にもあらず羨望する氣持になるやうになつた。そんな時に彼はいつも己の腑甲斐なさを罵り、故らに舊怨を思ひ出してわずかに癒えかゝつた傷口をかきさばくやうなことをした。彼はまた己の苦惱の原因を自己の愚癡に歸するやうな氣持になることさへあつた。そんな時にはいつも彼は癡行、惡行、醜行に糜爛した己の淺ましい姿を思つた。彼は自分の腐敗した腸をひきずりだして鼻の先へつきつけてかぐやうな氣がした。殊に比丘となつてからの彼はどうであつたか。そこには一切の慾望が禁ぜられてあつた。それだけ彼はみじめにさもしくなつた。彼はいかに他人の受けた一鉢の美食、一枚の新衣を妬んだか。いかにまた尼僧に對して劣情をおこし、みめよき女の門を立ち去りかねたか。そして現在佛陀に對してなにをたくらみつゝあるか。

彼は癩に崩れた者がもとの姿にこがれるやうに出來るならばこの苦しい記憶を忘却の海に投じて今一度清淨無垢な提婆達多として生れかへつてきたいとねがつた。彼は凡ての人の眼から逃れたいと思つた。さりながら大地の底にかくれて人の眼は逃れてもどうして己が心の眼から逃れることができようか。彼は心の苛責に堪へず、精舍の私房、または好んで擇んだところの塚間、洞窟のうちをかけまはり、頭を物に打ちつけ、あるひは癲癇病みのやうにうち倒れて悲鳴をあげた。彼の悔恨は美しいよりは無慙であつた、神人ともに面を背けるまでに。

四

提婆達多はまた佛陀に歸依して法悦に入つてる他の弟子たちを心から羨んだ。稀には己が罪過を悉く佛陀のまへに告白して懺悔してしまはうかと思ふことさへないではなかつた。彼は野獸的な惡性のうちに野獸的なうぶな正直をもつてゐた。それは時々彼を己の意志に反してまで光明のはうに歩ませた。併しいつでも彼は今一歩といふところでひきかへした。彼には過去の罪業が如實に見られるとほり過去の惡念もさながらに蘇つた。迦毗羅婆蘇都の競技の日は彼にとつて常に現在であつた。彼はしまひにはいつもかう思つた。

「なにがどうでも己は復讐するぞ」

復讐は最後の慰藉であつた。

539963

彼の悔過はかくのごとく烈しかつた。けれどもそれを肯定し支持すべき何物をももたない彼にとつてはそばからその根柢を危ぶむやうな頼りなさがあつた。いはゞ畢竟それは良心と名づける遺傳的病塊の偶起す發作に過ぎなかつた。それゆゑその發作のすぎた後には彼は健全なもとの惡人にかへつた。そしてさきの悔過を滑稽かつ醜惡な病的苦悶の狀態として自ら嘲笑し慚愧する氣分にすらなつた。そして己の陰險執拗な復讐計畫に藝術的滿足を覺えた。

提婆達多の似非抖擻行は毫末も彼に心の平安をもたらさなかつたけれどもしかも彼はそれによつて幾年の後には教團の內外に淺見な賞讃を克ち得ることができた。同時に彼獨特の一種熱烈な雄辯も次第に多くの讃嘆者、歸依者をその周圍に集めた、それはまことに一切を見得たり知り得たる者にふさはしい平靜水のごとき辯舌ではなく、むしろその似非を裏ぎるところの淺俗野鄙な熱辯であつたけれども。かやうにして「尊者提婆達多」の名が高まるとともに彼の驕慢は忽ち增長した。彼は佛陀が彼を大弟子たちの下におき、彼らもまた彼をあまり高く評價しないのを安からぬことに思つた。そして終にいかにもして己れ覇者たらんとの願望を抱くやうになつた。

ともかくも彼は歸佛後三十幾年をすごした。

ある時佛陀が憍賞彌にゐた時に人民は擧つて佛陀及比丘衆に供養をした。ある日彼らは舍利弗、目犍羅夜那、阿兔樓陀、阿難陀、跋奢、金毘羅等のもとに行つて敬禮したが提婆達多には一瞥も

與へなかつた。彼の矜りはいたくも傷けられた。彼は門地、學識、戒行……凡ての點に於て己より劣るとも勝ることのないと考へた人々が犬猫同然な彼等愚衆によつてまのあたり己の頭上におかれたのをみた。彼はそれを平生の不平と結び付けて人民に對する憤懣を佛陀及び佛陀によつて彼よりも重きをおかれた弟子達のうへにまでひろげた。多年鬱積した不滿は一時に勃發した。彼は終に教團を脫しようと決心した。是に於て彼は摩伽陀の太子、紅顏の阿闍多設咄路を思ひ起し、ひとり佛陀のもとをはなれて曷羅闍姞利咽へとむかつた。

五

提婆達多の堂々たる風采と、似非戒行と、熱烈にして彩華ある辯舌と、使ひなれた手練手管はこの思慮なほ淺き、野心滿々たる美少年の心を忽に虜にしてしまつた。阿闍多設咄路は深く彼を尊敬し、爲めに精舍を市に近い丘上にたてゝ盛に種々の供養をした。彼は太子の厚い外護のもとに日ならずして五百の大衆を得、その勢は隆々として曷羅闍姞利咽を壓した。その時ひとりの比丘が曷羅闍姞利咽から佛陀のもとへきてこの有樣を語つた。佛陀は比丘にむかつていつた。

「提婆達多が利養を得るのを見ても決して羨んではならぬ。彼は多くの供養をうけてうたゝ煩惱を增すであらう」

またもろもろの比丘に告げていふやう

「芭蕉は實を結べば枯れる。駏驉は子を孕めば死ぬ。提婆達多の利養を貪るのもそれとおなじことである」

そののち佛陀は大衆を率ゐて竹林精舍に入つた。是に於て曷羅闍姞利咽には二つの教團が對峙することになつた。提婆達多はこの時まだ公然獨立を宣言してはゐなかつたけれどもすべてを佛陀の教團に模して隱然敵國の觀があつた。ふたつの教團はその盛大なること、最も有力なる外護者をもてること……等外觀上些の優劣もないやうに見えた。たゞ提婆達多は佛陀ではなかつた。

ある日佛陀が曷羅闍姞利咽の巷に行乞した時に偶提婆達多も同じ巷に行乞した。佛陀は遙に彼の姿を見てそこを去らうとした。その時阿難陀が佛陀に問うていつた。

「世尊よ、何故こゝを去らうとなさるのですか」

佛陀は答へた。

「提婆達多がゐるゆゑ避けるのである」

阿難陀は訝み問うた。

「世尊よ、提婆達多を畏れられることはないではありませぬか」

「私は提婆達多を畏れはせぬ。たゞこの惡人と逢うてはならぬからである」

「それなら提婆達多にこゝを去らせればよいではありませぬか」

「いや、それにはおよばぬ。思ふやうにさせておくがよい。愚な者に逢うてはならぬ。愚な者

と事を共にしてはならぬ。また是非の議論を交へてはならぬ。愚者は自ら非法を行ひ、正律に反き、日に日に邪見を募らす。それゆゑに阿難陀よ、悪知識とかゝりあうてはならぬ。愚人と事に従へば信もなく、戒もなく、聞もなく、智もない。善知識と事に従へば諸の功徳を增すことができる。阿難陀よ、この事をよく心にとめておくがよい」

六

ある時提婆達多は突然佛陀のもとを訪れて五事の嚴則を立てんことを請うた。

一　比丘は終生鹽を食す可らず
一　比丘は終生酥乳をのむ可らず
一　比丘は終生魚肉を食す可らず
一　比丘は終生乞食すべし。招待供養を受く可らず
一　比丘は春夏八ケ月は露坐し、冬四ケ月は草庵に住す可し。屋舍を受く可らず

提婆達多の提議に對する佛陀の答は　人が自らこの嚴則を守ることは隨意であるがかやうな律法は凡ての者に對して強ひらるべきでない。年齡、體質にもよることである。その土地々々の習慣もある。心の清淨を得るには樹下と屋內とを問はず、はた行乞と招請供養とを擇ばない。要は慾望に陷らぬことにある。強ひて一定の律法を用ゐればかへつて得道の礙となる　といふのであつた。提婆達多がいかなる動機からかゝる提議をしたかは知らず、彼は愈公然獨立の決心を固めた。併しながら彼の老年と順境とは彼の氣分をかはらせた。——彼はこの時已に七十歲をこえてゐた——彼はこの最後の戰をはじめるまへに出來ることならひとたび佛陀と和解が試みたいと思つた。それは實に彼が數十年來の復讐計畫を全く放棄して美しい關係を、淨い生活をはじめたいといふ衷心よりの願であつた。と同時にまたもはやいくばくもない餘命を己れ勝利者たり——寧ろ彼のほうに有利らしく見えた實際の形勢が彼にさういふ自信を與へた——しかも敵に對してかかる寬容を示し得たりてふ心の滿足を感じつゝ平和に得意に逝りたいといふ利己的な望もあつた。そこで彼は最後の勸降狀を渡すべく今一度佛陀を訪はうと心をきめた。この際に於ても降服する者は佛陀であらねばならぬ。

一夕提婆達多はさりげなく佛陀のもとへ行つた。それはちやうど佛陀が比丘衆と語つてる時であつた。提婆達多は衣服を整へ、右肩を袒ぎ、徐ろに佛陀の前に進んで佛足を頂禮してのち跪いて合掌しつゝいつた。

「世尊よ、あなたももうよほど弱られたやうに見える。弟子たちのために說法なさるのも御苦勞のことゝ思ふ。今後は私がかはつて教團を指導しませう。あなたはたゞ禪定を修してひとり靜に法を樂まれるがよろしい」

佛陀は言下に拒絕した。

「私は舎利弗や目犍羅夜那にさへ任さずにゐる。況んやお前のやうなものに任すことができると思ふか」

これは提婆達多がかつて受けたと稱する侮辱に十倍するものであつた。彼の面目は大衆の前でめちやめちやに踏みつけられた。彼は忿怒に蒼ざめた。彼は佛陀にとびかゝるかと見えた。が、自ら威儀を損せざらんがためにじつと怒を抑へた。そして默然と佛陀を拜してしづかに右遶三匝して去つた。

凡ては終つた。提婆達多の古傷は一時に痛みだした。己の滿足するごとき境涯にあつては寧ろ善良鹿のごとき彼はひとたび逆境におかれてはまさに悪狗のごとく打たれゝば打たれるほど益猛悪になつた。彼は斷乎たる決心と自信をもつて悉達多と戰はうとした。

彼は近頃佛陀の教團を脫して彼に走つた者どもから敵の手もとに彼に心をよせてる者がなほ多くあるといふことをきいた。彼は一擧にそれらの者を奪ひさつて佛陀の教團を粉碎せんがために腹心の弟子たる瞿利迦、乾陀驃、迦留羅提舍、三聞達多の四人を從へて竹林精舍へと向つた。

七

それは布薩の日の夕であつた。提婆達多は最初の挑戰をなすべく特にこの日この時を擇んだのである。竹林精舍の大堂には佛陀の說法を聽聞せんとて集つた人々が佛陀の姿の現れるのを今かと待ち設けてゐる。その時彼らはかの提婆達多が四人の弟子をひきつれて威儀堂々と近づいてくるのを見た。多くの人々は虎にねらはれた羊のやうに畏敬されてたのである、彼の提案は佛陀に斥けられ、彼自身また嚴しい教呵をうけたにもかゝはらず。提婆達多は息をのんでしづまり返へつた大衆のあひだをしづしづとほりぬけながら佛陀の不在なのを見て不滿を感じた。彼は氣已に敵を呑んでいた。彼は佛陀のために設けられた高座のうへにすつくと立つた。四人の弟子は左右に居並んだ。提婆達多は音吐朗々と宣言した。

「一　比丘は終生鹽を食す可らず
一　比丘は終生酥乳をのむ可らず
一　比丘は終生魚肉を食す可らず
一　比丘は終生乞食すべし。招待供養を受く可らず
一　比丘は春夏八ケ月は露座し、冬四ケ月は草庵に住すべし。屋舍を受く可らず

長老たちよ、この五事はこれ法である。これ毗奈耶である。眞の佛教である」

その時折あしくそこには舎利弗、目犍羅夜那等の大阿羅漢たちは誰も居なかつた。優しい阿難陀は事の危急を見て健氣にも座より起ち鬱多羅僧を著けていつた。

「長老たちよ、この五事は法に非ず。毗奈耶に非ず。佛陀の教に非ず。我に贊する人は鬱多羅僧を著けてたゝれよ」

僅に六十人の長老比丘が鬱多羅僧を著けて立つた。提婆達多は彼らには目もくれず大音聲にいひ放つた。

「我らは今日唯今より悉達多の教團を脱する。我に從はんとする者は來れ」

五百の比丘は聲のしたに立つた。人々の驚愕のうちに提婆達多は彼らを率ゐて意氣揚々とたち去つた。

提婆達多分立の噂は燎原の火のごとくにひろがつた。人々は口やかましく勝手氣儘に是非の論をした。そして彼らは各樣々な動機と氣分とをもつてこの新な佛陀を見んがために提婆達多が教團を設立した伽耶尸利沙へと集つた。

八

提婆達多は今しもこれらの人々にむかつて說法の最中である。高座の左右には三聞達多等腹心の弟子をはじめ千餘の比丘衆が居並んでゐる。そのなかで先頃竹林精舍から奪ひかへつた五百の新附の弟子が異樣に人目をひいてゐる。彼の顏は火のやうにほてつてゐる。彼は熱病やみのやうに熱い息をついてゐる。彼の大きな眼は充血してなかば恐れ、なかば悶ゆるごとき會座の衆を睨めつけてゐる。彼は人の目には見えぬ何物かを打たんとするかのごとく拳をふりあげながら言葉をついだ。

「……それゆゑに私は一切を放棄した。王子たる權威も、富貴も、望んで得られざることなきあらゆる快樂も……」

彼の面には悲痛の影がひらめくやうにみえた。彼は好んで己の棄てたところのものについて語つた、人々の賞讃をもつてその損失を償はうとするかのやうに。

「私は釋迦族の一城の主となるべき身であつた。そしてかの悉達多とは從兄弟にして無二の友であつた……」

彼は佛陀を憎みつゝもその血族關係を機會あるごとに吹聽した。

「私は狩獵や、遊戲や、宴樂に日もまた足らなかつた。加之私はあらゆる學藝に、武技に、抜群の譽をもつていた。私はいかなる競技に於ても未だ嘗て後れをとつたことはなかつた」

この時また彼の顏にちらりと影が過ぎた。

「私はそれら一切のものを放棄して一介の比丘となつた、正覺を成ぜんがために、衆生の福田とならんがために。而して私は大覺を得た。私は佛陀となつた。私は汝等を憐んで微妙の法を說く。然るに汝等愚癡の者よ、汝等は耳聾して法鼓の聲をきかず、目盲ひて慧日の光を見ず、罪業の淤泥にまみれ、淫樂の惡臭をはなちつゝ蛆のごとくに人界を匍匐ひまはる。汝等は猿のごとくに交尾み、猿のごとくに生み、猿のごとくに群居する。而して色慾の肉繩につながれた互を夫とよび、妻とよび、親とよび、子とよぶ。汝等は五慾の糧を得んがために媚び、諂ひ、匿し、僞り、

欺き、誑し、謗り、罵り、憎み、嫉み、悲み、怒り、吝み、貪り、盗み、殺し、……ありとある罪悪を犯す。汝等の愛欲に皺める顔はさらに狡智に歪む。汝等はまことに猿よりも醜悪に、猿よりも奸悪である。汝等我唾を啗ふにも足らざる奴輩よ、汝等は生死に輪廻してやまぬであらう。汝等はまさに畜生道に堕ちるであらう。汝等は餓鬼道に堕ちるであらう。汝等は大紅蓮の氷に凍え、大焦熱の焔に燒かれ、阿鼻の底に叫喚しつゝその時はじめて私を思ふであらう……」

彼はなほ何事をかいはうとしたが激情か舌を縛した。彼の脣は徒にふるへた。突如彼は席を蹴つて立ちあがつた。そしてふたたび彼らを見まいとするかのやうに身を飜して去つてしまつた。人々は默々として歸路についた。重い、惱ましい、病むごとき氣持が彼らの胸を壓した。彼らは歡喜と力とを得るかはりに手痛い笞を感じた。それは慈悲の教誡ではなくして憎悪の咆哮であつた。彼らはこの新な佛陀を長敬したけれども愛慕することはできなかつた。提婆達多は人間を輕蔑し、厭悪した。彼は自らあらゆる醜悪な人間性の所有者、經驗者であつたがために凡ての人間は彼の眼にさながら汚穢な五臟六腑のまゝに見えた。彼は寧ろ會座の衆に向つて自分を罵つてるのであつた。そして彼の苦しい心が纔にそこに慰藉を見いだした。

九

冬のひと日

阿闍多設咄路（あぢやーたしやとる）は今しも提婆達多（でーばだつた）を拜して辭し去つた。提婆達多は草庵の戸口に立つて馬上に躍る太子の姿をいつまでも見おくつてゐた。そして太子の影が彼方の林にかくれて見えなくなつた時に彼はやうやく扉をとざしてひそかに吐息をついた。太子は曷羅闍姞利呬（らーじやぐりは）と伽耶尸利沙（がやーしーるしや）とのあひだに、尼連禪那河（なーいらんぢやな）の近くにある莊園へ泊りがけで狩獵にきた時にはいつでもかうして提婆達多（でーばだつた）に敬意を表しにくるのであつた。彼は特に佛陀の、若くは提婆達多（でーばだつた）の教にのみ一向專念に歸依するといふ譯ではなく、在來のいづれの宗派、學派をも或程度まで信じた。たゞ就中秋霜烈日のごとき提婆達多（でーばだつた）の說法と、その堂々たる威儀と、巧妙な迎合とが深く彼を悅したのである。かやうに彼は互に調和しがたい彼此の教を難なく同時にとりいれてすこしもその矛盾撞著に苦しまぬばかりかそれはそのまゝ彼を心から幸福にしたやうにみえた。いはば凡ては彼の燃えさかる青春の香爐に投げ入れられ馥郁として人を醉はすところの紫煙と化しさつたのであらう。それはさうと提婆達多（でーばだつた）は草座に腰をおろしてふたゝび吐息をもらした。彼はいつものとほりさんざんに太子を叱責し、罵倒した。彼は太子と賤民とに於て少しもその呪詛的態度をかへなかつた。寧ろ太子に對して殊に烈しいやうであつた。さはいへ彼は今しかの年少輕佻な聽聞者を教呵し去つた聖者とも見えず、さながらうち敗られた者のごとく悄然とうなだれてゐる。それはこの風姿颯爽たる紅顏の太子は常に提婆達多（でーばだつた）をして己が過ぎし歡樂の日を思ひ起さしめたからであつた。嗚呼金色（こんじき）に耀いた日、芳しい酒にも似た日、その日に彼は憧れてやまない。その日はすでに遙に遠ざかつた。

その日はふたゝびくることはない。彼の齢はいぶせき草庵のうちにくはゝり、肉體は幾枚の襤褸のしたに朽ちはてた。ひとたび彼を見棄てた「青春」の手弱女はもはや彼の胸にかへることはないであらう、よしや閻浮提の富を積むとも、赫々たる佛陀の名をもつて招くとも。彼は昔日の我が俤ともいふべき阿闍多設咄路を見るたびにこの思をした。彼は嚙み裂いてやりたいやうな妬ましさを覺えた。そして狂氣のやうに太子を罵つた。彼は懺悔にことよせて太子の遊蕩生活をその口にしがたい點までも語らせずにはおかなかつた。彼は醜惡な熱心をもつて貪りきいた。そして益嫉妬を燃した、恰も疥癬患者がその瘡蓋を掻きむしつて愈痒さを增すやうに。しかもこの嫉妬あるがゆゑに一層太子は彼にとつてなくてはならぬものとなつた。さりながらかゝる烈しい嫉妬も彼をして太子を憎ましめることはできなかつた、なぜならば彼は太子を戀したゆゑに。

十

提婆達多は阿闍多設咄路を戀した。併しながらこの時已に七十をこえる高齢に達してた提婆達多が太子に對して壯年者のするごとき肉的な戀をよせたとは考へられない。が、彼は出來るならばさうあることを望んだであらう。さはれこの戀は到底成るべくもなかつた。彼はいかなる思をもつて年老いて見る影もない己、徒に名のみは佛陀でその實一介の乞食僧にすぎない己を顧みたか。もし今昔ながらの花やかな釋迦族の王子であつたなら！　もしさうならば彼は必ずこの美少

年を蕩かして肱を交へて己を戀人と呼ばせずにはおかなかつたであらう。彼はいはゞ閻人の焦燥を感じた。

いふまでもなく阿闍多設咄路は提婆達多をその聖僧らしい點に於てのみ敬愛した。かの隼のごとくひたすらに飛翔してやまぬ太子の若い心は已れ世樂に耽溺しつゝもあくまでも痛快徹底的な提婆達多の說法と戒行との故に彼を尊崇した。提婆達多の戀は絶望的であつた。彼はそれをおくびにも出すことができなかつた。彼は最後まで「聖僧」を裝はねばならなかつた。彼は丁度耶輸陀羅に對して「友情」を利用したと同樣な矛盾に出くはした。併し彼女の場合にはその矛盾を絶大な力をもつて解くものがあつた。それは若い性の相違であつた。美しい魚がうまうまとおびきよせられて「友情」の餌をふくんだときに彼女はそこにその友情を裏切るところの不義な戀慕の鉤のあるのを見出した。時はすでに遲かつた。それは恐しい「異性」の刺をもつた鉤だつた。逃れるすべはなかつた。提婆達多の醜い、力强い「男」が耶輸陀羅の美しい、か弱い「女」をつかまへてはなさなかつた。彼女の「女」は彼女の必死の抗爭にもかゝはらずいつしか彼の「男」に身をまかせてしまつた。太子の場合はこれと異りそこに何等不思議の聯鎖が望まるべくもなかつた。事情は簡單である。太子の敬慕の條件が破れる時卽ち關係は斷絶する。提婆達多はこの矛盾に苦んだ。けれども彼はこの有利な情勢を空しく遂げ難い戀の煩悶のうちに看過するやうな者ではなかつた。彼はやくも太子の胸底に老衰して一個の好々爺となり、覇氣も經綸も失ひはてゝたゞ

歸依三昧に餘命を送る父王の統治に對する大な不滿、焦慮の潛んでるのを看破した。そこには一國の統治者として爲さねばならぬ內外無數のことが手をつけずに放擲してあつた。これは英邁で己が理想に邁進しようとする年少氣銳の太子の眼にはまことに坐視するに堪へぬ狀態であつた。

提婆達多は太子に對する嚴しい敎呵を目だたぬやうにやめてしまつた。そしてそのかはりに彼は靑春の過ぐることはやく、凡ての快樂は捕へぬうちに飛びさりつゝあるといふことを常に力强く說ききかせた。また自分が餘命幾くもなくて信仰深い太子の光輝ある治世を見ることもおぼつかないといふことを再三くりかへした。佛陀がこの夢みるごとき若者に人生の無常を說くになんの妨があらうか。たゞ提婆達多はそれに對して我々のとるべき道についてはことさら沈默してそれを太子の判斷にまかせておいた。

ながいあひだの焦慮と躊躇ののち阿闍多設咄路は終に頻毗娑羅を幽閉して自ら摩伽陀の王となつた。

十一

腕を拱いて部屋のなかを步いてた阿闍多設咄路は苛立たしく侍臣を呼んだ。そしてその姿が戶口に現れるやいなやがみがみと呶鳴りつけた。

「耆婆伽はまだもどらぬか」

侍臣は戰々兢々として長りながら答へた。

「大王よ、耆婆伽はまだもどりませぬ」

阿闍多設咄路は不興げに眉をよせた。そしてなにかいはうとしたがそれも懶さうに口をつぐんだ。彼は頗で指圖して侍臣を退かせた。阿闍多設咄路は日頃渴望してた王位にのぼつてからなにか始終不滿、不快、不安に責めさいなまれてゐる。彼は確に己が理想に直往邁進した。そしてともあれ善政を施した。摩伽陀の前途は光明に耀いた。大多數の臣民は彼を歡呼し、悅服してるやうにみえた。が、彼はすこしも悅ばなかつた。彼の胸のうちにはなにかしらひつゝこい、根强い、癌のやうなものがわだかまつて內部から絕えず彼を苦しめた。彼の心は病んだ。そして物に觸れ、事にあたつて痛んだ。彼はおそろしく短氣に、粗暴になつた。それはさうと彼は今何故に耆婆伽を待ちかねてるのか。彼は簒奪ののち復辟をはかる者の現れるのを懼れて禍根を永久に斷たんがために父王の弑虐を思ひたつた。そこで父王が彼の命じた些細な獄則を守らないのを口實にしてまつた。彼は父王の餓死を今日か明日かと待つてたが不思議にも年老いた父王は思ひのほかながく命をつないでこの日もまだ生きてゐる。これも彼の不機嫌な理由の一つであつた。彼はそれが自分に不愉快な、他人に不評判な仕事だと思ふだけそれだけはやくかたづけてしまひたかつた。

——口實ばかりではなく彼は眞に怒つたのであるが——さらぬだに乏しい食物を絕對に斷つてし

それで彼は先刻その專門的知識と彼に對する忠誠とに十分な信頼をおいてる侍醫の耆婆伽に命じて、父王の命がまだどれほどつゞくかを檢分にやつたのである。彼は最初ひと思ひに父王を殺してしまはなかつたことを心から後悔した。

老王はどうして命をつなぎとめたか。流石にこの善良な不幸な人のうへには阿闍多設咄路の力をもつても如何ともしがたい人々の同情が集つた。そして嚴罰をもつて脅すところの禁令と一味の者の油斷のない監視とにもかゝはらず時折何人かがわづかな食物をその牢獄に投げいれるのであつた。格別の慈悲をもつて日に一回だけ老王を見舞ふことを許された阿闍多設咄路の母韋提希夫人は、身に麨蜜を塗つていつてひそかに老王を養つたといふ。老王の同情者らはかうして日に日に弱つてゆく老王の命をつなぎつゝ阿闍多設咄路の胸に恩愛の情の蘇るのを賴りなく待つてゐるのであつた。

十二

耆婆伽は頻毗娑羅の寵臣であつたと同時に阿闍多設咄路の寵臣であつた。彼は老王に忠誠であつたとほり阿闍多設咄路にも忠誠であつた。彼は機會あるごとに面折苦諍して阿闍多設咄路の眠つた良心を呼びさまさうとした。それは屢阿闍多設咄路を激怒させたけれどもしかも彼は己れ凶惡なるにもかかはらず誠實耆婆伽のごとき者を愛した。先王の同情者は阿闍多設咄路の王位簒奪

の後次第に彼から遠ざかり、彼もまた彼らを遠ざけねばならなかつた。そこで現に彼の周圍にあるのは彼の一味徒黨の者ばかりであつた。彼は彼らを愛することも、信賴することもできなかつた。そのなかでたゞ耆婆伽のみが確に彼を裏切らないところのものであつた。その直言は耳にさからはぬではなかつたけれども追從者の諂諛のやうに厭惡を催させることはなかつた。

耆婆伽は來ない。阿闍多設咄路は彼を呼びにやらうとしたがすぐに思ひかへしてやめた。老王の有樣を出來るだけ人に見せたくなかつたのである。

耆婆伽は來た。彼は王の不機嫌を見てとり恭しく跪いていつた。

「大王よ、遲なはりました。老王樣からいろいろお話がありましたので」

耆婆伽は見るから正直らしい溫厚な顏をしてゐる。賢さうな廣い額、長く胸に垂れた鬚、そしてそのかた方の目もとには大きなほくろがある。

「耆婆伽、私はお前を父上と長談議させにやつたのではない。お前はなぜ自分の役目だけをすませてもどつてこぬか」

「大王のお慈悲を願ひます」

「宥す。父上の樣子はどうか」

阿闍多設咄路は面を和げた、一刻もはやくそれがきゝたいので。

「もう三日のほどもいかゞかと思はれます。それにつきまして……」

「……」

「それにつき是非とも御聽許の願ひたい儀がございます。老王様の仰せには……もう幾日の命でもないと思ふ……」

耆婆伽は我を忘れて聲をあげて泣いた。阿闍多設咀路は苦々しげに顔を背けたが流石にこの可憐な者を叱り退けることはしなかつた。耆婆伽は涙を拭つてやうやく言葉をつゞけた。

「それで御存命のうちにたゞ一度大王とお話がされたいとのことでございます」

阿闍多設咀路の顏色は見るみるかはつた。耆婆伽は哀願の眼をあげた。

「老王様の今はのお望でございますゆゑ……この耆婆伽もともどもに大王のお慈悲を願ひます」

「ならぬ」

阿闍多設咀路は父王を見るに堪へなかつた。かつその傷ましい姿を見ることによつて折角の決心を鈍らすかもしれないことをおそれた。彼は眼をとぢ耳を掩うてしやにむに計畫を遂行してしまはうとするのであつた。

十三

耆婆伽は涙ながらにくりかへした。

「お言葉をかへして恐れいりまするが老王様の最後の……」

「ならぬといつたではないか」

「大王よ、今一度御思案を願ひまする。あの有様になられた老王様の今はのきはのお頼みを無碍にお卻けになつたといふことがきこえましたならば、おそれながら人民どもは大王を何と申上げませうか。人民とは申しませぬ。老王様の御恩顧をうけました宮臣たちはもとよりこの耆婆伽とてもおなじことでござります。これは決して老王様のおためのみならず大王の御身のうへのためにも耆婆伽が命にかけてお願ひ致しまする」

阿闍多設咀路の胸は亂れた。彼はいかにすべきかを知らなかつた。彼はたゞその場から逃げだしたいやうな氣がした。やゝ久しくして彼は氣のぬけた棄鉢な調子でいつた。

「どうなりと勝手にせい」

耆婆伽は嬉しさあまつて言葉もなく王を拜して退いた。

やゝあつてなにかの異變を豫感するかのやうに不安に緊張してる阿闍多設咀路の眼のまへに蓬髮垢面の生靈のやうな頻毗娑羅王の姿が現はれた。彼は擔架にのせられて運ばれてきた。そして耆婆伽と侍臣の肩にかゝりながらやつと足を運んで倒れるやうに座についた。阿闍多設咀路は頗で指圖して二人を去らせた。奇怪な父子はさしむかひになつた。頻毗娑羅は己が幾十年のあひだ摩伽陀の大王として坐りなれたその師子牀に凶惡無道の我子が新な大王として坐つてるのを見た。

阿闍多設咄路は始終眼をそらして父王のはうを見まいとした。それは羞恥よりも、同情よりも、まづこの見苦しい姿に對する厭惡であつた。それは彼の濃い肉親なるがゆゑになほさらさうであつた。彼は病狗のごとき味方よりも虎のごとく美しい敵を愛した。老衰のうへに餓死に瀕し、訴ふるに處なき身の不幸に打たれた頻毗娑羅王はそのまゝ絶え入つてしまふかと思はれたが、感情の力がからうじて彼を蘇らせた。彼はかすかな、思をこめた聲で呼びかけた。

「阿闍多設咄路」

呼ばれた人は答へなかつた。苦しい沈默がつゞいた。そのあひだ老王は溺愛と怨恨と、憐愍と忿怒との混淆した名狀しがたい氣持をもつてじつと我が子の背けた顏を見つめてゐた。

「阿闍多設咄路、お前は何故私をこのやうなめにあはせるのか」

阿闍多設咄路はなにか眼にみえぬものに首をねじむけられるやうにそろそろと父王のはうへ顏をむけた。

「あなたが國王としての義務を忘れ、國政を放擲して顧みなかつたからです」

「私は義務を忘れたといはれる覺えはない。が、それはどうでも宜しい。それならばなぜお前はそれについて私に注意してはくれなかつたのか。もしまたお前が自分で國政をとりたいとならばなぜ穩かにうちあけて私に話してはくれなかつたのか。お前の望とあらば私はいつでも喜んで位を讓つたであらうものを……」

老王は暫く息をやすめてゐた。

十四

老王は言葉をついだ。

「私はとうから佛陀に歸依してゐる。そのうへ私はもう老衰した。それゆゑ心のうちでは常に退位を望んでゐた。併し折角夢うつゝに樂んでゐるお前に國王といふ徒に嚴めしい空名の齎す勞苦を覺えさせたくないと思ふばかりに一日一日とのばしてゐたのである。それをお前はなんたることぞ……なぜお前は私にうちあけてはくれなかつたのか」

「……」

「そのうへお前はこの頃日々の食物を斷つて私を餓死させようとする。阿闍多路咄路、お前はいつたいこの私をお前の何だと思ふ」

今までさしうつむいてた阿闍多設咄路はこの時きつと老王を見た。そして昂ぶる感情をおさへ、努めて王者の權威を保ちつゝいつた。

「父上、私はあなたが私の父、生みの親であることをよく知つてゐる。併しながらあなたが私の何であらうと、現在私は摩伽陀の國王である。それ故この國内に於ては何程些細な事といへども私の意に反して行はれてはならぬ。否、出來得べくん

ば全き閻浮提をも私の意のまゝにしようと思ふ。それを何事ぞ、あなたは私の命じた獄則を破り、牢獄の壁に登つて窓から佛陀を遙拜した。國王の命令の當不當は何人も、殊に一個の囚人たるあなたの論議すべき限でない。それは左右なく遵奉されねばならぬ。しかも私は出來るだけの寬容をもつて三度もくりかへし戒告を與へた。そして三度めには確にことわつておいた筈である。これが最後の戒告である。これをしも無視されるならば斷然食物を斷たれるであらうと。然るに不都合にもあなたは依然として犯則をつゞけた。それゆゑ私は私の命令を、好意を蔑視した者に相當な、寧ろ寬大な刑罰として食物を斷つた。饑餓は畢竟肉體的苦痛と生命の問題に過ぎない。國王に對する侮辱の應報としてはあまりに輕きに失しはしまいか。私はあなたが感謝の涙をもつて刑罰をうけることを信じて疑はなかつた」

阿闍多設咄路（あぢやーたしやとる）は昂然としていひ放つた。けれどもその時彼の胸底にはせつない羞恥の念が潛んでゐた。彼はその言語道斷ではあるが一見堂々たる表面的理由のほかに全然利己的な、卑劣な隱れた理由のあることを忘れることができなかつた。

老王の痩せほゝけた顏にかつと血の色がさした。併しあくまで我が子の愛に溺れた彼は必死と心をしづめて慾望と驕慢に燒け爛れた我が子の胸にどうぞして今一度恩愛の情を呼び生けようとした。

「それならばそれでよろしい。私にも考はあるがそれはまづ後のことゝして、私は是非ともお

前にきかせておきたいことがある……」

「私はいづれ遠からず死ぬ身であるが、これはお前のためのみならず後にのこるお前の母のためにも話しておきたいと思ふ。阿闍多設咄路（あぢやーたしやとる）、お前もよく心をとめてきいてくれよ」

十五

「私たちは結婚してからながいあひだ子といふものがなかつた。それゆゑお前ができた時の私たちの喜はどのやうであつたらう。國中には未曾有の大赦を出して多くの罪人を放免した。祝宴は夜を日についであげられた。それは私たちばかりの喜でなく摩伽陀（まがだ）ぢゆうの喜であつた。それからはもう一にも二にもお前のためであつた。お前のためばかりに私たちは生きてゐたやうなものであつた……」

「お前は生れるなり大層ひ弱かつた。そのために私たちはどれほど心を痛めたかしれぬ。藥といふ藥は殘らずのませた。手あてといふ手あては悉くつくした。お蔭でお前はどうぞこうぞ成長した。成長するに從つて丈夫になり、背丈もすらすらとのびて今見るやうなお前になつた。それを見る私たちの心はどのやうであつたらうか。どれほどお前を賴もしいものにしてゐたらうか。お前は私たちのあひだの深い愛情のたつたひとつの生きた記念物であつた。夫婦の愛情が混淆し、融合して、お前といふ眼に見える生きたものとなつて私たちのまへに現れる。そして私たちの愛

情の正しい産物であることの承認を求めるやうに私たちをその特殊の關係に於ける名によつて父よ母よと呼ぶ。それをきく時の私たちの思はどうであつたらう……」

「私たちはお前の顏かたちやものごしのうちにお互に似てゐる點を綿密にさがしだした。またお前の性質のうちにも明にお互の爭はれぬ面影を見出した。そしてそれが益お前を忘れがたいものにした。私たち夫婦のあひだにも、またお前に對しても、無情や冷酷などといふ忌しいものは露ほどもありはしなかつた。それをお前はどこから、誰からうけついでそのやうな恐しい心をもつやうになつたのか……」

「私はお前のためにこのやうな有樣になつた今でさへお前を愛してゐる。深く深く愛してゐる。そのお前が私を……私はどうしてもお前の本心から出たこととは信じられない。これは必ずや一時のふとした氣の迷ひか、または二三の恩知らずな惡人どもの卑劣な教唆から起つたことにちがひない。さう思つて私は日夜神佛の加護を禱つてゐた。然るに何たることか。お前は現在眼のまへにかやうな私の姿を見ながらすこしも悔悟の色がみえない。阿闍多設咄路、お前はきいてゐるのか。お前は私のいふことが耳にはいらぬか。お前はもう一度もとの阿闍多設咄路にかへつて私たちを喜ばせてはくれぬか。さうすれば私たちは決して今度の事のためにお前を惡く思ふやうなことはせぬ。可愛いもとの阿闍多設咄路だ。大事なもとの阿闍多設咄路だ。お前は年をとつても う望も甲斐もなくなつた私たちのたつたひとつの望、たつたひとつの賴り、私たちの身がはりで

あるものを。お前は第二の頻毗娑羅である。私たちはお前に於て生きのびる。お前に於て若がへる。私たちはこれほどお前を思つてゐる。これほどお前を力にしてゐる」

老王は疲勞と淚に妨げられかた手に額をさゝへて息をついてゐた。

十六

「それをお前は無體にも私を捕へて獄に下したばかりか些細な獄則を守らぬといつて、それはお前にはなんの迷惑にもならず、それにひきかへてかやうな境涯におちた私には何よりの慰藉である世尊を遙拜したといふことの理由で日々の食物を斷つてしまつた。さうしてお前は私の死ぬのを今か今かと待つてゐる。私はありがたい世尊の教を片時も忘れはせぬ。今更僅の餘命にさしたる執着はもつてをらぬ。それにもかゝはらずこのやうな身心の苦をうけながら何故生きながらへてゐると思ふか。人は未練といはゞいへ、私はどうぞしてもとの阿闍多設咄路にかへつたお前の顏がひと目みて死にたいと思ふからである。またひとつにはお前にすゝぎがたい親殺しの惡名を負はせたくないばかりにである。韋提希とてもおなじことである。家來たちもさうであらう。韋提希は私を見舞ふ度毎に體に蒭蜜を塗つてきては私を養つてくれる。また恩を忘れぬ者のしわざであらう、誰ともしれずあの高い牢の小窓から折々食物を投げ入れてゆく。私はそれを食うて今日まで命をつないでゐた。かうして私たちはお前の心の改まるのを待ちに待つてゐた。併しな

がら私はもう自分の命の旦夕にせまつてゐるのを知つた。それ故私は何もかもお前にうちあけてどうぞしてもとの人間にたちかへらせたいと思つてきたのである。阿闍多設咄路よ。もともとほり私たちの阿闍多設咄路になつてくれぬか。これが私の一生の頼みだ。どうぞきいてくれよ」

老王は我が子にむかつて手を合せないばかりであつた。阿闍多設咄路は一言の答もせず眉をよせて顔を背けてゐる。彼の胸中にはふたつの感情が烈しく戦つてゐる。この溺愛者に對する愛憐と、厭悪と。彼はなんといひいづべきかをしらなかつた。老王は今か今かと答を待つた。併しいつまでたつても答がないのをみて彼はそれを拒絶と考へた。彼はかくまで誠心こめた哀願が無情に卻けられたので赫として詰めよつた。

「阿闍多設咄路、お前には耳がないか。親の恩がわからぬか。お前の體は髪の毛の先までも両親のものではないか。お前がさうして安樂に日を送つてゐるのもみな親のお蔭ではないか。お前は私たちに産んで育てゝもらつたのではないか。お前にはこれほどのことがわからぬか」

十七

阿闍多設咄路は詰責の言葉をきくとともに勇氣を恢復した。憎悪が彼を支配した。彼は感情をおさへて冷にいつた。

「父上、私たちはこれまで幸にして一筋の道を一緒に歩いてくることができた。が、今不幸にして右と左に別れねばならぬ時がきたやうに思ふ。私たちは屑よく別れようではありませぬか」

「私はまづ卽位について私があまりに躁急且つ粗暴であつたことをあなたのまへに陳謝する。次に私はあなた方からうけたひとかたならぬ愛育について心から御禮を申上げる。私は恩知らずではない。恩を忘れた者でもない。さりながらこの點に關する私の思想感情はさやうに單純ではない。私はあなた方の私に對する愛情について感謝以外のあるものをもつてゐる。私はすこしもの心づいてからはあなた方の全く盲目的な愛情に對して深い憐愍と厭悪とを感ずるやうになつた。あなた方は溺愛に痴れて阿闍多設咄路を梵天の子のやうに思ひなした、その智に於て、徳に於て、才に於て、容姿に於て。そしてそれを自分にもひとにも誇られた。御覽なされ、私は決して梵天の子ではない。憐むべき一個人間の子である。私はあるがまゝの私を愛してほしい。見苦しい、憫笑すべき、恩愛の愚癡が縦につくりだした私の幻影を愛してほしくはない。また私は第二の頻毗娑羅よ、第二の韋提希よと徒に親愛な名に呼ばれつゝ實は老衰無力となつたあなた方の手足となつてあなた方の慾望をみたし、理想を完成するところの恰好な奴僕として信頼され、鍾愛されることに對して大な不滿を感ずる。しかもかゝる利己的な愛情に對して感謝を要求さるゝに於ては私の不滿は終には憎悪と變ぜざるを得ない。私は何よりも先づ私であらねばならぬ。私は第二の頻毗娑羅たり、第二の韋提希たることに些の興味も名譽も感ずるものではない。また私は一般

に父母の子に對する情愛について根強い厭惡をもつてゐる。とはいへ情愛のうすいことにはもとより平かであり得ない。此點に於て私は進退兩難の立場にある。何故といふか。父母は、いや今はお互についてのみいへば宜しい。それはあなたの言葉によつても明であるとほり、あなた方は私をあなた方の醜惡なる性慾行爲の記念物として……」

「阿闍多設咄路（あちやーたしやとる）、お前は何を……」

「まづおきゝなされ。あなた方は私を××××××

れは決して卑怯ではない。正直な事實である。そこに恐しい矛盾がある。無慙な撞著がある。私は殘忍な事實の爪で頭からふたつにひき裂かれる。そしてこの苦痛をなめさせるものは畢竟やはり父母である。父上、よくおきゝなされ、生殖の罪は人間のいかなる罪よりも罪である。それは實に簒奪よりも弑虐よりも更に大なる罪である……」

老王はもはやきくに堪へなかつた。彼の絶望は忿怒となつた。

「それは何事だ。不孝者め。罰あたりめが。お前のやうな者は私の子でない。頻毗娑羅の子でない。貴様は戍達羅の子だ」

「默れ」

阿闍多設咄路は立ちあがつた。劍に手をかけた。彼の顔は蒼白になつた。が、心にくゝもじつと怒をおさへた。息のつまるやうな沈默がつゞいた。やゝあつて彼は侍臣を呼んでしづかに父王を指しつゝいつた。

「今より頻毗娑羅を大不敬の罪によつて獄に下す」

老王はふたゝび擔架にのせられ、放心のさまでつれだされた。

阿闍多設咄路は直に韋提希禁足の命令を下したのちまた荒々しく室内を歩きはじめた。彼は精液をしぼりつくしてくしやくしやの皮嚢となつた父母に對して吐くやうな厭惡を覺えた。彼はせめて父母が肉體だけなりと美しかつたらと思つた。彼はまた苦惱、汚穢、恥辱、淫慾の口から反

吐のごとく吐きだされた己の體を思つた。そして穴にでもはひりたい氣持になつた。彼はまた父母の膝にすがつてかきくどき怨みたかつた。彼は一方に父母に對する奇怪な思想感情に毒されながら他方に子としての異常に深い情愛をもつてゐた。彼はやさしくありたかつた。孝養をつくしたかつた。しかも彼をして冷酷無情ならしめるものは父母その人であつた。たとへば彼らは故意にに彼の禁令を無視した。そこで彼は餘儀なく、正當に、冷に、——殘酷にではない——義務を果すところの愉快をさへ感じつゝ相當の刑罰を加へた。これは彼の畸形な性格のひとつであつた。

彼は頻毗娑羅のまへに阿闍多設咄路を主張したけれども己のまへに頻毗娑羅を承認することができなかつた。

十九

老王の投ぜられた牢獄はなかば地中へ掘りさげた奥深い長方形の石室だつた。それは戰時には人質を監禁しておくために、平時には重い國事犯囚を入れるために用ゐられるもので、人命の極めて安價な當時にあつては殊に囚人の生命などにあまり多くの注意がはらはれる筈はなく、自然この石牢は人間がながいあひだ生活するに堪へられるやうな具合には造られてゐなかつた。こゝは天井も、壁も、床も、すべて粗削りのまゝの石で、一方の壁にばかり、それも人の手のとゞかないところにたつたふたつ、ひとつは入口に近く、ひとつは奥の隅に近く人頭大の風通し兼明り

とりの圓い孔があいてるだけで、その他には廊下に向つた入口の一面に金具を打つたぐわんぢやうな戸にあけてある四角な孔、それは見廻りの牢番が囚人の様子を見たり、食物を與へたりするための孔から乏しい間接の光線がこの中に棲む不幸な人間に恵まれるのみであつた。それゆゑこの牢獄はいつも暗くじめじめして無數の蛞蝓の巣となり、守宮や蝙蝠の隠れ家になつてたので、變に濕氣臭いばかりでなくむつとするやうな蝙蝠特有の臭がしみこんでゐた。

ふたたびこゝに投ぜられた老王はすでになかば狂亂してゐた。彼は烈しく阿闍多設咄路を呪ふかと思へばまたさも恩愛の情に堪へぬらしく溺愛の言葉をくりかへした。そして力ない聲をからして我子の名を呼びつゞけた、この地下の牢獄から國王のところまで厚い石壁をとほしてその聲がとゞきでもするかのやうに。彼の信仰は今や狂信となり、偏執となつた。彼は今にも餓死しようとする弱りはてた體の力を骨と皮ばかりになつた手足の指にあつめて石壁の凸凹をたよりに高い孔のところまで攀ぢのぼらうとする。そして蟻のやうにからうじてすこしはひあがつたとおもふと力がつきてどさりと落ちる。暫くは起きあがることもできずに死んだやうに倒れてゐる。と、またひよろひよろとたちあがつて石壁にしがみつく。その孔からは遙に佛陀の止住してる姞栗陀羅短吒の山が見えるのであつた。

阿闍多設咄路は老王がまだ執拗にそれをやめないことを知るや即刻その窓をふさいでしまふやうに嚴命した。併し命令がまさに實行されようとしたときに彼はそれを取消してあらためて囚人

に左の旨を傳へさせた。

「それは國王が慈悲をもつて囚人に日の光を仰がせるために設けた窓である。國王の禁令を蔑視し、その好まないことをさせるために設けたものではない。囚人に一層よくこの旨を了解させるために、また己にいづる罪のいかに己にかへるかを知らしめるために窓はこれまでどほり開放される。そのかはり囚人の足のうらを削りとらせる」

彼はまた次の言葉をつけくはへた。

「記憶せよ、戍達羅の子は何よりも侮辱を悪むことを」

二十

阿闍多設咄路の外護のもとに提婆達多は旭日昇天の勢を得た。彼の特色ある熱辯と、より峻嚴な生活法は一部の者によろこばれ、且つ彼が佛陀よりすぐれたものである證據のやうに考へられた。のみならず彼が新王の歸依をうけてることは彼の周圍に彼に對する、及び、間接に新王に對する多くの追從者を集めた。彼は王をとほして意のまゝを行ふことができたであらう。いはゞ生殺與奪の權を得たやうなものであつた。けれども彼はその絶對有利な地位を利用して年來の仇敵悉達多を殺さうなどとは夢にも思はなかつた。それは決して彼の執拗且つ徹底的な復讐心を滿足させるものではなかつた。悉達多はその死によつて寧ろ彼の好敵手となるとも敗北者とはな

らぬであらう。彼はそれよりは絶望的な逆境のもとに敵をして飽くまで敗北者、失脚者の苦痛屈辱をなめさせつゝ己れ勝利者として相手の無慙な笑止な有様をじつと眺めてやりたかつた。彼の望は達せられたかのやうにみえた。佛陀の教團は一朝にして頻毗娑羅王の無盡藏の供養を失つてしまつた。そのうへこれまで佛陀に屬してた人々は僧俗の別なく日に日に提婆達多のはうへとうつゝてきた。

併しながらこの形成はあまり永くは續かなかつた。提婆達多は佛陀の慈悲にかふるに人間に對する烈しい憎惡をもつてゐた。彼は不斷の叱責者、呪詛者であつた。彼のもとにあつて人々の心は惱んだ。それは偉大な指導者の手にすがつて暗黑より光明へと導かれる足弱となるのではなくて狂暴な主將に率ゐられて惡戰苦鬪しつゝ終には破滅に陷る兵卒となることであつた。人々の心は漸く彼をはなれた。かうなると人々が阿闍多設咄路に對して竊に抱いてた不快も間接に彼に禍した。多くのものは提婆達多をすてゝ佛陀に復歸した。一個偉才ある人間より佛陀のはうへ。

傳ふるところによれば舍利弗と目犍羅夜那とは提婆達多に誘惑された五百の比丘を救はんがために伽耶尸利沙へ行つた。その時恰も說法中であつた提婆達多は二人を見て彼らも終に己の教團に入るために來たものと思つていつた。

「お前たちはさきには私の新則を認めなかつたが今かやうにして來たのは遲いながらもよいことである」

二人は默然として座に著いた。提婆達多は舍利弗にむかつていつた。

「私はすこし疲れた。お前かはつて說法せよ」

これは佛陀の口吻であつた。かくて彼は退いて僧伽梨を疊み右脇に臥して眠つた。そのあひだに目犍羅夜那は神通を現し舍利弗は諄々と法を說いて五百の比丘に法眼淨を得させ、直に彼らを率ゐて佛陀のもとに歸つたといふ。

佛陀に復歸した者のうちには今やかへつて忘恩的に提婆達多に對して惡語を放つ者さへすくなくなかつた。或者は彼を罵つて欺瞞漢だとまでいつた。まことに彼は欺瞞漢であつたであらう。さりながら彼らを欺いた者は提婆達多よりは寧ろ彼ら自らではなかつたらうか。人々のかやうな仕打はますます提婆達多をして人間を呪はしめた。彼はもはや衆生の濟度のために現れた佛陀ではなくてそれを滅さんがために來た鬼神のごとくにみえた。そしてそれが愈彼を孤獨にした。

二十一

阿闍多設咄路はもとよりこの形勢を悅ばなかつたけれどもさりとて己の權力を用ひて佛陀の教團に壓迫をくはへるやうなことはしなかつた。彼は佛陀及びその教團そのものに對して格別惡感をもつてゐなかつたのみならずそのやうなことをして人々の不平を誘發するのをおそれた。しかも彼は可憐にも依然として提婆達多に對して尊崇をつゞけた。併し形成は益面白くなかつた。あ

る日佛陀か姑栗陀羅矩吒の山陰を經行してた時に山上から大石が落ちてきてその破片が佛陀の足を傷けた。それを世間では提婆達多のしわざだといひはやした。またある日阿闍多設咄路の象の那羅祇梨があれだして折あしくその邊を行乞してた佛陀に危害をくはへかゝつた。それは幸に事なくすんだが人々はそれは阿闍多設咄路と提婆達多の企だと噂した。そのうへ　惡象は佛陀の慈悲にうたれてしづまつたのだ　とまでつけくはへた。さきに愚癡と輕薄をもつて一時に提婆達多に靡いた者共は今やおなじ愚癡と輕薄をもつて佛陀をもてはやした。この時提婆達多のもとに殘つてたのは瞿利迦、乾陀驃、迦留羅提舍、三閲達多、其他少數の弟子及び俗信徒と、阿闍多設咄路とその追從者ばかりであつた。提婆達多の心は寂しかつた。

「私は結局敗北者であつたか」

これは幾度となく彼の胸におこる苦しい問であつた。

「私は敗北者として死なねばならないのか」

實際彼の健康は近頃急に衰へた。さしもに强壯であつた彼の肉體を不斷の煩惱が燒きつくしてしまつた。彼は自分の死期の遠くないのを豫想するやうな氣がした。この時にあたつて美しい阿闍多設咄路の訪問は彼にとつて唯一の慰藉であつた。彼の戀はいやました。

提婆達多の教團の者が冬四月のあひだの住居とする見すぼらしい名ばかりの草庵は戔々たる伽耶尸利沙の裾のわづかに平坦な部分にあつた。その一群の草庵の背面に襲ひかゝるやうに峙つた

四字形の岩壁の、そのひとつの凸出部の鼻に古來諸仙の隱栖となつた大きな洞窟があつた。岩壁に包まれた草庵からは曷羅闍姑利呬の方を見渡すことができなかつたがこの洞窟からは眼下に展開する摩伽陀の大平原のたゞなかにその都城をかこむ美しい五つの山を雲烟模糊のうちに望むことができた。提婆達多は修禪といふ口實のもとに屢この洞窟に入つて曷羅闍姑利呬のかたを望み見ては人知れず阿闍多設咄路に思を焦すのであつた。彼は屏風立の岩壁の腹に自然につくられた棧道ともいふべき斷續した岩角をとび渡つて今日もまたこゝに姿をかくした。洞窟のはしへでて見おろせば眼のまふやうな幾十丈の斷崖、そこに繩梯子のやうに垂れさがつたすばらしい葛蘿、そのさきのからみついた牙のやうな岩角は折々翼を休めてゆく鷲の糞に汚れてゐる。斷崖のつきるところから次第に緩慢に傾斜して扇形にひろがつてる裾、それは日光も風雨もとほさぬほどに鬱蒼とした森林に蔽はれて眼にみえぬ溪流の音が涼々ときこえてくる。その裾が平地につゞく邊からは漸く森林が疎らになつて間々に耕地や牧場や池沼や溝渠がまじつてゐる。そして一眸際涯なき平野のなかに、今しも煮えたぎる熱海のごとく濛々とたちのぼる陽炎の潮の裡にかの曷羅闍姑利呬はかくれてるのである。

二十二

美しい五つの山は曷羅闍姑利呬を繞つてゐる。そこにはあまたの溫泉が湧き、寶石が出る。曷

羅闍姑利咽は美しい溪谷に跨つてゐる。そこは大摩伽陀の都で紅顔の王阿闍多設咄路の居るところである。隊商の群は東より、西より、南より、北よりあつまつてくる。彼等は象牙や、黄金や、香料や、絹布や、薬品や、甲冑を積んでくる。曷羅闍姑利咽は旭のごとくに耀き、また蓮華のやうに榮えてゐる。

提婆達多は曷羅闍姑利咽を戀うた。それは乾闥婆城のごとくに空に浮んで幻に見える。

「阿闍多設咄路はあそこにゐるのだ」

「阿闍多設咄路はどうしてゐるのであらう」

阿闍多設咄路は父王を幽閉して以來影のごとくにつきまとふ不安に責められて出遊することも全くなくなつた。自然伽耶尸利沙の精舎を訪れないことすでに久しいのである。

「阿闍多設咄路は新に召入れた女に溺れて私のことなどは忘れてしまつたのであらう」

提婆達多は阿闍多設咄路の若い腕に抱愛される女を思つて妬ましさに堪へなかつた。

「阿闍多設咄路」

提婆達多は恍惚とそなたの空を望みながら我を忘れて呼ぶ。そしてまた捕へられた獣のやうに窟内を行きつもどりつする。彼は阿闍多設咄路が彼を訪づれる時の様子を思ひだす。阿闍多設咄路は時には馬車を驅つてくることもあつたが多くは見事な栗毛馬に乘つてきた。彼は幾度その嘶きに胸を躍らせたか。阿闍多設咄路はひらりと鞍をはなれ、馬を木蔭につながせて精舎のはうへ

進んでくる。そして彼の前に近づくや五體を地に投じて彼の足を頂禮する。彼は踵に阿闍多設咄路の柔い掌を感ずる。その體は赤らみかけた果物のやうに水々しくすらりとしてゐる。若い王は微笑を浮めてすこしくはぢらひながらも流石に威儀をたもちつゝ問訊の言葉をのべる。その男らしい眉のあひだには氣高い憂愁の影が見える。その大きな涼しい眼は青春の力と喜に耀き、甘やかな頬には馨しい血が漲つてゐる。汗ばんだ肌のつや、瓔珞のきらめき、彼はどうしてもそれを忘れることができない。若い王は退き坐して彼の教誡をきく。そのさかしい眼は恭虔と熱心と讃嘆にまじろぎもせずみはつてゐる。そしてあまりに嚴しく教呵される時には面はゆげにせつなげにうなだれてそのうぶな胸の底から懺悔するかのやうにみえる。そのやうにして聽聞しをはつたのち重苦しい感情に惱みながら伏目にたちあがり、しづかに彼を三匝して歸つてゆく。その時彼はいつも阿闍多設咄路をひきよせて抱きしめたい思をするのであつた。

「阿闍多設咄路よ、お前はいつまで私を待たせるのであるか」

提婆達多は戀慕に悶えつゝ屢幾時をこの洞中にすごした。

二十三

夜である。阿闍多設咄路の心は暗かつた。優陀耶が四五日來烈しく指を病んでるからである。彼のまへには若い夫人が泣き叫ぶ幼子を抱いてゐる。韋提希夫人もゐる。耆婆伽もゐる。老夫人

は頻毗娑羅王のことのために見る影もなく痩せ衰へてゐる。阿闍多設咄路は子供のひき裂かれるやうな泣聲に顏をしかめた。それをきくのがたまらないのだ。彼が己に對する父王の愛について父王に語つた時の言葉をかりていふならば、彼は自分の性慾行爲の最初の貴い記念物として優陀耶を盲目的に愛した。彼は摩伽陀を棄てるとも優陀耶を棄てなかつたであらう。彼は夫人の手から子供を抱きとつて膝へのせた。右手の人さし指が赤黑く腫れあがつてぶらぶらになつた爪のあひだから膿汁が流れだしてゐる。あらゆる呪も、耆婆伽の手をつくした治療もすこしも驗がみえない。もはや施すべき方法もない。指も手頸も腐れおちるにまかせねばならぬ。彼は子供の手をとつてじつと指先をみつめてたがやがてそれを自分の口へ入れて強く吸ひはじめた、惡性の毒のうつるのも恐れずに。子供は體を拗つて火のつくやうに悲鳴をあげる。阿闍多設咄路はしつかりと抱きしめてきつくきつく吸ひつゞけた。そして口中に吸出されるどろどろの膿をかたへの器に吐出した。その時彼はわつと泣崩れる老夫人の聲をきいた。彼は驚いて泣きふす母を見た。そしてそれが我子のためだと思つて嬉しさを覺えた、老夫人は大逆の子の生んだ孫ながら流石に優陀耶を可愛がつてたので。阿闍多設咄路はひとりごとのやうにいつた。

「私はかうしてなほしてやらう」

その時老夫人は涙にむせびながらいつた。

「阿闍多設咄路、お前の小さい時に父上はそのやうにしてお前の指をなほしてくだされた」

阿闍多設咄路は覺えずすこし畸形になつた左手の小指の爪をみた。そしていつまでもそれを見つめたまゝひと言もいはなかつた。やゝあつて彼ははらはらと涙をこぼした。そして夢遊病者のやうにたちあがつた。

「父上のところへ」

彼は譫言のやうにいひながらよろよろと歩きだした。そして耆婆伽を先に、老夫人を後に、曲り曲つた廊下をとほり幾つかの階段を降りて牢獄のまへへきた。牢番ががちやがちやと錠前をあけた。ぐわんぢやうな戸がごろごろと鈍な、濁つた、底力のある音をたてゝ重たさうにあいた。まつ黑な牢獄の大きな口から一種異樣の臭氣が冷い息といつしよに吐きだされた。阿闍多設咄路は己を呑まうとする巨怪のまへに立つたやうにたじろいだ。彼は耆婆伽のもつ燈火に足もとを照されながら急な石段を牢のなかへ降りた。

「父上」

物音もせぬ。

「父上」

まつ暗な奥のはうから反響してくる。阿闍多設咄路はなにか黑いものがものもいはずに飛びかかつてきさうな氣持がした。

「大王樣」

耆婆伽がおどおどと呼ぶ。彼らは呼びながら奥深くはひつていつた。そしてあの明りとりの孔のしたに肉の露出した血まみれの足のうらを見せてうつぶせに倒れてる老王の死骸を見いだした。

阿闍多設咀路は母とともに屍體にとりついて聲をあげて泣いた。耆婆伽も石床にうち倒れて泣いた。壁石に生々しくへばりついた血は足を削られてもなほ攀ぢのぼることをやめなかつたこの囚人が死んでまだ間もないことを語つた。

二十四

「殑伽の南岸に於て衆生を饗割するとも決して何等の悪報もない。殑伽の北岸に於て大施會をなして一切衆に施すともまた何等の福報もない」

阿闍多設咀路は富蘭那迦葉の言葉を胸のうちにくりかへしてゐた。

阿闍多設咀路が本心にたちかへつて大赦を發し父王を厚葬したのを見て人々の心は老王を悲むとともに彼をゆるした。とはいへ彼の心はなかなか彼をゆるさなかつた。優陀耶の指は不思議に癒えたけれども彼はすこしも樂まなかつた。苦悶はやむ時もなかつた。神經はますます病的に鋭くなつた。彼は絶えず妄想に襲はれた。人々の私語は日に日に無遠慮に、大膽に、露骨になつてくるやうな氣がした。誰とも知れず到る處で自分を非難してゐる。そして何か不穩な謀計が祕密にたくらまれてゐる。彼は母と、妻と、頑是ない優陀耶と、耆婆伽のほかはもう誰も信ずることができない。今にも王座の下から火が燃えあがりさうな不安を感ずる。身のおきどころがない。足のふみどころがない。彼は夜晝となく危惧に惱んで顏色蒼白になつてゐる。彼は父王の最後の有樣を幾度となく夢に見る。痩せ細つた父王は血みどろの足のうらを見せて石床にうち倒れてゐる。彼はいつもその冷たい耳に口をあてゝ聲をかぎりに呼んだ、すでに遠く飛び去つた魂を呼びかへさうとするかのやうに。彼はこの心の苛責より救はれたさに所謂外道の師を訪うて道を問うた。——彼はもはや提婆達多を訪はなかつた。——併しながらあるひは宿命を說き、あるひは決定論を主張し、または善惡因果を否定する等の彼等の教へは彼に何等の滿足も慰藉も與へなかつた。彼が沈思してるところへ耆婆伽が醍醐と、藥粉をまぜた蜜漿をもつて來た。

「お藥をもつてまゐりました」

阿闍多設咀路は氣がつかない。

「大王よ、お藥をもつてまゐりました」

「おゝ、耆婆伽か」

阿闍多設咀路は耆婆伽のきたのが嬉しかつた。

玻璃の高杯をさゝげた。王はそれをうけとつて不承々々に醍醐を食ひ、それからちよつと藥蜜に

耆婆伽は醍醐を盛つた黃金の皿と藥蜜をいれた

口をつけたばかりで飲みさしの高杯をかたへにおきながらいつた。

「私は藥にも飽きたが六師の說法にも飽きはてた。末伽梨拘賒梨弗も阿耆多翅舍欽婆羅も迦羅鳩馱迦旃延も尼乾陀若提弗も私をすこしも滿足させない。私は今富蘭那迦葉の言葉を考へてゐるところである」

「大王よ、何故世尊のところへはおいでになりませぬか」

耆婆伽は頻毗娑羅王在世の時から深く佛陀に歸依してゐた。

「佛陀か」

王は己が提婆達多の熱心な外護者であつたことを思つてなんとなく氣おくれがした。

「大王よ、世尊は今私の菴沒羅園で雨安居をしてをられます。佛陀の教をおきゝになれば必ず御憂惱も去るにちがひござりませぬ」

王はやゝ久しく沈吟してたが終に說得されて同意した。

二十五

阿闍多設咄路は佛陀を訪ふべく那羅祇梨に乘つて宮殿を出た。降りつゞいた雨が今宵珍しく霽れた。澄明な空に滿月が皎々と照つて濡れた土のうへに木々が黑玉の影を落してゐる。城市を圍む山の彼方に稻妻がほのめいて微かに遠雷の音がきこえる。頭をふり耳をあふつてのつしのつしと步みながら那羅祇梨は大きな踵に氣持よく泥濘の冷えを感ずる。王は月光の溢れる象轎のうちにゆられながら流石にいかほどか爽快を覺えた。やゝあつて王駕は城外程遠からぬ耆婆伽の菴沒羅園についた。前驅のものは手に手に炬火をふりつゝ林のなかへ進んでゆく。菴沒羅の巨木は縱橫に枝をひろげて黑々と繁りあつてゐる。雫が散る。空氣はしつとりと淀んでゐる。どこかにかすかに果の落ちる音がした。那羅祇梨は步度をゆるめ鼻をあげてしきりに嗅いでたが突然何物かを威赫するやうに恐しく咆えた。抑揚のない力強い聲がこうこうと谺に響く。阿闍多設咄路の心は戰いた。彼は事にかこつけて幾度か象をとめさせた。彼は耆婆伽をそば近く呼びよせ己が罪過でも語るやうにおどおどと聲をひそめていつた。

「耆婆伽、お前は私を騙すのではあるまいな」

耆婆伽は直にその意味を察した。彼は心から病王を憐れんだ。そしてやさしく答へた。

「大王よ、常に閑靜を樂むのはかの沙門の法であります」

阿闍多設咄路もそれを知らない譯ではなかつた。

「御懸念なされますな。やがて精舍でござります」

間もなく精舍が見えた。阿闍多設咄路ははじめて安堵した。彼は象轎を降り、劍を解き、徒步して精舍の門に入つた。千二百五十人の大衆の止住するこの精舍はさながら空堂のごとくに靜であつた。阿闍多設咄路は耆婆伽を顧みてとうた。

「世尊はどこに居られるのか」

「あの高堂の獅子座のうへに居られるのが世尊であります」

阿闍多設咄路は講堂のところで足を洗つて上にあがつた。彼は佛陀のまへにすゝみ、佛足を頂禮してのち退いて佛陀にむかつて坐つた。阿闍多設咄路はそつと佛陀を見あげた。佛陀は靜に彼を見おろしてゐた。その刹那王は心の底から畏敬の湧きおこるのを覺えた。冷な智慧をかぎりない慈悲があたゝめ、慈悲の激越を明な智慧がおさへて滿月のごとく淨く圓な佛陀の威容にうたれ王の五體は我にもあらずをのゝいた。王は佛陀にむかつていつた。

「世尊よ、わたくしは今おたづねしたいと思ふことがありますが宜しいでありませうか」

佛陀は答へた。

「王よ、たづねたいことがあるならばたづねるがよろしい」

二十六

王の問はんとするところは沙門に現在の果報があるかどうかといふことであつた。彼はそれについて諸の外道の師にたづねたところ瓜を問へば李を報じ、李を問へば瓜を報ずるがごとくでありこしも彼を滿足させなかつたことを語つたのち佛陀に問うていつた。

「世尊よ、世人の生の營みにはみな現に果報があります。彼らはそれによつてみづから命をつ

なぎ娯樂を恣にするのみならず、父母、妻子、奴僕たちまでもともに樂むことができます。今沙門の現在の修道にも同樣に現在の果報があるのでありませうか」

佛陀は王に告げていつた。

「私がひとつ王にたづねよう。このやうな滿月の夜に王が髮をあらひ、澡浴をして、高殿のうへでもろもろの婇女とともに娯むのを王の下部が見たならば彼はかう思ふであらう　と。然るに彼が後に鬚髮を剃りおとし、三法衣を服し、出家修道して平等の法を行じたとせよ。王はその者のくるのを見て『これはわが下部である』といふであらうか」

王は答へていつた。

「否、世尊よ、さやうの時には私はその人を起ち迎へ、座に請じて禮敬するでありませう」

佛陀はいつた。

「王よ、それは卽ち沙門現在の果報ではないか」

「また次に王よ、如來の法に入つて精勤專念不放逸な者は諸の闇冥を滅して大智明を生ずる。いかに王よ、これは沙門現在の果報ではないか」

その時阿闍多設咄路は座より起ち、佛足を頂禮して佛陀にむかつていつた。

「世尊よ、願くは私の悔過をお受けください。私は五欲に迷つて父を殺しました。世尊、憐み

を垂れて私の悔過をおうけください」

佛陀は王に告げていつた。

「お前は愚にして父を殺した。併しながら今お前は自ら罪を悔いてゐる。私はお前を愍むがゆゑにお前の悔過を受ける」

佛陀はなほ王のために法を說いた。王は教へをきゝをはり佛陀を拜していつた。

「世尊よ、我今佛陀に歸依し奉る。法に歸依し奉る。僧に歸依し奉る。願くは今よりのち終生優婆塞(うばそく)とならんことを」

彼はまた翌日佛陀及び比丘衆に飮食を供養せんことを請うた。佛陀は默然として請を受けた。阿闍多設咄路(あぢやーたしやとる)はかやうにして佛陀に歸依した。彼を苦めたところの矛盾は佛陀の敎誡によつてすこしも解かれはしなかつた。たゞ矛盾をそのまゝに彼をして人の子の常道にかへらせたものは佛陀の偉大な人格の力であつた。

二十七

提婆達多(でーばだつた)は阿闍多設咄路(あぢやーたしやとる)の歸佛を知らなかつた。彼は違和を感じてねてゐた。彼は三聞達多等腹心の弟子たちのなんとなく惱しげな樣子を見てそれを己の疾患のためと思ひ彼等にむかつて折折慰藉の言葉を與へたりした。併し事實はさうではなかつた。阿闍多設咄路(あぢやーたしやとる)の歸佛以來提婆達多(でーばだつた)

及びその敎團の評判はますます惡く、弟子も俗信徒も漸く離散してゆくのであつた。弟子たちは日々の行乞を何かの不都合なしにすることができなくなつた。當時にあつても今日のごとくなんの思慮もなく他人の尾についてむやみに吠えたてることを好む野犬にひとしい人間の多數があつた。その中には嘗て提婆達多(でーばだつた)の最も篤い歸依者であつたものもまじつてゐた。彼らは往日提婆達多(でーばだつた)が自分達にあびせた熱罵を思ひおこして今更のやうに憤懣し、相手の弱りめにつけこんで散々に漫罵を放つた。提婆達多(でーばだつた)はそれを夢にも知らなかつた。弟子たちはそれを彼の耳に入れなかつた。幾日かののち彼はいかほどか輕快をおぼえたので起きて行乞に出ようとした。弟子たちは彼の健康を氣づかふといふ口實のもとに彼をひきとめようとしたが彼はきかずに三聞達多を從へて伽耶(がや)の市に行乞した。形勢は初から面白くなかつた。彼は己の後に惡意的な私語や譏笑をきくやうな氣がした。彼はそれを訝り、また不滿に思つた。しかし彼は生來の驕傲と國王の師たる矜持をもつて昂然として行乞をつゞけた。彼はとある市場のごたごたした四辻を橫ぎらねばならなかつた。そこには蛇つかひがべちやくちやと口上を述べながら自分の頸や腹にぬらぬらと蛇をまきつけてゐた。そのまはりにはその邊の女子供が黑山になつて見物してゐた。彼がそこを通りぬけようとした時に牛の背から荷をおろしてた商人體の男が彼を見つけてわめいた。

「そら、提婆達多(でーばだつた)樣のお通りだぞ。お弟子はなくなる、王樣には見はなされる、尊者樣も浮ば

れめえてや」

提婆達多は愕然として顧みた。その時顔ぢゆう痣のある剽輕者が彼のまへへ出て彼にむかつて唇をつきだしながらわる丁寧に禮拜していつた。

「わからねえ奴らでがす。勘辨してやつとくんなせえ」

くすくすと笑ひ聲がした。大勢の嘲笑的な眼が彼の顏にあつまつた。彼はかつとした。そして詰るやうになにかいはうとしたが終にひと言もいはずにたちさつた、聞くに堪へぬ出まかせの惡態をあびせかけられながら。

二十八

提婆達多は伽耶尸利沙の精舍へ歸つた。そしてその時まで口をつぐんでた三聞達多からはじめて阿闍多設咄路の歸佛の次第をきいた。

「阿闍多設咄路までが退轉したか」

彼はそのほか何もいはなかつた。その日彼は食事をとらなかつた。そして夕刻から高い熱を發した。弟子たちは彼を草庵のなかにねかした。彼は看護の三聞達多等をも退けてひとり思に沈んでゐた。彼はくりかへしくりかへし今朝の出來事を考へた。それは腦髓に烙鐵をあてるやうだつた。彼は詛ひ且つ詛つた。それでもなほ飽きたらなかつた。そのうへ阿闍多設咄路の歸佛は彼にとつて致命的のものであつた。彼は沮喪した。茫然自失した。彼は年來の仇敵悉達多を讃嘆する阿闍多設咄路の美しい聲を想像した、またその掌の柔さを。そして悉達多があの高慢な樣子をして——彼はさう思つた——王の崇敬をうけ、己を罵つて退轉者と呼ぶところを。彼は高熱と瞋恚に悶えながら一夜をあかした。彼は阿闍多設咄路の心をひきもどすべく曷羅闍姞利呬へ行かうと決心した。彼は八つ裂きになる思をしながら夜の明けるのを待つた。生憎翌日から彼の容態は一層惡くなつた。彼はどうしても身を起すことができなかつた。そして熱にうかされて時々譫言をいつた。彼は胸痛をおぼえ、咯痰にわづかに血液がまじつてるのを見出した。彼は愈死期がせまつたと思つた。常に忘れず、そして恐れてた死！　死は何物も抗拒しがたい力をもつてじりじりと目前に押寄せてきた。死！　彼はたゞそれだけを思つた。そして悲も恐も通りこした一種名狀しがたい絶望無力の狀態に陷つて已に死んだものゝやうに僧伽梨のうへに橫つてゐた。これまで彼が如實に見てると信じたところの死はいはゞ死の幻影にすぎなかつた。今にしてはじめて彼は眞の死の姿と、力と、それに向ひ立つところの己を知つた。彼はもはや生きたいといふ張りさへもなかつた。

さうかと思へばまたすこし病勢の衰へた時など不覺にも今一度命をとりとめるのではないかと疑ふ氣持になることがあつた。と同時に生命に對する執著が狂氣のやうに起つた。生きたい。生きたい。この時もし彼になほ幾年の命を約束するものならば彼は佛陀の足をも頂禮し

たであらう。否、佛陀は衆生にむかつて「涅槃」を約束したけれども、それは今提婆達多が渇望するところのはかない生命ではなかつた。

彼はまた牛蝨のやうに腦裡にくひいつた過去の記憶をひとつひとつひきだしてみた。□□城の王子だつた幼時、華やかな青春の時、酒、女、賭博、遊戯、狩獵、その十にひとつも再びすることができたならば！

彼はまた舍利弗や、目犍羅夜那や、諸の阿羅漢たちの淨く靜な生活を心から羨んだ。實に佛陀をさへも。加之彼はこの期に及んで佛陀と最後の和解を望まなかつたであらうか。併しながらこれらはいはゞみな走馬燈の周圍に畫かれて目まぐるしく廻つてゆく樣々の像にすぎなかつた。それらはくりかへし現れるけれどもひとつとしてしばらくもとゞまるものはなかつた。

二十九

それにひきかへその走馬燈の中心の燈火ともいふべき不動な力強いひとつのものがあつた。それは佛陀に對する復讐の念であつた。提婆達多が絶望的假死の狀態よりさめた時にいたくも彼を苦しめるのはこれであつた。己があらゆるものを犧牲にして執拗にたくらんだ復讐をなしとげることなしにみすみす敵をして佛陀の名聲と利養を樂ましめつゝ無念に死んでゆく自分をよそめに見ながら悉達多は己を棄て去つた阿闍多設咄路の新な歸依をうけ得々として勝ちほこつてゐる。

提婆達多はそれを思つて恐しい知死期の嫉妬を燃した。彼は己の嫉妬が不條理だと知れば知るほど相手が憎かつた。彼は幾十年來惡戰苦鬪をつゞけた內外の强敵——惡念と佛陀と——のいづれにも全くうち敗られてしまつた。彼の渴愛する凡てが彼を見棄てようとしてるこの絕體絕命の時にあたつて提婆達多が戀うてやまぬところのものは耶輸陀羅であつた。

「耶輸陀羅よ、耶輸陀羅よ」

彼女と別れてから已に三十年が過ぎた。幻に浮ぶのはまだ花差しい彼女の姿であつた。彼は彼女との戀のもと末を細々と思ひかへした。そしてかの最後の夜に思ひいたつてさめざめと泣いた。別れようとした時彼女はうしろから呼びとめ彼の頸にすがりついて泣いた。彼女は自分が身心ともに彼に弄ばれたことを彼自らの口からきいたその最後の時に於てさへも彼を愛してかはらなかつた。

「耶輸陀羅よ、卿は私をおいて何處へ行つた」

彼は彼女が何處へ行つたかを知らない。はた己が何處へ行くかをも知らない。

かゝる苦惱のうちに彼の命は燈火の明滅するが如くにやうやく終りに近づいてきた。彼は愈決心した。

「私は決して悉達多にひとり勝利者の日を樂しませはせぬ」

夜、彼は三聞達多に鬚髮を剃らせたのち僅に殘る弟子たちを集めて最後の別れを告げ、彼らが

これまで彼にさゝげた誠實と勤勞とを謝した。そしてをはりに彼はいつた。

「私は悉達多に告別のため明日早曉舍羅園姑利呬へ行く。轎の用意をしておくやうに」

皆は顏を見あはせた。併し誰も彼をとめなかつた。安居は明日をもつて終る。提婆達多は佛陀が遊行に出てしまふことをおそれた。夜半、恐しい風が山から吹きおろして草庵をゆすつた。雨が隙間を漏つてしとゞに床を濡した。彼はまつたく眠らなかつた。明け方風雨がやんだ。轎が草庵のまへへ運ばれた。天はまだ暗い。晴れかゝつた雲のきれめに星が淡く光つてゐる。木も草もぐつしよりと濡れて空氣は冷く重くしめつてゐる。伽耶尸利沙はまだおほかた雲に包まれてゐる。提婆達多は人目をぬすんで手ばやく剃刀を法衣のしたにかくした。彼は三聞達多と瞿利迦にたすけられてからうじて立ちあがつた。そしてうす暗い燭火に照されたみすぼらしい部屋——それはこの時までも恐ろしい火宅であつたところの——に一瞥を與へたのちよろめきながら戸口のはうへ力ない足をはこんだ。轎夫のもつ炬火の光をうけて病みほほけたその顏がまつかに見えた。彼は轎に乘らうとした。

「提婆達多」

提婆達多はよろよろとした。そして死人のやうな顏をして何物かを捜すやうに庵室のなかを凝視した。彼は悄然として轎にのせられた。それは忘れもせぬ耶輸陀羅の聲であつた。

三十

菴沒羅園。鉢剌婆剌拏の日。

佛陀は阿難陀を顧みていつた。

「阿難陀、今日は受歲の日である。お前犍稚を擊て」

阿難陀は犍稚を擊つて比丘衆を集めた。佛陀も比丘衆も各露地に草座を敷いて坐つた。佛陀は默然として大衆を見わたしたのち彼らに告げていつた。

「私は今受歲しようと思ふ。私はお前たちに對して過ちをしたことはないか。身口意に於て犯したところはないか」

大衆はしづまりかへつて答をするものがない。佛陀は徐ろにくりかへした。

「私は今受歲しようと思ふ。私はお前たちに對して過ちをしたことはないか」

「……」

佛陀は更にいま一度くりかへした。その時舍利弗は座より起ち、佛陀のまへに長跪叉手していつた。

「諸の比丘衆は世尊に身口意の過ちのないことを觀察します。世尊は今日度せざる者は度し、脫せざる者は脫せしめ、般涅槃せざる者は般涅槃せしめ、救護なき者のためには救護となり、盲

者のためには眼目となり、病者のためには大醫王となり、三界の獨尊にして能く及ぶ者なき最上尊であります。私達は世尊に於ていさゝかの過ちをも見出すことはできませぬ。

私は今世尊に申しあげます。私は世尊及び比丘衆に對して過ちがなかつたでありませうか」

佛陀は舍利弗（しやーりぶとら）に告げていふ。

「舍利弗（しやーりぶとら）よ、お前はすべて身口意の所作に於て過ちがない。お前は持戒多聞、少欲知足、煩惱を遠ざけて正念に住してゐる。お前は智慧最勝にして衆のために法を說いて倦むことを知らない。恰も轉輪聖王の太子が王位を紹（つ）ぐごとく私にかはつて法輪を轉ずるお前はまことに私の長子である。私はお前の身口意の三業に於てすこしも過ちを見出さない」

舍利弗（しやーりぶとら）はまた佛陀にむかつていつた。

「これらの千二百五十人の比丘は皆今受歲しようとしてをります。これらの比丘たちは皆世尊に對して過ちがなかつたでありませうか」

佛陀は若干の者を除いてその他の多くの比丘衆を賞讚した。

その時一人の尊者は佛陀のまへにすゝみ佛足を頂禮してのち佛陀の許しを得て偈をもつて佛陀及び比丘衆を讚嘆した。

浄き十五の日

集るもの千二百
煩惱の岸べをはなれ
生死の海もこえぬ

世尊は大導師
如來は大船師
慈悲の御手をのべて
あまねく衆生を度したまふ

千二百五十人
みなこれ眞佛子
よく愛慾の刺を斷ち
みづから歸命し奉る

三十一

提婆達多（でーばだつた）は曷羅闍姞利呬（らーぢやぐりは）にむけ伽耶尸利沙（がやーしーるしや）の精舍をたつた。彼はあせりにあせつたけれども道

犬

は遠く日は暑かつた。それよりも彼の容態は一層悪かつた。三聞達多等四人の弟子は途中なかば意識を失つてる彼をとある林中に憩はせた。そしてそこに一宿することにした。その夜は美しく靜な夜であつた。提婆達多は極度の衰弱と疲勞と高熱のために一夜をうとうとと眠つた。翌日早曉彼はそこを發足した。曷羅闍姞利呬に近づく頃には日は酷烈に照りつけた。大地は赤鷄のごとくにみえた。彼は病軀を長途轎に搖られて堪へがたい苦惱に呻吟しつゝからうじて城外の菴波羅園についた。それはちやうど自恣の終らうとするところだつた。彼は精舍のそばにある池のほとりに立つた畢波羅樹の蔭に轎をおろさせた。そして三聞達多を使として佛陀に彼が最後の告別をなさんがためにきたことを傳へさせた。彼はむらむらと起る惡念のために急に力づくやうに覺えた。が、三聞達多の戻らぬうちに彼はなんともいへぬ胸苦しさを感じた。彼は水を呼ばうとしたがすでに遲かつた。彼はひとつふたつ魚のやうに喘いだ。そして苦しい長い一生ををへた。

もしそこに我々に救があるならば提婆達多こそまことに救はれるであらう。提婆達多が救はれずば我々の誰が救はれるであらうか。

大正九年四月十七日

有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害しその財寶を掠略することを畢生の事業として紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。いつも十月に首都を發して三ケ月の不撓の進軍をつゞけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、かやうにして印度河から恆河にいたるまでの平原を横行して市城を陷れ、殿堂偶像を破壞することによつて彼は「勝利者」「偶像破壞者」の尊稱を得た。溫暖豐滿な南方平野の烏合の衆は北方山地の勇敢な種族と中央亞細亞草原の殘忍な騎兵の團結した軍隊の回教的狂熱と盜賊的貪慾に燃えたつところの攻擊によつて砂礫のやうに蹴散らされてしまつた。徒らに驕慢な偶像教徒は兇暴な異教徒のまへに慴伏しつゝもみじめな敗北者の陰險黑濁な憎惡と侮蔑をもつてひそかに彼らの宗敵を詛つてゐた。

これは一〇一八年にマームードがヒンドスタンの著名な古都カナウヂのはうへ兵を進めた時のことである。彼の颱風のごとき破壞的進擊の通路にあたつてクサカといふ町があつた。彼の軍隊は行軍の都合上そこに宿營した。そして奪略、凌辱、殺戮等型のごとくあらゆる罪惡が行はれたのち彼らは津浪のやうに町を去つた。

その頃クサカの町から稍遠くはなれた森のなかにひとりの印度教の苦行僧がゐた。彼はもと町にあつた相應な天祠の主僧であつたが、回教軍が最初にこゝを通過した際に祠堂は跡かたもなく

焼き拂はれ、偶像は毀たれ、財寶は掠められ、その後纔に再建されたものも間もなくまたうち壞されて、幾度とない侵入のために終には不幸なその町さへが荒廢しさうな有樣になつたので、彼はたうとう住むべき家もなくなり、その森のなかに形ばかりの草庵を結んでやうやく信仰をつゞけてたのである。彼はそこへうつつてから思ひ出したやうに苦行をはじめた。それを人々は彼が不倶戴天の異教徒を滅して印度教と印度の國を往時の繁榮と光明に蘇らすためだと噂しあつた。實際北方印度の諸王の同盟軍をさへ粉齏したほど無敵な回教軍に對してはそんな風にでも考へるよりほかしかたのないほど彼らは絶望的な狀態にあつたのである。そのためにこれまではたゞ世間なみの天祠の主僧に過ぎなかつた彼は——婆羅門の權威と清僧の譽とは正當にもつてたのだが——偶ひどい苦境に陷つた愚癡な人々の異常に放縱な迷信的な崇敬をうけることゝなつた。

草庵のそばにすばらしい檳果樹があたりに枝をひらげ、その逞しい幹に這ひあがつたおそろしく太い葛蘿がちやうど百足の脚の樣に竝列した無數の纏繞根を出してしつかりと抱きついてゐる。その二つの植物の皮と皮、肉と肉とがしつくりとくひあつてる樣子がなんだか汚らしい手足と胴體とが絡みあつたやうないやな感じをあたへる。その蔭に彼は毎日日出から日沒まで一枚の布片、一片の木の葉さへ身につけぬ赤裸のまゝ足を組んでじつと前方を見つめてゐる。間がなすきがなく螫しにくる蚊虻その他の毒蟲の刺傷のために全身疣蛙みたいになり、そのうへ牛の爪を鉤なりにしたもので時々五體を掻きむしるので——それは多分なにかの穢らはしい邪念を追ひのけるため

であらう——どこもかしこも腫物と瘡蓋と蚯蚓腫れとひつつりだらけで、膿汁と血がだらだら流れてゐる。自ら嚴酷な苦行者であつた濕婆はかやうな奇怪な肉體の苛責によつてよろこばされると信じられてるのである。見たところ彼は五十前後であらう。苦行に痩せてはゐるが元來頑丈にできた骨格をして、目だつて廣い肩と、太い助骨のみえる強く張つた胸をもつてゐる。むしやくしやと垂れた白髪まじりの髪は腦天まで禿げあがり、大きな額のまんなかが眉間へかけて縦に溝がついて、際立つて高くなつた濃い眉のしたに睫毛のない爛れ眼がどんよりと底光りをしてゐる。厚ぼつたくだぶだぶした脣、がつしりした顎、膝頭や踝のとびだしたわるく長い脚、彼は髑髏の瓔珞を頸にかけて繋がれた獸のやうに坐つてゐた。

こゝにまたひとりの百姓娘が毎日日の暮れる頃になるとかならず草庵のそばをとほつて森の奥へ、暫くするとまたおなじ小路を町のはうへ歸つてゆく。彼女はその路、といふよりは寧ろ人の足あとの行きどまりにある猿神の像に願をかけにくるのであつた。彼女は草を刈り酪をつくるまも忘れることのできぬひとつの惱みをもつてたのである。

彼女は不仕合せな孤兒で、幼少の頃から遠い身よりの者の手にひきとられて育てられねばならなかつた。その人達は格別性質が善くないといふ譯ではなかつたけれど一般に人間がさういふ場合にあるやうにかなり苛酷で無情だつたので、彼女は物心づいてからろくに人情のやさしみ溫かみを味つたことがなかつた。そして眠る時のほかは殆ど休む暇もない勞役に鍛へられつゝ今度十

七の春を迎へようとしてるのである。いつたいが丈夫に生れついた體は必要上めきめきと發達し、一方に境遇上の苦勞や氣づかひはその顏に明かな早熟と孤獨の表情を刻みつけて彼女を實際の齡よりはよつぽどふけてみせた。たゞおのづから流れいづることをとめられたあどなさとあてのない深い憧憬とが乳房に乳のたまるやうに健な胸の底に熱く溜つてゐた。

彼女は草庵のそばをとほるのがひどく苦になつた。彼女は自分の屬する種姓の卑いことから殊に聖者を長敬してゐた。それははかり知ることのできぬ深い智慧と、德と、神の寵幸をもち、また呪術によつて幽鬼の類を驅使し、屢ば行力をもつて諸天の意志をさへ强ひることのできるものだと信じてゐた。彼女は聖者の默想を妨げることを懼れ、路を埋めた落葉や枯枝の音をたてるのにさへ氣をかねて跣の足を浮かせながらこそこそとそこを通りぬけた。彼女は息をころして一所懸命自分の足もとを見つめてゆく。それ故見える筈はないのだがなんだか彼がどんよりとすわつた眼でじつと自分を見透るやうな氣がしてならない。聖者は默然として苦行をつゞけてゐた。

そのやうにして幾日かゞ過ぎた。ある日彼女がいつものとほり猿神のところから歸つてきたときに思ひがけなくも聖者は苦行の座から起ちあがるところだつた。彼女ははつとして立ちどまつた。太陽は沈みかけてはゐるがなほけばやかな橙黃の光を横ざまに投げかけてゐる。聖者は徐に起ちあがつたが足が痺れてるのでよろよろとしてかたへの檬果樹の幹に手をつつぱつて身を支へた。

「これ女、そなたは毎日なにをしにくるのぢや」

氣も顚倒した彼女の耳に低くはあるが底力のある太い聲が氣味悪く響いた。彼女はなにかいはふとしたけれど頰がふるへ、息がはずんで頓には言葉も出なかつた。

「なにをしにくるかといふのぢや」

彼女は地に跪いて敬禮したのち聲をふるはせて答へた。

「猿神樣へ願がけにゆくのでござります」

聖者は尊大にうなづいた。その時にはもう幹から手をはなしてゐた。そしてまだともすればよろめかうとする足を踏みはだけて立ちながら彼女の體をじろじろと見まはした。

「それはどういふ願をかけに」

そろそろ二足ばかり歩みよつた。そして頸筋までも赤くなつてちゞこまるのを疑ぐり深い、意地の悪い眼でじつと見すゑながら故ら聲を和げていつた。

「どういふ願をかけにかな」

當惑して右左に眼をそらしてた彼女はやゝあつて憐みを乞ふやうに聖者を見あげた。長い睫毛のしたに黑い眼がうるんでゐた。

「そのやうにおびえんでもえゝ。わしはそなたを助けてやらうと思ふのぢや」

彼女は途方にくれて五體を地に投じ、聖者の足に額をつけ兩手をのばしてその踵をさすつた。

聖者はその溫みを感じた。彼女はやうやく觀念した。そしてしどろもどろに、かつかつにいつた。

「この子の親にあひたいのでございます」

この子をいふ時にせつなさうに自分の腹に眼をやつた。聖者は愕然とした。

「そなたは身重になつてゐるか。そなたには夫があるか。……いや、そちは姦淫をしたか」

彼の目は嶮しかつた。

「その男は何者ぢや。どこに居るのぢや」

彼女の顏は蒼白になつた。

「いふてしまへ。わしに隱しだてをするは愚なことぢやぞ」

彼は靜かに諭すやうにいつた。が、微塵も違背をゆるさぬ婆羅門の命令的な調子があつた。彼女はわなわなとふるへた。それはどうあつてもいへないことだつた。とはいへどうでもいはなければならなかつた。いかに隱しても聖者の天眼はぢきにそれを看破つてしまふであらう。

「はやういはぬか」

彼女は覺悟をした。

「邪教徒で……」

「なに」

「御免ください。穢されたので……」

彼女はひいと泣きふした。後の言葉は喉のなかで消えてたゞ口ばかり魚のやうに動いた。けれども馬のやうに立つた大きな耳はそれをきゝのがさなかつた。

「ばか者めが」

そして忌はしげに彼女を後目にかけながら

「こつちやへこい」

と叱るやうにいつて草庵のはうへ歩きだした。彼女はしほしほとたちあがつた。そして我知らず森の出口のはうを見た。日はもうとつぷりと暮れて今にも夜にならうとしてゐる。早く歸らなくては　と思ふ。叱責や折檻が眼に浮んでくる。彼女はなにかいひたさうに顏をあげた。そしてはじめてよく聖者の身體を見た。赤裸で、どす黑く日にやけて、腫物と、瘡蓋と、蚯蚓腫れと、膿と、血とで雜色の蜥蜴のやうに見える。彼女は厭惡と、崇敬と、迷信的な恐怖の混淆した嘔きさうな胸苦しさを覺えて逃げ出したい氣はしながら憑かれたやうにひきずられて草庵のなかへはひつた。

草庵のなかはまつ暗で土のいきれとむつとする牛糞の臭ひがこもつてゐた。それはその場處を清淨にするために時々牛糞を地に塗るからであつた。聖者は神壇のまへにさぐりより火を打つて燈明をともした。ぱちぱちと油のはねる音がして火花がちつてたがそれがすむとすーと焰が立つて急にあたりが明るくなつた。正面の中央には一段高く形ばかりの壇を設けて粗末な濕婆の石像

が安置してある。それは聖牛に乗り、髑髏の瓔珞をつけて、頸に蛇を纏つた五面三眼の像であつた。またかた隅には少しばかりの藁を敷いて茵（しとね）の形にしてある。それは座具とも食卓とも、臥榻（ぐわたふ）ともなるところのもので、その傍には一個の水甕と、木鉢と、油壺と、そのほか日用、祭式用の僅の道具類がおいてある。それで唯さへ狭い草庵のなかはやつと七八人のものが坐るほどの餘地しかない。聖者は藁床のうへに腰をおろして尻込みする彼女をまぢかく坐らせた。そして濁つた低音で說法でもするやうに語りだした。

「これ女、そちはなんといふことをいふのぢや。そちは邪教徒に身を穢され、穢らはしい胤（たね）で宿してそのうへまだ男にあひたいといふか。そちは自分を穢した男が戀しいか。たはけめが。そちがそのやうに思ふ以上はそちは穢されたのではないぞよ。姦淫したも同然ぢやぞよ。そちのやうな者を濕婆は邪教徒と一緒に地獄におとされるぢやあろ。濕婆がなされずともわしがおとしてやるわ」

彼女はたまらなさうに身をふるはせて泣いた。

「うむ、そちは泣くか。地獄へおちるのが悲しいか。それなら男を思ひきるか。う、思ひきつてしまへ。の、忘れてしまふのぢや。一時の迷ひならゆるされうず。わしはそちが可哀さうぢやによつてゆるしてやる。濕婆の御慈悲を願ふてやる。う、わかつつろ。さあ、わかつたならなにもかも濕婆とわしのまへで懺悔してしまふのぢや、なにもかも隱さずに」

いやも應もなかつた。が、彼女はいふのが眞實つらかつた。それは拭ひがたい不面目をうちあけることの羞恥よりは寧ろ大事の祕密を暴露することの愛惜だつた。根掘り葉掘りきゝほじる聖者に促されて彼女がとかくいひ淀みながら辛うじて語りおほせたその話はざつとかうであつた。

いつぞやマームードの軍がクサカの町に宿營した時のことである。彼女は日の暮れまへ邪教徒を恐れながら市外の流へ水を汲みに行つた。ところが運悪く——とその時は思つた——一人の從者をつれた若い邪教徒の隊長——彼女はその男のみなりや供をつれてることからさう思つた——にばつたり行きあつた。彼らは彼女を見るや否や兩方から肩先をむづとつかまへた。そして隊長のはうが捕へられた小鳥のやうにわなわなしてる彼女の頤に手をかけてぐいと自分のはうに仰向かせ目きゝでもするやうにじつと顏を見つめた。そしてなにか一言二言いつて從者に目くばせした。と、二人して腋下へ腕を入れ吊しあげるやうにしてぐんぐんつれてゆく。彼女は

「御免なさい。放してください」

と泣きながら嘆願した。彼女は呼んだ。叫んだ。死物狂にあばれた。けれども足が宙に浮いてるのでどうすることもできなかつた。彼らは兎か猫の子でもつかまへたやうに面白さうに笑ひながら彼女を天幕の澤山張つてあるはうへつれて行つた。小高いところに一本の巨大な榕樹が無數の氣生根を立てゝ叢林をなしてゐる。その蔭にほかのものからすこしはなれてひとつの天幕がある。そこへ連れこまれた。それが彼らのだつた。彼女はさつきからの必死の抗爭ですつかり力がぬけ

てしまつた。でもまだ執拗に

「歸してください。放してください」

を器械的にくりかへしてゐた。彼女が大人しくなつたのをみて男は従者になにかいつた。従者は

大丈夫かしら　といふやうに用心深くそろそろと手をはなして入口のところに立ちふさがつた。

男は腰をおろして彼女を膝に抱きあげた。そしてかた手で背後からしつかりとかゝへかた手で極

度の恐怖のため蒼白くなつてる彼女の頬をそつとさすりながら譯のわからぬ異國の言葉でやさし

くなにかいひかけた。それをたぶん

「心配することはない」

とか

「どうもしはしないから安心しろ」

とかいふのだらうと思つた。そこでやつとすこし氣がおちついて怖々そつとその男の顔を見た。

彼はまだ二十五六かと思はれた。型のちがつた異國人の顔ではあつたが眉の濃い、眼の大きな、

凛としてどことなし氣品のある顔だつた。彼女はなんとなく　この人は無體なことはしやしない

といふ氣がした。いつしか彼女は彼の帶びてる綺麗な偃月刀に見とれた。その欄のところには

金銀の飾がいつぱいついてゐた。彼はそれを無造作に腰からはづして彼女の手に渡した。その時

従者がなにかいつたら彼は微笑みながらうなづいてみせた。それを彼女は

「なに大丈夫」

といつたのだらうと思つた。實際それでどうかしようとすればできないではなかつたがそんな氣

はちつとも起らなかつた。その時彼は彼女を膝からおろして自分のそばに坐らせた。そしてそこ

にあつた果物をむいてすゝめたのを手も出さずにゐたら彼はふくろをひとつひとつとつて彼女の

唇におしつけた。彼女はまごついて口をあいてそれを食べた。彼は愉快さうに笑つて頬ぺたをつ

つついた。そこで従者を呼んで二つの盞に酒をつがせ先づ自分でひと息にのみほしてからもうひ

とつのはうの盞を彼女の口へもつていつた。彼女はもうなにもあらがふ氣がなかつたし、すなほ

にしてさへゐれば歸してくれるだらうと思つたので大人しくそれをのんだ。甘い、いゝ匂のする、

きつい酒だつた。喉がかつとして、おなかで煮えくりかへるやうな氣持がした。男は彼女の手を

とりうへしたに揺るやうにして拍子をとりながらいゝ聲で異國の唄をうたつた。それをきいてる

うちに身體ぢゆうがかつかとほてつて氣が遠くなつてきた。彼女は心細くなつて　どうぞもう歸

してください　といはふとするのだけれど舌が縺れてどうしてもいへない。そして自分で自分の

身體が支へてゐられなくなつてひよろひよろとその胸に

頭をよせてしまつた。

彼女はこゝまで話してきて急にさしうつむいた。

「犬めが。それからどうした」

聖者はひどくせきこんだ。彼女は火のでるやうに赤くなつた。

「……」

「……」

「……」

「うむ、それから」

聖者は話を目で見ようとするやうな様子をした。彼女は泣き出した。

「うむ、彼奴はその頸を抱へたのぢやな。その腹へのしかゝつたのぢやな。うぬ」

聖者の顔は捩れ歪んだ。

天幕のなかで彼女は裸のまゝ両手で顔をかくしてしくしく泣いてゐた。男は著物をとつて手つだつて彼女にきせた。そしてやさしくじつと抱きしめてさも可愛げに、また心から詫びるやうに涙に濡れた眼瞼に口つけた。彼女は彼の胸に額をよせて息のとまるほど泣きじやくりした。彼に對する彼女の信頼は目のまへに無慙に裏ぎられた。とはいへ不思議にもそれについて彼女の心に驚きや怒りの痕跡さへもなかつた。唯最初に一般に異性との交渉に對する處女の本能的な恐怖があつた。そしてその次に童貞を破られた女性の深い、遠い、漠然とした悲しみがあつた。さきに「信頼」と見えたところのものは實は「信頼」の假面を被つた「許容」であつたのかもしれない。男は金絲の縁縫ひをした著物で涙を拭いてくれながらしきりになにかいひ慰めるやうだつたがも

とよりひと言も通じなかつた。彼はしまひに自分の顔を指さして

「ヂェラル、ヂェラル」

と幾度も繰りかへした。

「私はきつとその人がヂェラルといふ名なのだらうと思ひました」

と彼女はいふ。聖者は脅かすやうにいつた。

「それは名ではないぞ。邪教徒は彼奴らの使ふ惡鬼を呼ぶ時にさういふのぢや。そ奴は惡鬼の力でそちの心までたぶらかしてしまうたのぢや」

「私はやうやつと立つて歸らうとしました。その人は手をとつて助けてくれました。そして外に番をしてた從者を呼んでなにかいひつけました。從者は苦笑ひしましたが多分いひつけられたとほり私を送つて家の近くまでついてきました」

話す彼女よりも聽いてる聖者は一層見るも無慘であつた。

「そちの罪業は深いぞよ。明日から七日のあひだ今日の時刻に濕婆にお詫びをしにこい、必ず忘れるなよ。さあ歸れ。穢れた奴」

彼女はもぢもぢと立ちかねてゐた。やかましい主人がそれを許してくれるかどうかが氣づかはれた。で、恐るおそるその懸念をうちあけた。

「よし。歸つてこのわしがいうたといへ。もしそちをおこさぬやうなれば彼らまでも詛はれる

ぞと」

彼女はすごすごと草庵を出た。森のそとには月が皎々と照つてゐた。彼女は家へ歸つておづおづ一部始終を話した。そして最後に聖者のいつた言葉をも附け加へることを忘れなかつた。唯自分が身重になつたことだけはいはなかつた。凌辱については已にその當時わかつてたので格別のこともなかつたが日參のことになると主人はいきなり顔の曲るほど彼女をなぐりつけた。暇がかけるのと供養の費えるのが業腹だつたのだ。そして結局あとからそれだけ餘分に働いて穴埋めする約束のもとに不承不承に許した。

彼女は一般に邪教徒のいかなるものであるかは知り過ぎてゐた。それは憎むべきものゝなかでも憎むべく、恐るべきものゝなかでも恐るべきものであつた。彼女は彼らを憎み、恐れ、且詛つてゐた。にもかゝはらず……男を憎むことができなかつた。そればかりかどうしても忘れられない……彼女はその思ひ出すも恐しい、奇怪な、しかも濃かに、甘く、烈しく狂醉させたところのそれを思ふのであつた。それは恐しく、奇怪であつたがために益々不可思議な魅力あるものとなつた。彼女はまた自分の腹の子を考へるとき男と自分の間に一種神祕な、神聖な鎖が結ばれたやうな氣がしてならない。そして彼がいつか再び戻つてきて自分とめぐりあふやうな氣がしてならない。彼女は勝ちほこつたやうな氣持ちで覺えずほほ笑みながら胸のうちでこんなことをいつてみる。

「御覽なさい、私はあなたのものです。私はあなたの子を授かりました。私は神かけてあなたのものです。私を抱いてください。口つけてください。一緒につれてつてください」と。

翌日彼女は一椀の供養の食物をもつて邪教徒の天幕よりも怖い聖者の草庵へ行つた。聖者は已に苦行ををへて木の幹によりかかつてゐた。そして無言のまゝ彼女を立ち迎へて草庵のうちへ導き入れた。彼は彼女の捧げた食物を木皿にうけて藁床のうへにおき、水甕のふちを兩手でもつて重たさうに神壇のまへへ運んだ。それには七分めほど水をいれて聖樹の枝が倒にひたしてある。彼女は滅入りさうな氣持で目をふせた。

「これは祈禱によつて功德をつけられた水ぢや。これを神像にそゝいで濕婆の怒りを鎭め、またそちの身體にふりかけて穢れをすゝぐのぢや。そして　罪をゆるしてくだされ、身を淨めてくだされ、福德を授けてくだされ　とお願ひするのぢや。そちは身につけたものはみな脫いでしまはねばならぬ。そしてこの燈明の消えるまで祈願をこめるのぢや」

彼女は石像のやうになつて目をみはつた。

「燈明が消えたら歸つてもえゝ。それまでわしは外に出て居らう」

聖者は外から扉をとぢて歩み去つた。彼女は耳をすまして足音の遠ざかるのをきいた。そしてやゝ暫くためらつたがやうやく心をきめ身に纏つた布片をほどかうとして無意識に神像を見あげ

た、それが生きて見ようとでもするかのやうに。彼女はぐるぐるとほぐしはじめた。立派に發達した肉體が次第しだいにあらはれる。彼女は著物をかた寄せておどおどしながら聖樹の枝をとつて淨水を神像にふりかけた。そして平伏して祈願したのち起きあがつて今度は自分の身體にふりかける。幾度も幾度もくりかへしてゐるうちにやつと氣が落ちついてきた。彼女はもはや猿神に祈つたように　この子の親に今一度あはして　とはいはなかつた。教へられたとほり　罪をゆるして、身を淨めて　と祈つた。それは眞實一所懸命であつた。が、戀人を棄てよう、忘れようなぞとは露ほども思はなかつた。

皿の油はあまりながくはもたなかつた。けれどもそれがどんなにながく思はれたか。燈明が今にも消えさうになるのをみて彼女は手早く著物をきた。さうして濕婆のまへに最後の禮拜をしてほつとして草庵を出た。そしてそのまゝ歸つてもよいかどうかを疑つて見まはしてたとき聖者はどこにゐたのかぢきに姿を現した。

聖者は娘の跪拜をうけたのち草庵に入つた。そこには燃えた油の匂と女の匂がこもつてゐた。彼は燈明をともした。神像は淨水にうるほつてゐた。そしてそのまへにひとすぢの髮の毛が落ちてゐた。彼はやゝ久しくなにか思ひ耽つたのち供養の食物をとつてぺちやぺちやと甘さうに食べた。

その次の日も聖者はおなじやうに娘を殘して草庵を出た。彼は程近い流のところへきた。そこ

は月が水を照してせいせいと明るかつた。そこでいつもの淺瀨に降り立つて水浴をした。まだ癒えきらぬ搔き疵がひりひり痛んだ。それから彼は岸へあがつて默想しようとするやうに足を組んで瞑目してたがぢきに立ちあがつてそこいらを步きまはつた。彼は終日の苦行に疲れ且饑えてゐた。で、また草のうへにべたりと腰をおろして息をつきながらなにかの考に囚はれた。と思ふとまたその邊を落ちつきなくふらふらと步きだした。彼は俛首(うなだ)れながら夢遊病者のやうに追つた。夜の鳥が頭上の枝からばさばさと飛び立つた。彼ははつと我にかへつた。そしていつのまにか草庵のある空地にきてるのに氣がついた。彼は足どめにかゝつたやうに立ち竦んで思案しはじめた。首をふつてもと來た流のはうへ步きだした。と、またひつかへした。そして二足三足步いたがくるりと身をめぐらした。で、そのまゝ地から生えたやうに立つてゐた。彼は苦しげに溜息をついた。彼は脇腹の疵を爪で搔きさばいた。髮の毛をひき挫(むし)つた。が、終に萬力で捩られるやうにじりじりと向きなほつた。そして餌をねらふ獸の形に足音をぬすんで草庵のはうへ忍びよつた。彼は背面の隅の地面に近いところに明りの漏れる小孔を見つけた。そしてそこへいやな恰好に四つ這ひになつて腹をひどく波うたせながら覗きはじめた。

それとは知らず娘は一心不亂に祈願をこめてゐる。うす暗い燈明の光がこちらから裸體の半面を照してふんわりとした輪廓を空に畫いてゐる。しつかりと肉づいてのびのびした身體が屈んだり伸びたりする。むりむりした筋肉が尺取蟲のやうに屈伸する。彼はその一擧一動、あらゆる部

分のあらゆる形、あらゆる運動をひとつも見逃すまいとする。娘はつゝましく膝をとぢ、跪いてじつと神像を見つめたのち祈願の言葉を小聲にくりかへしながら上體をまげ、兩肱と額を地につけて敬虔に平伏する。うなじから背筋へかけ强い弓のやうに撓んで稍鋭い角をなしたゐしきがふたつ並んだ踵からわづかにはなれる。娘は起きあがる。顏が美しく上氣してゐる。娘はかた膝をふみ出し左手を土について身を支へながら及び腰に右手をのばして神像に淨水をふりかける。

……

燈明が消えかゝたので娘はかたよせた著物をとつてぐるぐると身につけはじめた。韻律正しい詩がこはれて平板な散文になつた。彼は非常な努力をもつてそこをはなれた。

彼女が扉をあけて出た時に聖者は足音をさせて森の奥から現れた。そして氣むづかしい、一種いやな顏をして彼女をねめつけて草庵へ入つた。

四日めの午後からクサカの町に大騷ぎがはじまつた。それはマームードの軍がガーズニーへの歸途再びこゝに宿營することになりその先頭の部隊が丁度到著したのである。此度彼の馬蹄が印度の地を踏んでから向ふところ敵はみな風を望んで降つた。インダス、ヂェーラム、チェナブ、ラヴィ、サトレッヂの諸河は難なく越えられた。彼は鬱茂たるヂャングルをとほして「櫛が髮を梳くやうに」進んだ。十二月初め彼はヂャムナ河に達してマットウラを陷れ、更に東して同月末カナウヂに達した。七つの塞をもつて固められたガンガ河上の大都市は一日にして攻略された。

今や彼は山のごとき戰利品を携へて故國へ凱旋するのである。クサカの住民は唯もう戰々兢々としてゐた。併し回教徒は案外大人しくして格別亂暴もしなかつた。それはもはやこの町には破壞すべきひとつの殿堂も、掠奪すべき一個の財寶もないことを知つてたからである。

戰爭と長途の行軍に汚れた軍隊が續々と入り込んだ。負傷者も多くあつた。皆疲れ窶れてゐた。しかも彼らは皆幸福で元氣だつた。彼らは遠征の非常な成功に滿足し、故鄕の近くになつたことを喜んだ。サルタン・マームードは虎のやうに驕つてゐた。また戰利品を滿載した駱駝と驚くべき多數の捕虜がひつきりなしにはひつてきた。彼らは疲勞と絕望とで魂のぬけたやうな樣子をしてゐた。この時波斯（べるしや）の奴隷市場は彼らのため供給過多に陷つて一人の奴隷が二シリングで賣買されたといふ。

娘の心は落ちつきを失つた。彼女は「あの人」が町のどこかに來てるやうな氣がしてならない。もしかまだ來てゐないとしてもきつとくるに相違ない。さう思へば矢も楯もたまらなく戀しく懷しくなる。そしていつかうつとりとして二人があふところを想像してゐる。でももしかして運惡くあの人が　彼女ははつとして空想からさめるともうそれが事實であるかのやうにたまらなくなつてしまふ。と、そのそばからまたなにものかが造作なくそれをうち消してくれる、「あの人」が鐵でゞも出來てたかのやうに。

しかし彼女は邪教徒に見つかるのをひどく恐れた。彼らは彼女を無事にすてゝはおかないであ

らう。彼女は　もう自分の身體をほかの者には指もさゝせたくない　と思ふ。私の體はあの人に
さゝげてある。勿體なくてどうされよう　そんな氣持だつた。
五日めの夜、禮拜をすませて歸らうとした時に聖者はいつになく彼女を草庵のうちへ呼び入れ
た。
「今日はそちに尋ねることがある。そちは彼奴が二十五六ぢやといふたな」
「はい」
「眉の濃い、眼の大きな奴ぢやといふたな」
「はい」
「そのほかなんぞ見覺えがあるか」
「背のすらりと高い、品のいゝ、強さうな……」
彼女は男の立派な風采について語るのが嬉しかつた。彼女は彼が今更どうしてそんなことをきくのか
「左手の小指に怪我をして、そしてやつぱし怪我のためかすこし跛をひくやうにしてゐまし
た」
聖者は脣を噛んでなにかの考に囚はれてゐた。彼女はふと氣がついた。そしてへど
しらと思つた。
それともひよつとして　彼女は疑ぐり深く聖者の顔を見た。彼はふと氣がついた。そしてへど

もどして
「うむ、そ奴ではない。邪教徒めらは折ふしこゝへもくる。そ奴とはちがうてゐた。そ奴でも
懺悔さへすればわしは赦してやる」
そんなとりとめもないことをいつた。彼女は不安と期待に心を亂しながら家へ歸つた。
あとに聖者はひとり瞋恚の焰をもやしながら今日の出來事を考へた。二人の邪教徒の隊長が從
者をつれて多分狩獵のために森へはひつてきた。彼女は不安と期待に心を亂しながら家へ歸つた。
つけて偶像教徒に對する回教徒的嫌惡からその顏にぱつと唾を吐きかけた。——打殺されなかつ
たのが仕合せだつたらう。——彼はかつとして見あげたがどうする事もできなかつた。相手は見
かへりもせずそのまゝ事もなげに語りあつてゆく。彼は無念骨髓に徹していつまでもいつまでも
その後姿を見送つてゐた。それは二十五六の、眉の濃い、眼の大きい、頗る風采の好い男だつた。
そして腰に黃金造の偃月刀を帶びてゐた。彼は　もしや　と思つた。併し唯それだけではあまり
根據が薄弱だつた。それにもかゝはらず彼は　どうぞしてその男が娘を穢した奴であつてくれゝ
ば　と思つた。それは實に思ふもたまらないことであつた。が、それだけ一層さうしたかつた。
彼は娘のいふ男をいくら憎んでも憎み足りないものにしたかつた。そして詛ひに詛つてやりたか
つた。
暫くして彼は森の奥で彼らの一人がその友を呼ぶらしい聲をかすかにきいた。そしてぎくりと

して耳をそばだてた。

娘の歸つたあとで聖者は思つた。

「彼奴だ」

「確に小指がなかつた。そして跛をひいてゐた」

それは娘があゝまで慕ふのも尤だと思ふほど立派な男だつた。彼は娘が男について語つた時のうつとりとした様子を思ひ出した。彼は彼女のまへにいかに邪教徒を罵るとしてもその男を醜い奴といふことは出來なかつた。そしてその點が何よりも先づ娘の心を虜にしたのだと思ふとなほさらたまらなかつた。彼は彼女の口からきいたその時の有様、己を塵あくたとも思はぬ今日の不敵の振舞を思つて全身の血を湧かした。彼は五體をふるはせて齒がみをした。彼は婆羅門の忿怒と苦行僧の嫉妬に燃えた。

第六日。夜はふけた。ヂェラルはひどく醉つた戰友と一緒に天幕のそとへ出た。そこで互に上機嫌で別れをつげたのち彼は從者に命じて客人を見送らせた。彼は戰友の高調子な話し聲のきこえなくなるまでそこに立つてゐた。綺麗に晴れた夜であつた。茫漠とした平野に大きな深い空が紺黑に蔽ひかかつて地平線に近く片輪になつた月が赤くどんよりと沈みかゝつてゐる。彼はひとつ欠伸をして天幕へはひつた。彼は戰友とおもに昨日の狩獵やカナウヂの攻略について語りながら徹發した甘蔗酒を汲みかはした。で、蹣(よろめ)くほどではないがだいぶ醉つてゐた。彼は年はまだ若

かつたが身分の高い勇敢な騎士だつた。そして今度の遠征にも度々拔群な働をして敵味方に驍勇を示したし、獲物も運びきれぬほどあつた。赫々たる功名と戰果は彼の心を此上なく幸福にした。

彼はふとこのまへこゝに宿營した時に慰んだ娘のことを思ひ出した。

「可愛い奴だつた。つかまへられて蜥蜴(ばつた)みたいに跳ねをつた。だが己はあとで可哀想になつた。そして歸してやる時ちよつと名殘惜しいやうな氣がしたのはへんだつた。とにかく可愛い、いゝ奴だつた。自惚れかもしれぬが奴己に惚れたやうな様子もみえた」

なんだかもう一度あつてみたいやうな氣もする。

「ひよつとしてまたこゝらあたりへくればいゝが。併し明日は多分出發せねばなるまい、後續の部隊も大概ついたやうだから」

それから彼は退屈な行軍について考へた。そして最後に狂氣と歡呼をもつて迎へる故國の人々を。

死のやうに靜な天幕のなかで彼は卓子に頰杖をついてぼんやりとそんなことを思つてゐた。その時彼はなにか人のけはひがしたやうな氣がしたので顏をあげて鎖した入口のはうを見た。

「あれが歸つてきたのかな、すこし早すぎるが」

天幕が內へふくらんでゐる。

「醉つぱらつてるんだらう。それにしてもうんともすつともいはないのはをかしい」

で　ひとつおどかしてやれ　と思つて

「誰だ」

と怒鳴つてみた。默つてゐる。いよいよぐんぐん押してはひらうとする。押し倒してしまひさうな勢だ。

「誰だ」

彼は立ちあがつて入口のはうへ歩み寄つた。そして鎖しの紐をほどいて顔を出すや否や

「あつ」

といつてとびのいた。と、解き放たれた入口からぬうつと變なものがはひつてきた。それは確に人間の形はしてるが素裸で、全身紫色にうだ腫れて、むつとするいやな臭ひがする。そしてくわつとあけ放つた目から汁が流れだしてゐる。腐れかゝつた屍骸なら戰場で見飽きてるがこれは生きて歩いてゐる。

「なんだ貴様は。化物か　死神か」

相手は默りこくつて盲滅法に、しかもまともに彼のはうへぎくしやくぎくしやくと關節病者みたいな足どりで寄つてくる。手には研ぎすました小刀を握つてゐる。ヂェラルは覺えず身をひいた。

「何者だ。なんとかいへ」

相手はかな聲ですこしも感じない。ヂェラルは廣くもない天幕のなかを卓子をまはつて二回まで後じさりした。相手は正確に彼の足跡を踏んでひた寄りに寄つてくる。彼は未だ嘗て知らなかつた感情——恐怖——に襲はれた。彼はこのえたいのしれぬ敵に對してどうしてよいかわからなかつた。その時偶然手が刀欄にさはつたので彼は殆ど無意識に偃月刀をひき拔いた。が、狼狽して相手を梨割りにはせずに脹らんだ腹をめがけて力一杯に突いた。幸ぶつりと突きとほつた。熟れた瓜みたいに柔かつた。相手はどさりと倒れると思ひのほかすこし刀に支へられると見えたばかりで前とおなじ歩調で、しかも盤石のやうな力でそのまゝ眞直に歩いてくる。そのために刀が欄もとまでとほつて背中へ突きぬけた。そしてヂェラルが刀をぬかうぬかうとあせつてるうちに相手は突然痙攣的に右手をあげて小刀をぐさと彼の胸に突きさした。ヂェラルはどうと倒れた、そのうへゝ折重つて化物の屍骸が。

第七日。娘は二重の意味で今日が待ちどほしかつた。それは滿願の日であるゆゑに、また何故かは知らずいやでならない日參の終る日であるゆゑに。で、いつになくいそいそとして出かけた。彼女を迎へ入れた聖者はいつものとほり燈明をともしたがそのまゝ徐に話しかけた。

「これ女、邪教徒らはまだ町に居るか」

「はい」

「皆居らうな。少しはたつたものもあるか」

「いゝえ。でも明日はたつのではないかと思ひます。昨夜夜中から大騒ぎをして、そして今日暮れ方あの大きな榕樹のところに集つてなにかお祭のやうなことをしてゐました。怖いので誰もそばへ行つて見たものはありませんがきつと出發の支度が出來たのであつちの神様を祭つてゐるのだらうと皆がいつてゐました」

聖者は大きくうなづいてじつとなにか考へてゐる。彼女は「あの人」が必ずその中にゐて、そして明日はほかのものと一緒に行つてしまふやうな氣がして胸一杯になつた。

「畜生めらが。早う行つてしまへ」

やゝあつて聖者はぼやけたやうにいつた。

「今夜はいよいよそちの身も淨まるぞ」

「……」

「濕婆のお告があつた……」

「ありがたうございます」

彼女は合掌してわづかに身をこゞめた。

「これで滿願ぢや。氣を確にもてよ」

「はい」

「濕婆のお告ぢや、その腹の子をおろせといふ」

「ひえつ」

彼女はまつ蒼になつてわなわなとふるへた。そしてわつと泣きふした。

「どうぞそれだけは。お願でございます。聖者様、お慈悲でございます。そればつかりは御免くださいませ」

「たはけめが。そちは子がかはえゝのぢやな。これ、よう考へてみいよ。それは邪教徒の胤ぢやぞ。畜生の子ぢやぞ。そちは起水のついた畜生が腹のなかへしこんでいつた血の塊がいとしいか。そちは腹から穢れて居るのぢや。畜生の血臭くなつて居るのぢや。その子は口が耳まで裂けてゐやうぞ。尻尾が生へてゐやうぞ。おろしてしまへ。いやといへば必定地獄ぢやぞよ」

「それはご無體でございます。この子は私の子でございます。誰の子でもありませぬ。この子はどうでもはなされませぬ」

「さてさて情のこはい女め。そちは地獄が恐しうはないか」

「私は地獄へ墮ちてもいとひませぬ。それだけはおゆるしなされてくださいませ」

「ゆるせといふてそれがわしにできることか。お告ぢやぞ。さあどうぢや。おびえることはない。わしが按排ようしてやる」

「いえいえとんでもない。私は神様にお願いたします」

「神の仰せはわしがとりつぐのぢや。わしのいふことは卽ち濕婆の神意ぢや。どれ」

「いえいえどうあつてもなりませぬ」
「まだいふか。こうれ」
聖者は右手をのばしてきりつと彼女の頰を抓つた。
「あ、かにして、かにして……」
「うむ、いふことをきくか。さあ」
「あれー」
聖者がいざり寄つて著物の端に手をかけるのを振りほどいて逃げようとした。彼はすばやく立ちあがつて後ろから抱きすくめた。そして恐しい顔になつた。
「男の命にかゝはるぞ」
彼女ははつとした。……
「きかずば男を詛ひ殺せとの御告ぢや。何十何百由旬はなれてゐようとも彼奴の五體は蛞蝓(なめくぢ)のやうに熔けてしまふのぢや。それはそれはむごたらしい苦しみをするぞよ。の、これ、男のためぢや。……」
……
「おゝ、氣をうしなつたか」
聖者は悪夢から醒めたやうに我にかへつてほつと息をついた。彼が毎夜竊に貪り見た女の肉體

は今その上半を露出して膝のまへに横はつてゐる。彼はその一個處から他の個處へと目をうつした。
「おほ、このちゝ」
その絹のやうな肉の袋は逆り出ようとする生氣ではちきれさうに張つてゐる。彼はそのひとつをふつくらと摑んでみた。それは大きな手にあまつてぶくぶくとはみださうとする。いかにも女らしい肉と脂の感じである。彼はまたよく肥えた上膊を握つてみた。……彼は娘の覺醒するのを懼れて……それをまた先のとほり精査した。彼は……髑髏の瓔珞をはづしてかたへにおいた。そして眼を血走らせて……
その前夜回教徒はヂェラルが奇怪なものと刺しちがへて死んでるのを見出して非常な騒をした。彼らはそれを敵意をもつたクサカの住民の悪病にかゝつたものだときめた。夕刻彼らはわづかの形見だけをのこして身分と勳功の高いヂェラルの遺骸を嘗て彼が天幕を張つたことのある楮樹の蔭に埋め、そのうへに出來るだけ大きな石を置いた。彼らはこの誰にも敬愛された美しい若い騎士の思ひもかけぬ無慘な死を悲しんだ。夜に入つてマームードの怒と人間の野性がクサカの町にむかつて爆發した。回教徒は全市に放火して灰燼に歸せしめ逃げまどふ住民を手あたり次第に殺戮した。暗い大きな平野のなかにクサカの町の滅亡する火焰と赤黒い煙とがもの凄く舞ひあがつた。それはちやうど彼女が草庵のなかで氣をうしなつてる時であつた。